

都々逸本翻刻

菊池真一

菊池所蔵の都々逸本を翻刻紹介する。

一、しんはんとゝひつ（天保三年写。版本からの写し）

于時天保三辰とし写之

しんはんとゝひつ（表紙）

ぬしのこん夜はわしやまつかぜよどこへゆきひら中納言

いやじゃおかんせそのてはくはぬだましもんくはこりている

とかく恋路はあとさき見ずのふりよせんこそじよがふかひ（一

オ）

いけんしられてさしうつむひてきてはいながらぬしのこと

おもひまはせばはかないわたしさぞやあこぎはなさるまひ

ほれていれども手なひわたしさぞやあてにはなさるまい（一

ウ）

ほれた誠をわしやゆいかなてゑんりよするほどうたがわれ

？ゑのつるべがみぢかいゆへに主しの心が汲にくひ

いつもぶすいなあのあけがらすなひてくれるもきやく（？

）（二オ）

いかなあほでも恋路の道はほむにおかしなものじゃひな

つるし車じゃわしやなけれどもさらにおもひがやすまらぬ

かよう／＼とゆわんすけれどもおしになるのははし独（二ウ）

だしになるとはかつをのように（？）

なんぞあなたをだました事があらば言わんせきましましよ

ひう？はからしつとめのそちにだます手がらはさとのつね（三

オ）

つとめすれども気は住吉のかとふ身をもつ五大力

くるとひの／＼あなたのくせはわたしやいぢからとめはせぬ

とめてをくれななしとまる帯や紙入どこにある（三ウ）

おびやかみいれわしや番やめたそこらさがしていなしやんせ

いねと言たら帯とけかけてむりを言にも程ある

むりをゆおゝかくる度毎にわしに（？）（四オ）

おれがたのまん（？）ひざをつめられあわんもの

ひざつめろか背かもたゝけもそこちらよらしやんせ

わしの心はなのはのうたよほかのざしきはうはのそら」(四ウ)

主はわたしは??へのようにへだてさんして?附を

ほれて行時わするゝものかわたしやひちから止めはせぬ

うちにはやほにまかせておひてこゝへくるのもおまゑゆゑ」(五オ)

おふたゆめとうつゝでなひてあたり見まわす後のゆめ

けふは取分あひとてならぬいつにおろかはなければども」(五ウ)

つらひかなしひぐちならひとせねばそれはれぬことかひな

今のつらさをまたます逆もなんの今さらなきはせぬ

花咲り??さいふで暮すすへの落ばたがひろう」(六オ)

おまゑあるゆへほふはひ衆へいらぬ気兼をするわひの

わけを言ずにかんしやくおこしそれ手切気か

しんにふさひで?見れば落る涙の薄化粧」(六ウ)

いわにせかれてわかれし水もすへは一ツになるわひな

千両持ても一文なしのひんなおまへがなをかわひ

主はいまごろあふかたうちでいやなそろばん引寄て」(七オ)

よひのくぜつがわしやしやくのたねふけてさしこむまどの月

命ちかけてもたてたひおまゑぎりよぢせつよぜひない

思ひおふたるふたみ浦よ浮名浪いとやせん」(七ウ)

恋といふじは心のおによらくなこのみをせめまする

いけんせらりよがはじめらりよが主のことならいとやせん

見てみられぬふりを見まひすればみだれがみほどもにかゝる

たとへわたしはどふごのゆでも水にあわねば暮されぬ」(八オ)

にくてたゝくと思ふなきせるかわひけれこそ口をすふ

あひた見たさにとびたつ思ひかこの鳥かやうらめしや

文はやりたしかく手はもたずやるぞ白紙ふみとよめ

かひた文さへよめなぬわたしましてしらかみよめにくい」(八ウ)

はなもよくきけ生あるならばわしがふさぐになぜひらく

ないてこゝろがはれゆくならばおよそせみにはおとるまい

かわひノゝがやかたへしれていまはいけんのざしきろふ

人のうはさも七十五日さのみあんじることはない」(九オ)

親がなければせけんのはじとすてゝあなたへみをまかす

つらのにくさよあのきりノゝすおもひきけノゝきれとなく

酒をちからにのんではいれどおもひだすからりにせまる」(九ウ)

おもひおもわれおもひありとわかれがなかよかる

神田からすが吉原すゝめわたしやくるわでかごのとり

二世とかわせしこけんのふしもつらやはかなやみづのあわ」(十

才)

ゆめかうつゝかまくらのしたでかわひ男の音がする

いろをするなどいわんすけれどはなじや若きじやちらぬうち

もゝよかよふてもまだあひたらぬちとせあいたや主しの身に「

(十ウ)

あさな夕な神信じんもぬしにさひなんないよふに

はやくこの屋をめで度かしくぬしのおそばで針りとごと

かをにやまよはぬすがたほれぬこゝろゆきなにやわしやまよ

う「(十一才)

つま子あるのをしやうちでほれてかさね井筒のなんその

すゞりひきよせ筆とりなをしなんとかひたらさくである

(?) とてさみせん引ど歌のもんくでおもひ出す「(十一

ウ)

酒となぞらへきちがい水をたれがのませてさはがする

いけんさんすないけんはきかぬいけんしよふまにや金にやかし

やれ

ふみのたよりもはれてはならぬうはさするのむねのうち「(十

二才)

京ばしものとは夢さらしらず程のよひので気が附た

せけんしらずのわたしゝや逆も言たことはちがやせん

内藤しんじく馬くその中あやめさくとはしをらしい「(十二ウ)

ふかひねがひはわしやなければもまゝにあわせてくださんせ

すひがまはればない事さひもなにかしみ／＼??

しのびづまもちや気にくはたへぬなひがましかや気が?な「(十

三才)

二、「風流」よしこの集蘆の華(嘉永五年刊)

「風流」よしこの集蘆の華(表紙)

(絵)(見返し)

(絵)(序一才)

梅は匂ひよ桜は華よ酒は三すじの拍子がなくばとんと賢に入

かれはまいてほんにしんきの酒宴よ兎にも角にも陽氣ぶし今世

にもて翫ぶよしこのにしくものなしされど新句も古句となり古

きも新に打かへしむかしを今になすよしもがな「(序一ウ)花

の難波の色里に今?々唱ひもてはやす大流行の大新もんくのか

ず／＼を拾ひ輯て小冊とし名を芦の花よしこの集と題して諸君

子の一覽に備て一笑を当世とす書房ぬしにかはりてかく申もの

は

小の原公春

嘉永五子春「(序二オ)

人はどのよにいおふとまゝよすいたどうしの室の梅

艱苦しのいだあの梅の花今は笑顔の春の色

につと笑ふも蒼の花よこゝろせかるゝ室の梅

時節をばまつと心のたけをも通りさきもにほひをふくむ梅

高い山から下見る計りうはき見へてもねがしれぬ「(序二ウ)

梅は笑へど啼鶯は同じみうちでありながら「(一オ)

ぬかす羽織のその手のかるさ着せる羽織の手のおもさ「(一ウ)

羽織かた手にモウいぬノゝとそばをはなれず口ばかり

さゝのおあいがふしぎの縁で後は青竹しげりあひ

里にそだちしあの空豆も今ははぢけてかねつける

つとめするのもぬしあるゆへにはやう女房といわれたや

ぬしに心はありまちしぼりどうぞ女夫に鳴海染「(二オ)

おもふ花をば一トもとのこしほかはあだ花ちりしだい

かざすさくらもむすびしゑにしあだにちらさぬ下天心

深山宵のさくらじやけれど里に詠と花さかす

まてば彼岸のさくらを思ふそれにいつまで遅ざくら

おもひノゝに短冊つけて花にゑにしを結びぶみ「(二ウ)

あだな風にはつい散やすい咲たさくらがよいけん「(三オ)

一筋におもひこんでもしんきなものよ胸は千筋のもつれ糸「(三

ウ)

雨が仲人の相合がさはぬれるはじめの辻うらか

わしが心は深川鼠それにはきはきな浅黄染

いたい辛抱こよつた一字反古にするとははらがたつ

思ひノゝを書筆さへも今はこしをれ捨られる

こゝろわくノゝ気はもつれ糸情ないのでとけかぬる「(四オ)

それとひとことおもはせぶりはにくやつれないほとゝぎす

忍ぶ垣根の卯の花月夜かげをかくしたほとゝぎす

もうかノゝと待身のつらさこゑはすれどもほとゝぎす

かげの花でも実がなりやつよいあらい風にもあてさゝぬ

忍ぶ恋じは恋紫の色を樂しむ杜若「(四ウ)

まてばうれしいこゑ聞そめてわしじやあけてとほとゝぎす「(五

オ)

ぬしの手拭さらしときはめ外の色にはまよやせぬ「(五ウ)

うれしさを袖につゝむと古歌にはあれどわしは涙をつゝむ袖

沖の石かよわたしの袖は涙でかはくひまはない

逢てばつかりわかれがなくなんのこのやうにかなしかる

ぬけたかんざし直にもさゝず問ふも豊にはづかしい

こゝろ飛石嬉しい座鋪あがりそめたも縁の端「(六オ)

例の癩かとなさけなさふにもとをたづねて見やしやんせ

あはぬつらさに枕によれどしんき／＼で眼もあはず

ぬしにあはねばわしやいつ迄も心のこりがあるわいな

田葉粉をばのんでまつたるうらみの数にあれた舌まで言い出す

おもふまいぞと思ふてみれど心でこゝろがまゝならぬ「(六ウ)

くぼみまないたみれんなけれどきれたやうでもきれかぬる「(七オ)

わしがいきぢははさみのやうに跡へひいてはまにあはず「(七ウ)

アイと口には言ふても居れど線香たつのを待やいと

枕ならべてねる夜はたのしあすはどうなる事じややら

義理の道筋おぼへていれど仇な恋から??迷ふ

おもひ／＼が恋路の重荷肩のやすまるひまはない

あけのからすを待夜はつらやそれも勤の得て勝手「(八オ)

チャント枕の紙までしりへまつているされ月ながめ

泣も笑ふも恋路のならひ月も照る夜とくもる夜

月にむら雲花に風中をしのいで笑ひ顔

恋の闇路にまよふて居れどあへばうれしい月の顔

ぬしのやくそくとび石づたひかきのうちから菊の花「(八ウ)

わしが思ひは十五の月夜いつもぬしをばまつ宵と「(九オ)

打よする浪もとだえて干潟となれば芦も角ぐむうらみ顔「(九ウ)

誠だになきとおもへばながれをすてゝぬしのみなとにかゝり舟

もゆる思ひは鵜舟の簞たべるものさへのどこさぬ

ぞつと恋風ほにあらはれてぬしのみなとにかゝり舟

子種もろふて鳴戸を越て島のさくらと人の花

わしが思ひは千尋の海(なみ)をぬしあだ浪外へうつ「(十オ)

ぬしにうらみのかず唐崎にこぼす涙のよるの雨

昼はこゝろもまぎるゝけれどあはぬからさきよるの雨

わしもこれからうわきをやめて世帯かためて女夫(めうと)ば

し

瀬田は大事とむかしをわすれ夕日照そふわらひ(ママ)

なみだ落雁しんきなことよまでどしんきな堅だより「(十ウ)

比良にたのめどうれしい返事にくや言ふては暮ぬゆき「(十一オ)

矢橋帰帆を思ふてまでどぬしはぐれ／＼丸太舟「(十一ウ)

昼はひめもすおもひに暮て夜は蛩で身をこがす

関所／＼の人目をつゝみ長(ながい)返事の通り札

水の粟津とあんじたけれど晴る嵐の笑ひ顔

こよひお顔を三井寺なれば聞てうれしくれの鐘

思ひおもふは石山なれば秋もあかれぬ月の顔」(十二才)

先へまはるが恋路のならひ心せかるゝ初がつほ

こゝろがらとて苦勞をもとめ勤大事が気がやすい

心妹背の山ほどなれどそれにおまへはあくた川

丸い顔にはほれてがおほいよくの一ぢにはづかしい

鼓弓はかつて忍びの駒は琴もしづかにはなし合い」(十二ウ)

チヨツトちぎつたよむきの団子 事(しよくじ)豆のこさとう

の世話」(十三才)

はるのはじめにひらくる花はこがね色なる福寿草」(十三ウ)

しんにつきそひねじめとなつて床のうちでのさし向ひ

床のはなさへ水上げかねてまでど約束違ひ棚

深いおもひを汲でもくれずいつもかぶりをふり釣瓶

女夫(めうと)釣瓶じやわしやないけれどあふて咄しがまゝな

らぬ

鶴を見よとてすつぽんさげて鶴はのぞいてかむりふり」(十四

才)

おもひますぞへ思ひがますとかほに思ひがますつらみ

時にあふひのうれしき首尾に末をかけたるもるかづら

逢ふせ首尾する籬じやないが文の棧し恋渡る

うらみついたるふたりが中をにくやめに立藤のたな

まとひついてははなるゝものかゑにし長かれふじのはな」(十

四ウ)

まとひついでるあのふじの花今は日影の花ざかり」(十五才)

今朝はさかりのあの朝顔も今はやつれて水鏡

宵にやつぽみの朝顔さへも主の情で花咲す」(十五ウ)

嘉永五壬子三月

京都 満留や善兵衛

伊せや正三郎

浪花 かじまや清助

あふみや善兵衛

かしはらや藤助

かしわらや義兵衛

板行」(裏見返し)

三、粋の懐 初編(都々逸以外も翻刻)

すいのおところ」(表紙)

絵」(見返し)

絵」(序才)

序

隆達が。吹よ河風の吹流れてより。世々に流行する。小歌の
かず／＼。枝もさかへ。樹の芽も榮ふる御代と共に。限り尽せず。
呉竹の節の間も。諷ひ止むるひまこそなけれ。されば今。其流
行におくれざる。小歌を集て梓となせば。ソレ四方の通客達。
宴席登楼(うかれあすび)の節などに。是を携へ是を諷へば。
なんでもござれに引とらさぬ。骨頂粹を其俣に。粹の懐と題す
となん。

一荷堂主人誌」(序ウ)

大つゑぶし

おさかづき。いただきましやう。ありがたくちようだひ。ちよ
つとおあい。おつゞけおかさね。ちり升／＼る。ありますさい
づちおさへませう。今入三ばゐおつぎめお仕合。御手もとはゐ
けんこれは御見ごと。どうじや杯一やりんかちよんべけづりん
か。むかずにぐつと引なされ。モウ／＼いけん。すき腹こたへ
るした地があるのんじや。いちやこちや」(一才)いはずとす
なをにわつさり白猪口まわしてこれでおとり

同かへうた

酒屋男と。ねんごろすればな。十六嶋田がでゝきてまねく。お
婆々しよんべすりや。狐がのぞく。棚のだるまさんをちよいと
おろし。奈良の大仏鼠がかぢる。しよんがばさまはよぼけたば
さん。見たいな／＼文箱のうちを。お医者／＼と名ばかりおゐ
しや。三」(一ウ)国一の。さくら見よとて名をつけて。斎藤
太郎左衛門に。やなぎ／＼。夜桜。熊坂。因州いなばにこれな
アおやぢどん

同かへうた

好とおもふた。その時に。思ひきる気があつたなら。これほど
の。せつなさを。しらずに樂でくらすもの。ほんにおもへば今
さらに。誠づくめが身の仇と。なつて互ひに身のつまり。辛苦
万苦はいとはねど。もしやお前に。ひよんな」(二才)病が出
ようかと。あんじ升ると膝におもわず露なみだ

同かへうた

逢た夜の。心根を。おもひだしては今さらに。寐てもさめても。
わすられぬ。すぎし別の一ことを。案じすごしてなみだぐみ。
ひとり転寐(まるね)の手まくらに。にくるかあいの二道が。
なぜかさきへはとゞきかね。しんきやと。たゞみざんやら辻う
らも。合ぬつらさにいわれぬこゝろのみだれがみ」(二ウ)

同かへうた

ちよつとしぐれの。雨やどり。濡たる袖がゑんとなり。しばし
仮寐の。むつごとを。わすれかねたる実とじつ。あひたい見た
いがかさなりて。しのびあふ夜もいつしかに。人眼の関にへだ
てられ。いまはなみだに身をしぼる。袖たもと。うきなばかり
をたてられて。いつまあうれしくこの苦をわすれてそへるやら

同かへうた「(三オ)

はるさめの。しめやかに。ひざにもたれてなみだぐみ。なぜこ
のやうにわすられぬ。にくみおとこがかわいふて。ほんにつと
めの身のうへは。ほれてほれたといふたとて。つらや手くだと
うたがはれ。いつそどうしやうといゝながら。なみだぐみ。む
ねにまへがみおしあてゝ。どぶぞわたしのすることらへてく
ださんせ。

よしこの「(三ウ)

まことつくせどまだ疑のかゝる此身のやるせなや
かなしくくらししてたまさかあへばつらさ忘れて嬉し泣
さした手枕抜さしならぬ実とふじつの右ひだり
捨て見さんせ斯なるからはおまへに習ふたいきぢでも
初手はてくだにさす手枕も今ぢや抜れぬ身のつらさ「(四オ)

追れはらわれして飛蠅も放れかねたる主のそば

かたみ心はもふ止さんせ心太さへいるでうる

薄くなるからあの甘酒もそこを見せては水くさる

添て居ながらに身はあさ東風に便りないぞへ蓮の露

おもわぬ口絶に涼が更てたがひに袖さへしめり勝「(四ウ)

おもひすごしの口絶がつのりあとは命の延ちゞみ

つばにのろけて寐たのがばちで出るにでられぬ手長蛸

早う三すじのつとめを止(やめ)ておもふひとすじ遂るやう

古いやつじやがざこばのしけで鯛のないほどおもひつめ

やがて俣にも鳴子の引手きれて稲とはどふよくな「(五オ)

宵にや程よく合(あはし)た鐘がうつてかわつて別れさす

あわぬ癩より逢たる今朝の鐘で別るゝ身のつらさ

今は重るおもひが叶ひ丸ふそうたるかゞみ餅

枕当がみひざすりよせて吸つけたばこの口うつし

浅瀬と知らずに乗上られて引にひかれぬ登りぶね「(五ウ)

嬉し泪を悟れまると人眼かざしの袖あふぎ

羽をり着せかけ又さきの首尾胸で結だ別れ際

いやな客には水つば抱せあとで大きな尻がくる

おなじ船でもわしや引舟よあとのお祭り知りはせぬ

昼も正月摺鉢まわししのび隠れて乗(のせ)たがる「(六オ)

主を松むし鳴音を止ばもしやそれかと気がもめる

すぎし一言まだ耳底にあつて夜ごとの夢に迄

おもひ切たことばのはしにどうか未練の残り口
逢ぬ其夜のしんきに連てともに枕もいぢられる

すがた見せず憎いよ風はそつと通ふて花ちらす」(六ウ)

一 仲ぶし

今朝のわかれに。袖とめて。かわく間もなき。土手のつゆ。四
つ手のたれをおろしても。またもなきゆく明がらす。ゑりに風
しむゑもんざか。

同かへうた

けふはいかなる吉日よ。めぐりあふたるうれしさに。飛たつよ
うに思へども。人眼あるゆへまゝならぬ。しんきしん苦の世の
ならぬ。」(七オ)

同かへうた

愚痴になるほどいとしさの。うそもまこともうちあけて。夜ご
とにあわにや気がすまぬ。ぬしの手くだにのせられて。どふな
とさんせいとやせぬ。

同かへうた

わすりよまいとてこれほどに。おもひおもはれした中を。ひよ
んなわけから当座かり。今はかほさへ見られずに。うつゝぐら
しをさすわゐな。」(七ウ)

伊予ぶし

稻ほ拾ひてかりがねひとつ。女夫(めうと)くらすは中たんぼ。
土手の夜かぜが。れんじもれきて。三谷でかすかにかみぎぬた。
たそやあんの。かげくらく。たまひめあたりの狐火も。ちら
ほらと。見へずみへず火。引(ひけ)四ツすぎから間夫のひる。
きやさんせ。

同かへうた

まゝに逢れぬ身をもちながら。あへばたがいに」(八オ)けん
くわして背なかあわして。しばし寐むれば。金棒のおとでめを
さまし。こちらむかんせ。中なをり。しもせぬさきからあけの
鐘。にくらし。とてもそわれぬ。ゑんなら一所に死にたひ。こ
れなもし。ゆり起す

同かへうた

あくび仕ならがかゞみにむかい。しんきながらも一人ごと。親
をうらむじや。わしやなけれども。よう」(八ウ)もこんな
ぶさゐくな。いかに夜なべに。したとても。あんまりむごゐど
うよくな。とりわけ。はなのひくゐこと。これぢやほれてのな
いはづよ。是非がない。

因州いなばかへうた

城州都の東寺さんの。しかも羅生門のまん中で。鬼めが三足出
合しが。先なる鬼めが青鬼で。中なる鬼めがまんだらで。あと

なる鬼めが赤鬼で。先なるおにめがいふことにや。」(九才)
はじめて年越に出たときは。とらごどんの御見舞にはやされて。
目つこやはなつこでいとござる。中なる鬼めがいふことにや。
地ごくへ年季にいた時は。三箇川のお婆に夜這して。ふんどし
とられてしかられた。あとなるおにめがいふことにや。はじめ
て雷におちたときは。あばらのほね三まい折て。なんばゆき。
この頃ちく／＼ようござる」(九ウ)

同かへうた

旦那いん間にこつそりと。きたも内証が昼中で。お妾(てか)
と間夫とが出合しが。いきなるおとこが二十四五で。いかなる
おんなも好(すく)ふりで。仇なるお妾が二十八で。いきなる
男がいふことにや。忍んでおてかと寐た夜さは。日くれぎりで。
いぬがよると。首尾さへこつそりようござる。馬鹿なるだんな
がきたときにや。すかさぬお妾のいゝぐさに。朝から」(十才)
癪がさしこんで。きりゝとお腹がいとござると。あだなるおて
かのいふうそを。案じて旦那はめつた無上に。夜どうしのろけ
てなをるやうにと。さすつてやつたりしてござる。ひまやれ／＼

同かへうた

長い日中にほつとして。しかも台所のまんなかで。女子衆が三

人出あいしが。さきなるおなごしゆがいやしほで。中なる女子
衆が」(十ウ)芝居ずきで。あとなるおなごしゆが道らくで。

先なるおなごしゆがいふことにや。はしりもとでつまみ喰した
ときは。見付られてひまが出ても。むちやりむちやりと喰とご
ざる。中なる女子衆がいふことにや。しばみのお供のうれしさ
は。朝からばんまで見るやうと。切狂げんまでづらりと見とご
ざる。あとなるおなごしゆがいふことにや。意気なるおとこを
見た夜」(十一才)さは。うづめてそこのわかいしゆに。ぐ
るりやぐるりでさしとござる。しやしやれ／＼

あだなゑがほ

あだな笑がほにつみ惚こんで。つまこつ雉子のほろゝにも。千
ひろの海の雁がねに。ことづてかへすつばめのたより。うそな
らほんにかほどり見ても。羽がへのはだにいだきしめ。そのま
ゝそこへとまり山。うれしい中ぢや。エ／＼」(十一ウ)な
みかいな

いざや行ませう

いざやゆきましやう住吉へ。げいしや引つれて。しん家両がわ。
花やかに。沖にちら／＼ほかけぶね。一そも二そうも。三ぞも
四そうも五六そも。おや追風かゐな。エ、みなといりそんれは
エ。

同かへうた

障子あくればさし込まどの。月ゆかし。こぼすまゐぞへるうそくを。闇に「(十二才) なつたら。とぼそぞへ。一丁も二てふも。三てふも四丁も五六てふも。おやとぼそうぞゐな。エ、ろうそくを。それはエ。

夕ぐれに

夕ぐれに。ながめ見あかぬすみだ川月にふぜいを待乳山。ほあげた船が見へるぞへ。あれ鳥がなく。鳥の名に。みやこといふ字があるわいな。

同かへうた

しのゝめに。わかれおし「(十二ウ) むやねやのうち。つもるはなしもあるものを。夜あけたつらさかへるぞへ。あれ鳥がなく。鐘がなる。あゝもしんきなことばかり。

わがものと 本調子

わが物と。おもへばかるし笠の雪。恋のおも荷をかたにかけ。妹がりゆけば冬のみち。河風さむみ千鳥なく。待身はつらきおきの石。じつにやる瀬がないわいな。

夕立や 三下り「(十三才)

夕だちや田を見めぐりの神ならば。葛西太郎があらう鯉。さけが長じてきつねけん。ほんにぜんせなことじやへ。ほりの小ぶ

ねが。竹屋の人／＼と。呼子どり。

同かへうた

闇の夜に吉わらばかり月夜かな。そゝる店さき格子さき。くるかこないのたゝみざん。ほんにしん気なことじやえ。こうしにもたれて。向ふ「(十三ウ) の人／＼と呼子どり。

四季の春 二上り

はるはこづへに香をとめてさく。梅がわらへば。あれ山わらふ。にこ羽子いたの音もよや。ひとごにふたご。見わたすかたへむつまじふ。ふきのしうとめ嫁菜をつれて。はな／＼しさの。やまめぐり。

同つゞき 本てうし

夏はほたるの。ともし火も。みじかき夜半をくよ／＼と。なきあかしたるほとゝ「(十四才) ぎす。あふげば顔にばら／＼と。あれむら雨が。そで。うちふりて。よい／＼／＼／＼よいやさ

京四季

はるは花。いざ見にごんせひがし山。いろ香あらそう夜ざくらや。うかれ／＼て。すももぶ粋も物がたい。二ほんざしてもやわらこふ。祇をんどつふの二けん茶家。御被(みそぎ)ぞなつはうちつれて。川原につどふ夕すゞみ。よい／＼「(十四ウ) / / / / よいやさ

同つゞき

まくづがはらにそよ／＼と。秋の色ます花頂ざん。しぐれをいとふからかさに。ぬれて紅葉の長樂寺。おもひぞつもるまる山に。けさもきて見よゆき見ざけ。エ、そしてやぐらのさしむかゝる。よい／＼／＼／＼よいやさ

夜ざくらや

夜ざくらや。うかれがらすがまい／＼と。花のこか「(十五才)げにたれやらがいるわいな。とぼけさんすな。めぶき。やなぎの。風にふかれてるわいな。エ、ふうわりと。おうさそうじやいな。そうじやいな。

忍ぶ夜は

忍ぶ夜は。あちらむかんせお月さん。いろのせかゝるじやにな。しんきらし。

同かへうた

あふた夜は。つゐておくれなあけのかね。たまの「(十五ウ)ごげんじやにな。しんきらし

一夜明れば 本調子

一夜あくればまた気もはるゝ。花のさかりは梅やしき。はつ音ひとこゑうぐひすの。ほうほけきやうのやくそくも。実にうれしじやなぬかいな

十日戎かへうた

一夜(ひとよ)ふしみの軒毎に。土とは野母なやうなれど。ねれたおやまの人形みせ。紋日は棚へあげ「(十六才)さきの。にんばがたの約そくに

同かへうた

おかしむこともわらはねば。かなしいことも泣もせず。貞女やぶらざりん気せず。人になぶられいゝたいことも。いはで夜船の月あかり

川たけに 本てうし

川竹にうき名をながす鳥さへも。つがゐ。はなれぬおし鳥の。中にたつ月すご／＼と。わか「(十六ウ)れのつらさに袖しぼる。ほんにしんきな。ことじやいな。

同かへうた

あふことも。たびかさなれば深ふなる。おもひあまりてにくて口。はらを立さしや気味わるふ。あやまる中にもまけおしみ。ほんにおまへはつみな人

一声 本てうし

一こゑは。月がないたかほとゝぎす。いつしかしらむみじか夜に。まだ寐も「(十七才)やらぬ手まくらに。おとこごゝるはむごらしい。おなごごゝるはそうじやなひ。かたときあわねば

くよ／＼と。ぐちなおもひで。泣ているわいな。

めぐる日 本てうし

めぐる日や。はるがちかいとて老木のうめが。わかやぎてそのしほらしや／＼。かほりゆかしと。まちわびかねて。さゝなきかけるうぐひすの。きてはざこ寐をおこ」(十七ウ)しつゝ。さりとは気みじかな。今帯しめていくわゐな。ほうほけきやうの人さんじや。

こゝろせきやに 本てうし

こゝろせきやにかわらずがわろう。さつさそこでそうじやへ。ひとり寐がちのたがまくらばし。月がないたかほとゝぎす。はやせにさをさす竹いかだ。隅田に千鳥のそれはしばじや。夜るのあめ。

水の出ばな」(十八オ)

水の出ばなとふたりが中は。せかれあわれぬ身のいんぐわ。たとへどなたのいけんでも。おもひきる気は。おもひ切るきはないわいな。

同かへうた 本てうし

忍びごまにてつい合の手の。しらぬ調子のかんちがゐ。糸のきれめのばちあたり。じれつたいでは。ぢれつたいでは。ないかいな。

尚これにもれたるうたは追々二へんにいだし申候」(十八ウ)

(広告)

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七」(裏見返し)

四、粹の懐 二編(都々逸以外も翻刻)

粹のふところ

外題貞信」(表紙)

絵」(見返し)

絵」(序オ)

粹は水なり清くすめるものは好風(イキ)なる通人となり重くにごれるは痴情(コケ)なる野夫となる其人情の極意を探りてこゝにうかれの一ふしを冊とす鳥渡開て御るふじろ意味新調のおもしろみ天狗の夜半の酒もりに口舌に明し居つゞけにも唄へしと乗り地に成り手拍子ならぬ筆拍子あら／＼口演さやうと云

ひとりねの通客に代りて 花の???(序ウ)

上るり ほこりたゝき

只さへくもる雪ぞらに。こゝろのやみのくれちかく。一間にかくとしらがの婆々。ながへの銚子蝶はながた。今は老木のうばおつじ。おもへばおもひまはすほど。今ごろは半七さん。どこにどうしてござるやら。目にはなみだの玉手箱。明てくやしきおもひなり。やうすを聞いて俊とく丸。むねんとおぼせと義理の親。そりやきこへませぬ伝「(一オ)兵へさん。おことばむりとはおもはねど。そもあひかゝるはじめより。やしきにつとめたそのうちに。ふと見そめたがはづかしい。恋のいろはをたもとから。わたしがこゝろで。天神さまへ願かけて。泣てあかしの風まちに。たま／＼あへばあひながら。ヤアおまへは治郎作どの。ヲ、やつぱりこちの人じやわいなア。こはいかにと松右衛門。若ぎみをこわきにかいこみ。さつと「(一ウ)ひらけば滝口上野。火鉢にかゝりかん／＼と。見くだすかたきはうどんげの。ア、イヤぞんじもよらぬ。この期におよんでさほどまで。うろたへた性根はなく。ム、スリヤこなたはこきうのせわしきは。腹きつてござらうがのと。わたしはめいどへさんじ升。千年も万年も。御ぶじで長いきあそばして。未来でそうて下さんせと。おそめはかほふり上て。「(二オ)そりやきよくがな

かく堂へ御百度も。どうぞおつとにあかれぬやう。おまへを恋しい／＼と。おもひつめたるおこゝろに。鬼かいが嶋をうる／＼と。迷ふてござるが御いとしひ平(へい)と平(ひら)とのよみちがひ。きくによむじをよみによみ。めいどへいそぐ一文字。くちぬその名「(二ウ)を福嶋に。ゑだをば今に兩人が。戦場さしていそぎゆく

大つゑぶし

鐘にうらみは。かづ／＼ござる。初夜のかねをつくときは。でつちが寐むとなる。四ツのかねは夜番がおこされてばやきだす。夜中の鐘をつくときは。今夜も戻りはせぬかと腹たてる。八ツか七ツのかねをつくときは。ぢゝさんばゝさん小便しに出て「(三オ)それから目がさへて。寐つかれぬ。六ツの鐘を突ときは。じれつたいヲヤ夜があけた。つらい別れをせにやならぬ

同

いり込みの。湯屋のさはぎ。年より子供に新造にわかい衆が。さま／＼の。げいづくし。角の方はうたいにおんぎよく。石橋にもちきられ。ながうた声色でれでんさいもんじ清本新内ときわづ。富本。中にも「(三ウ)ほどのよいのは。いよぶし川たけ大つゑ。仇なゑがほに淀にはる雨。げいなしは。ざくろぐちはめいたたゝいて和さん念仏。すゞ木もんどにこなやにおけさ

当時はなしのうさつた異国船

きみのめぐみを 扇づくしかへうた 二上り

さとのいろはうつりにけりないちように。これ見よがしとあん
どうを。たがひにかけしのき扇「(四才)かどはひろめておゝ
見せへ。名もいまゝでのみなしまに。花をあきのうきめぜん香。
ながひもあればやすいのも。ちよつとまへさもつけにくや。お
きのかづはつきせねど。一夜あくればあきしゆへ。みなかるな
れや悦こびの。なをあんしんぞめでたけれ

京四季 かへうた

さくら花。はな見にごんせ樋の口へ。両がはあら「(四ウ)そ
うかけ茶屋の。うかれノゝて川もつゝみもはなやかに。のぼり
下りの三十石。川ぎしつなぎ家形ぶね。ほるよい姫のうつくし
さ。よいノゝノゝよいやさ

同つゞき

さくらの宮にちらノゝと。かぜにちりくるいとぎくら。つりが
ね見やれくわくまん寺。ぬれて鯉づか大長寺。川うを市は京ば
しと。よゐも「(五才)さめたるひやうしぬけ。かさのしたへ
おどりこむ。よいノゝノゝノゝよの中。

はるさめ

はるさめに。しつぱりぬるゝうぐひすの。羽かぜににほううめ

が香や。花に。たわむれ。しほらしや。小とりでさへもひとす
じに。ねぐらさだめぬ気はひとつ。わたしやうぐひすぬしはう
め。やがて。身まゝ気まゝになるならば。サア驚宿「(五ウ)
梅じやないかいな。さアさなんでもよいわいな。

淀の川瀬 二上り

淀のかは瀬のナア。けしきをこゝに。引てのぼるヤレ三十石の。
きよきながれをくむ水ぐるま。めぐるまごと。みんなみなれ
ざほ。さいたさかづきおさへてすけりや。酔てふし見のくだま
き綱に。かうした所は千両まつ。よいノゝノゝノゝよいノゝよ
ライ。「(六才)

あさくともかへうた

たまさかに。あへばたがいにくぜつして。じつとこゝろをさぐ
り合ひ。こそぐりかけたゆびさきの。きづのいたさに中直り。

同かへうた

おぼろ夜は。月のかげさへ恋ゆへに。しのぶ心かかさのうち。
あわねばふさぐまどの音。あすはぬれるじやなひかゐな。「(六
ウ)

たとへ岩きる早瀬の水もあとへ引ナイ登り鮎(有洲)

恋の山路に分入ながら花も手折ずかへる野夫(やぼ)(梅蔭)

花に蝶々もつい居つゞけでわるう羽袖にくせがつく(松児)

鳥渡うわ気でむりから突てじきにとまつてこまる羽根（流枝）

しんにこたへて眼にもつなみだうらみ顔なるからしあへ（梅

里）（一才）

今朝のわかれになごりをおしみないてわかるゝはつ鳥（素堂）

ぬしの合酌こゝろにこめてちらぬほどつぐ花見酒（梅蔭）

思ひあふたる中とは見へぬ声にそうイの猫の恋（花麿）

のぼりつめたる身は奴胤きれてくやくしく木にかゝる（流枝）

梅に眼鼻があるのかしらんにくひうつり香さすハイナ（松児）

（一ウ）

かたいつぼみも一夜の床に咲て色ます福寿草（梅里）

つもり／＼しはなしの数も合とけたる春の雪（素堂）

花を見捨ていぬ雁がねはなんぞつもの有である（花丸）

恋で落ぶれ暮そとまゝよさがりながらも藤は咲（梅蔭）

なさけしらずに折れはせんと花も深山にかくれ咲（松児）（二

才）

たがい違ひに声はり上てさわぐ島路の百千鳥（流枝）

都そだちの梅の木なれどぬしゑ此身を筑紫渦（有州）

ぬしにあをふと冬から門に出はなるゝ旭（ひ）をまつの内（梅

里）

捨てあれどもあいきやうあれば人の眼につく春の草（素堂）

花が花やら咲ぬが花かさかぬつぼみの内が花（花麿）（二ウ）

むりにいとないはらさぐられて笑顔ながらになく市松（梅里）

恋の苦勞で海山こへてしらぬ他国で炭俵（梅蔭）

三輪のおみわはわしやしらねどもぬしの歸りに糸を引（花麿）

それとさとられ言訳しても袖のうつりがのきはせぬ（下手丸）

佐用姫が石に成たもソリヤまた愚金に成身のわが物を（松児）

（三才）

一ト夜二夕夜はそりやありがちよ九十九夜さも合ぬ恋（有洲）

主しの心と此三味線はとかくピンシヤンなるわいな（素堂）

早ふ咲そと気は席台のゑ顔見せたる糸ざくら（露柳）

千草結びのべつたり合て嬉しながらもはづかしい（梅里）

村雨にみのゝかわりに山吹出してやたけ心をやわらげた（花

麿）（三ウ）

つらい勤も身が可愛さにしんぼ仕とげる二日灸（梅蔭）

寐ても覚ても苦にやむ胸はあいた／＼の癩のたね（下手丸）

人の手前は薄茶じゃけれど主しの濃茶で目を覚す（有洲）

是此雪におまへをむりにいなす心に成て見な（松児）

闇も月夜もいとはずかよひおもひはらした猫の恋（素堂）（四

才）

はれた夕日が添るゝゆへにまよふ色なる花の峯（露柳）

だます泪を滝ほど流しそれにのろけて登る鯉（有洲）

今朝の追手に友綱とけば恋に別るゝ舟の猫（梅蔭）

うそとしりつゝのせられましたむまく車の廻る口（梅里）

底の底まで沈んだうへはあまで此世を渡ります（松児）（四ウ）

にくやわたしのアノ口笛でそびきだしたる小鳥さし（梅里）

合ぬ不足をきく度々にほんにしんきな小遣ひ帳（有洲）

はだとノゝ重り合て色をあらそふ菱の餅（梅蔭）

いの字かくにもお師匠さんがゐるにいらぬ恋のみち（花麿）

かね付る迄はだいじと人にもすかれひねて捨おくはじき豆（素堂）（五才）

堂）（五才）

親がさしづをする間もまたず先へちぎつた庭の柿（下手丸）

たゝむ小袖のしわ引延し火のし片手に当こすり（横）

露のなさけがツイ重りて深ふ紅葉に色がつく（松児）

軒に青々つられてまつもぬしに合たさ忍ぶ草（下手丸）

夢かうつゝか起ても寐ても君のおもかげ眼にのこる（花麿）（五ウ）

鐘やかからず苦がないやうになつて今さら身の苦勞（松児）

こゝろよさそな顔して穴を人にせゝらすみゝの垢（横）

かたい要の扇でさへもあきが来たので捨られた（有洲）

みづにすなをな心を見せてかぜに浮気な川柳（梅里）

花の散ころ鐘の音きけば秋のくれより哀れなり（花麿）（六才）

才）

留守にした事かぎつけられて青ひ顔する木のめみそ（梅蔭）
すいたぐわへも泥みづ住居（すまい）その風味が水くさい（下手丸）

手丸）

青すだれかけた小舟のなにくらしや仇な根々の羽織妻（素堂）

風もおりノゝこゝろが変るわたしや一筋恋のかけ（松児）

陽気浮気の心も今はさかり過たる姥ざくら（横）（六ウ）

ながめある野に分るゝ春と聞て雲雀も鳴くらす（梅蔭）

たれも見とれぬ浮気な風が前をまくりに来るわイナ（素堂）

長い夜じやとは恋せぬ人歎秋も逢ふ夜は明やすい（松児）

じつとして居る木馬でさへもこしのひねりにいのき出す（梅里）

愚痴や恨のふみ引出してあてる枕の中直り（有洲）（七才）

坊主持とんと忘れて見とれ居れどほんにやさしい尼の顔（素堂）

勘当されたは一世の親子二世のおまへにや替られぬ（松児）

縁をむすぶも切のも筆の心ひとつのむすび文（梅里）

みだれ心になつたと見へてくさい身持をする玉子（梅蔭）

手ふき紙からふともめ出して事のやぶれとなりし文（有洲）（七ウ）

いつそ二人りがつんぼとならばかねや烏をうらむまい（松児）

手づまはやしの調子にのせて馬を吞たす床の内（梅蔭）

手鍋どころか地獄の釜もぬしとそふならなんのその（有洲）

つらや障子にうつりし影の小声咄しが気にかゝる（梅里）

花でほめられ葉でにくまれて色でまよはず糸ざくら（素堂）

（八才）

うたゝ寐にすきなお方の夢をば見たがさめて恋風引そへる（有洲）

竹婦人さへ勤のうさに通ふ嵐の間夫がある（梅蔭）

間夫にや下紐とかせて置いて客に日がらを括りつけ（松児）

色けつひたかもふちぎり初めあだにや茄子の咲ぬ花（梅里）

親の後とると思はぬ器量がじまん男ぐるいをする娘（素堂）

（八ウ）

こひの薄いのしつくわい言はれ色で苦勞をする染家（下手丸）

やつと這入て出りや青くさふにほふ菖蒲の風呂の湯（梅里）

ふたり添寐の枕もゆめでさめてかひなくぬらす袖（有洲）

月は真事をうつしもせうがそのしれないにこり水（梅蔭）

こよい逢ふとの約束きはめ永ふ覚へるくれのかね（松児）（九才）

色もない身を水あげしられ客へつき出すところてん（梅蔭）

ぬしと蟹とはよふにた心にくやゐじから横に出る（下手丸）

いやなそひ寐のつとめの夜サはあけのからすを待かねる（花遊）

坊主にくけりや袈裟までにくひあけの鐘をばつくゆへに（寿竹）

茄子田楽わたしのこゝろむねをやいたり味噌つける（素堂）

（九ウ）

しのび車としつてか牛もよだれながして曳わいな（松児）

仇なうはさが世けんになつて気がねして出る門すゞみ（むめ女）

すぐで居たものおまへにすられにくやゐがんだわしの墨（下手丸）

丸）

地場をゑらんで種まへたゆへひとつ咲てもとまるうり（梅里）

よい首尾を早ふ聞ふとかんざしぬいて耳のあかをば取て待（有洲）（十才）

洲）（十才）

二世や三世はそりやさて置いて当座そふさへまゝならぬ（松児）

鐘もうらまず浮名も立すほんにきらくなひとり住（梅女）

露にあこがれまつ虫さへもみつか籠をばぬけて出る（素堂）

くるい出したか心のこまをつなく立場がないわいな（梅蔭）

にやいますかと眉毛をゆびでおさへながらもはずかしや（花遊）（十ウ）

逢ぬしんきにふさがる夜サは蝉の音めが耳に立（梅里）

光り有身をついうか／＼とやみに迷ふて飛ほたる（松児）

糸へつば付あかりで穴へ入る日ぐれの針仕事（下手丸）

たまに逢ても枕のちりはつもるはなしに山と成（寿竹）

意知が有のか二人りが中をくらひ身にする火取虫（梅女）」（十

一才）

浅いノ、と思ひし内にいつか深なる川遊び（素堂）

かいた物さへやくには立ぬ今宵来るとて今に來ぬ（有洲）

おだてかへせばアノ甘酒もなれてまことのあしが出る（下手丸）

はりつめし胸の氷のいつしかとけてうれし涙と成わいな（松児）

おふてうらみの数々よりもつらや無言の別れぎは（梅蔭）」（十

一ウ）

合ぬおもひに案じた手事きれて氣に成三味の糸（花遊）

暑ひ情が外にも有どいふて出て行門涼み（素堂）

初物と聞チャどこやらこのもし成て味はさほどにナイ茄子（寿

竹）

來るかノ、と待せて置いてよそへ逃たる夕立雲（梅女）

恋に上下の隔てがナイと聞てうれしき一人言（梅里）」（十二

才）

親指と小指計りで願ひの紙を結ぶ糸にしも末の為（有洲）

しやれて居るゆへ此荒川の流れ苦にせぬ五郎太石（梅蔭）

月のころびねして居る処へよばひぼしとは氣に懸る（梅里）

隔てられても心の奥はすけて見へすくよし障子（下手丸）

とても今宵は逢ぬと知れば早ふ寐てまつぬしの夢（松児）」（十

二ウ）

（広告）

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七」（裏見返し）

五、粹の懷 三編（文久二年序。都々逸以外も翻刻）

すいの懷中（ふところ）

貞信筆」（表紙）

（絵）

音曲家芸図之巻」（見返し）

（絵）

貞信」（序才）

序

既にして。粹の懷第三輯に至るに。酔の粹たる限りなくて。一杯機げんの宴席（せきじやう）に。間にあひ音曲雜戯をひろひ。

かきあつめたる言葉の塵とり。なんでもござれとしか云
文久第二のとしいぬの初はる

浪華 一荷堂主人「(序ウ)

大津絵ぶし

花やかに。さきそろう。さくらの宮のはるげしき。うきつれた。
家かたぶね。紅ずり挑ちん赤襦ばん。きくもよう気なばかばや
し。障子ほそ目につめ引は。あだな茶ぶねのさしむかい。堤は
舞やらおどるやら。端手くらべ。しやうことなしのしみたれは。
風りうめかして矢立に短冊うろ／＼そこらをひつつきさがし
升「(一オ)

同

一年一度が七夕さんで。おるいにあふとて二度三度。四度のく
るまは。水ゆへ廻る。禅宗が五度に迷ひが六度。七度伽藍にき
びしい八度。いやないけんにおやじが九度。十度お前で百度参
り。船に千度や高野に万度。其上は。十万億度が極樂で。度々
のつまりは仕かたがないので筆を億度「(一ウ)

同

しんと夜ふけて。しみ／＼と。ひざにもたれて顔うちながめ。
どちら風が。ふいたやら。今宵あふとはしらなんだ。ほんにお
まへはにくらしひ。おなごに物をおもはせて。それがおとこの

手がらかへ。だますつとめがだまされて。腹がたつ。おいてお
くれよゑらそうに。お前のからだはこいでもよいで又たのんだ
お金とお召の着物がおこしてほしい「(二オ)

同

不細工ものが。下行で。春ふる雪が阿波ゆきで。しつ病が。四
国行。首すじもとが紀州いき。もどらぬためしが佐渡行で。横
浜ゆきが毛唐人。古ひうたが木曾へ／＼と皆ゆきたがる。臍が
西国する。ひざぼんが。江戸へゆく。しびりが京ゆき腹下が高
野ゆき。坊さん／＼どこへゆかさんすわたしはたん波の笹やま
へ「(二ウ)

同

人のからだも。花に似て。さかりがくれば色けづき。こゝろま
で。ひらきかけ。うか／＼見とれて鼻たれて。とかく実のなひ
あだ花を。たいてとられた黄金花。いつかわがみがすぼみだし。
それからやす花かいあるき。そのあとはひつのはなやらざくろ
ばな。とふどしまいはおちてすつぱりはながない「(三オ)

同

豆の葉の。身のうへ聞ば。ふつと二ばの芽ばへから。はるの日
に。そだてられ。背たけ延ては色けづき。野夫(やば)な土気
もいつしかに。おもはぬ人に契られて。もまれ／＼たそのうへ

に。身をなぐさまれて口の齒に。かけられて。ふくれさゝれた
そのあとは。やぶれかぶれにつらやほみなく見すてられ」(三
ウ)

うかれよしこの

おまへゆへなら苦勞はおるかたとへ身を粉に碎いても(小うの)
まかすからには此たましいをぬしのうはきに入かへて(梅月)
命あつての二人が中にすてゝ添りやう筈はない(梅暁)

無理な願ひの縁さへとげて捨るいのちもおしくなる(雁金)

(四才)

ちゞまる程にも苦をした主にそへば長生したくなる(蛇水)

長い命を短ふもつもみんなおまへがさせるわざ(蛇水)

恋のいぢだよこうなりやせつば仇に命はかへぬもの(一二二)

添れぬ中とて今さら外になんのしあんがある物で(梅遊)

余そで偽いふ程主にあふてまことが明したひ(梅月)「(四ウ)

さして寐たのか此かんざしの蝶もすゝきも乱れだす(梅胡)

偽いふたがまことゝなつてまこといふたが仇となる(蛇水)

あふて気のぼせするかほ色を火鉢に酔たと紛(まぎれ)かす(玉

洲)

そふた中とて背中を腹にかへた火ばちの獅々がしら(梅月)

むりにいぬ気は外ではないがさきへこゝろが廻りみち(無外)

(五才)

色にめづらしまだその内は一重桜に気がひける(蘭土)

笑がほも見せたる山さへ今朝は春に別れて気がふさぐ(無名)

そふた中とてアノ万ざゐがちよつと出るさへ二人づれ(一羽)

変ぬやうにと年玉入てぎりをかけるもすへだのみ(花雪)

うつゝぬかしてけふ此ごろは花に胡蝶もいろぐるひ(梅月)

(五ウ)

口の誠は筆にていわせ腹のまことはせなです(二蝶)

風におもはずちりゆく梅も今は松葉につながる(???)

やがて見初る頃ともなればとかく噂がはなにたつ(素遊)

主といへどもまだよその人いつ迄かへさずおかりやうぞ(無名)

人目つくりてはく白粉はほんに当座のはなのさき(梅?)「(六

才)

ちつた梅にはみれんはないがのこる実でする此くろう(可笑)

心うかれぬこの捨小ぶねあかのたまるはむりでなひ(白花)

酒で忘れて又たばこではおもひだしてはひとりごと(二蝶)

聞程咄しが我身に迫りなをさらおもひが捨られぬ(一輪)

水をさすほど猶色まして心ちらさぬ床のはな(淀川)「(六ウ)

福寿草 二上り

はつはるの。日なたへまはすふくじゆそう。目でたき御代のの

どかさや。花のこゝろもうつりぎな。ツイ。つぼみさへひらき
そめ

うめのはる 本てうし

春げしき。ういてかもめの一イニフ三四。いつかあづまへつく
羽ねの。かのもこのもにみやこ鳥。いざこととはん恵方さへ。
よろずよし原さんやぼり。宝「(七オ)ぶねこぐはつがゐに。
よいはつ夢を三ツぶとん。弁天さんとそひぶしの。花のにしき
のかざり夜具。はたちばかりをつみかさね。ほうらいさんとい
わふなら。富士を背中にやがたの。しほ尻ながく居すわれば。
ほんに田舎もましばたく。はしば今戸の朝けぶり。つゞくかま
どのにぎはふて。代々神楽かど礼者。梅がかさぎを見めぐり
の。」(七ウ)軒にさへづる鳥おひが。三すじがすみのつめ引
や。きみにあふ夜は。たれしらひげの。おゝ森こへて。まつち
の山と。五十崎や。そのかねが澁かねごと。たのしい中じや
ないかいな。おもしろや。千秋楽には民をなで。まんざいらく
にはいのちをのぶ。首尾のまつがへ竹てうの。わたしもるみも
ときをえて。目でたくこゝにすみだがは。つき「(八オ)せぬ
ながれきよもとゝ。さかへさこふや梅がかぜ。いく代のはるや
にほつらん

ながしのゑだ 本調子

ゆきくれて。このしたかげをやどとせば。そらにしらぬゆき
ぞちり。花のまくらに。ふぶきのしと寐。にくやあらしのあて
ことを。きゐてながしの。はなのゑだ。ほんにおとこの気ばか
りくんで。ひとよまるねのそひぶしも。いわぬはいふに。いや
まさる。は「(八ウ)なや今宵のあるじならまし

ほれてかよへば 三下り

ほれてかよへば。なにこわかるふ。今よいもあをとやみの夜み
ちをくよゝゝと。さきやさほどにも。おもやせなひにこちやの
ぼりつめ。エゝゝ。あほうゝゝとなくからす。

同かへうた 三下り

今宵あをとの。やくそくならば。こまどをあけてくるかゝ。
夜あけまで「(九オ)こちやまちはびて。やくやもしほのモウ
いゝつくし。アゝゝうつらゝゝとそでまくら。

土手を通るは 三下り

どてをとふるはもしやあいつじやあるまいか。いゝや。いゝや
ちがふたしぶ蛇のめ。あいがさのしつぽりと。アレはるさめが
ふるわいな。ぬれかゝるエ。さりとは気みぢかな。ちよつとゝ。
あふてもかへらんせ。」(九ウ)

うらしま奥 二上り

かすむ。こづへのうつり香ちりて。花や。恋しき。おもかげを。

かすみがつめるはつぎくら。はなのいるかに。ついつつり気な。
なたねの蝶もつゆのどこ。ひよくのてうのよねんなく。羽かぜ
かわしてひらりくる／＼／＼と舞あすぶ。雪かさくらか花のな
み。「うつ／＼しらなみ。いくよか。恋に。なれしなさけも。今
ではつらや。一人」(十才)寐を。ほんにおもへば。さりとは
／＼。むかしこいしき。なみまくら。さだめなや。げにやな
よのなみぢをこへて。よもぎがうらに。うらしまが。つきぬち
ぎりをかたるいゑづと

狂らん奥 二上り

あのやきみさまは。いつのいつからあひもせで。沖のふねほど
こがりやせん。よるは見もせで。夜中にやあはぬ。なかぬ。か
らすのきぬ／＼は。ア、しよつて」(十ウ)こいわけしらぬ。
みだれみだる／＼岑のしらくもさら／＼／＼。あなたへもつ
れこなたへさそひ。しどもなくこそ見へにけり

汐くみ奥 二上り

ぬれによる身は。かささしてござんせ。ひとめ。せきがさいつ
あをがさと。ほんに指おりその日がらかさ。まつになが糸のし
んきつし。それへ。／＼。きをもみじがさしらはりの。とのこ
にみさほたてがさや。あい／＼」(十一才)がさのすへかけて。
おもひもひらて。はんながさアしほらしや。いとまもつしてか

へるなみの音の。すまのうらかけてイヨイヤア、むらさめと
き／＼も。けさみれば。まつ風ばかりや。のこるらん。松かぜ
の／＼うわさは代々に残るらん

かゞのちよ 本てうし

ゆきくれて。うつら／＼と。ゆめみぐさ。ゆめにむすぶの神さ
んへたのむの。かりのひとふでに」(十一ウ)いつしか恋とぬ
れつばめ。ひよくのこのちわごとも。わかれをつぐる日もす
ゞりエ、にくらしひ手まくらに。のちをあふせをまつばてう。
しゆびのこゝろをのこすらん。

きくの追善うた かたみぐさ 二上り

くらきより。くらきをてらすとつうの。おのが迷ひにその人
を。切子も今はうわさのみ。よの口のはにたねなしと。菊野が
あのかた見ぐさ」(十二才)

小謡の部

はなれたの つるかめ

にはのひしやごはしんひんの／＼ひをへいのにしきやふりのふ
ほしやうひやかうのひゆきけたへのほのひやしにけのひぎはの
ちゆるかめはひやうらいちやんもひよそならずひみのへぐみぞ
ひやりがたき／＼

あまへたの たかさこ

たかちやごや。こにようらふねにほたげてつちもろちよもにてちをのにや」(十二ウ)みのはわぢのちまたけもちやうくにやるをのをきつぎてはやつみのねにちゆちにてり／＼

羅生もん

しなじなことばのへそのしたにほふもふかきへそのしたおもしろやへそのしたちかくへよりてへそのした

ときわづ 老まつ 本てうし

そも／＼松の目でたきこと。万ぼくにすぐれ。十八公のよそほひ。千ねんの「(十三オ)みどりをなして。古今の色を見す。しんのしかうの御かりのとき。天にはかにかきくもり。大雨しきりにふりしかば。みかどあめをしのがんと。小松の木かげにより玉ふ。此松たちまち大ぼくとなり。ゑだをたれ葉をかさね。木の間すきまをふさぎてその。あめをもらさざりしかば。みかど太ゆうといふしよくを。おくり下したまひしより。松を太夫」(十三ウ)と。もふすとかや。かよふにめでたきまつがへに。巢をくむ田鶴のよはひをば。きみにさへげてごうそんは。亀の。まんがうふる川の。ながれたへせぬ金銀しゆ玉とう／＼／＼と。御蔵のうち。おさまる。御代こそめでたけれ

新内 明がらす 上

春さめの。ねむればそよとおこされて。乱れそめにしうら里は。

どうしたゑんでかの人。あふた初手からかは」(十四オ)ゆさが。身にしみ／＼とほれぬいて。こらへ情なきなつかしさ。人めの関の夜着のなか。明てくやしきびんのかみ。なであげ／＼。ノウ時次郎さん。このやうにせきせかれ。さぞ気づまりにござんせう。それをこらへて下さんする。私しかはいとおもふての。御心ざし。うれしふござんすと。いだきしむれば。イヤおれゆへと。引しめて。物をもいわずしめあいて。跡はなみだにくれけるが。男なみだをばらりとながし。いつまでかうしていた連」(十四ウ)も限りもなき。二人が中。なが居するほどそなたの身づまり。此ほどだん／＼はなす通り。国の親父の江戸表。地頭のかたへ出す金。二百両はさて置。その外一門出入やしき。かたりつくして此ありさま。そなたもともといゝたいが。いとしそなたを手にかけて。どふなる物ぞながらへて。我なきあとで一ぺんの。回向をたのむさらばやと。云すて立を取付て。あんまりむごいなさけやな。こよゐはなれてこなさんの。まめで」(十五オ)いさんす其身なら。又あふことのあるうかと。たのしむことも有べきが。死のふと覚ごさんした身を。いかな気づよい女子(おなご)じやとて。どふしてはなしやられふぞ。かねて二人がとりかはす。きせうせいしはみんなあだ。どふでしなんす覚悟なりや。三津の川もこれ此やうに。二人手

をとりもろ共に。となぜにいふては下さんせぬ。わたしをころさぬおまへの心。うれしひやうでわしやいやじや。此ほどおまへの顔かたち。やつれ「(十五ウ)さんしたそのおりから。夕部の床のむつ事に。死後をつゝしむこの白むく。これほどまでにおもふ物。すてゆかうとはさりとは。鬼よりこわい御ころ。わしややりはせぬはなしはせぬ。ころしておいてゆかんせと。男のかたにくる付て。身をふるわしてなきいたる

同 らんでう

四ツ谷ではじめてあふたとき。すいたらしいとおもふたが。いんぐわなゑんの糸ぐるま。めぐるもん日やつねの日も。「(十六才)しんぞかむろにねだられて。よんだ客衆の目をしのび。手くだのがめくらがへも。二所三所ながれゆく。つとめする身もしろうとも。なじみかさねたおんなぎは。じつにかわりはないわいな。すいもぶすぬも恋ぢには。くろうをするがならいぞと。いふが中にもわたしほど。世にあじきなきものはなし。親にそひ寐のゆめにさへ。見もしりもせぬ人中へ。うられくるはのうきつとめ。かむろのうちの「(十六ウ)きぐるうは。ねむる火かげをおいおこされて。文のつかいや返事さへ。ながいろうかのゆきかよい。間夫の手引やあいづの手れん。きをもみうらの色にでゝ。やり手につめられたゝかれる。それくをぬけ

てやう／＼と。店へいつもの神さんも。かたびぬきなるゑんむすび。すかん客しゆにいびられて。ないて明さぬ夜はてもなし。それが中にもたのしみは。たま／＼あへばあくる日は。姉女郎やほうばいに。あてこと「(十七才)いはれ身じまいも。おそい／＼とせがまれて。涙をつゝむふりそでの。とむればもはやとしまやく。伊達もいきぢもまけまいと。きばればむねのしゃくつかえ。おもへば／＼男ほど。我まゝらしい物はない。むりな首尾してよんだ夜も。あちらからおんにきせるより。つまらぬことをいゝつり。くぜつはあすもかへされぬ。しかたとしれどこちも又。とかて苦をやむうれしさが。かうじて今のみをつまり。けふかあすかといふ内に。よぬきならしいあてことは。「(十七ウ)きこへぬおかたとすがりつき。うらみなみだぞ道りなり

さいもん かるかや

さればにやこれは又。加藤左へもん重うじは。名をかるかやとあらためて。今道心のことなれば。今日大師のおんはかへ。花立かへの御ばんにて。かやの御堂をたち出て。奥の院さしてのぼらるゝ。のぼるお山のみちのべは。さんこのまつかごゝのすぎ。おし上岩やねじりいわ。ぜんあく邪正の邪柳の。こなたのはかはら見てあれば。まだ此「(十八才)ごろのあらむぜうに。

古きとうばのたてあるを。かるかやつく／＼御らんじて「ナニノ／＼おさめたてまつる。大乘妙典につぼん回国。六十六部。天下和順日月清明。下にはなして大和の国と。よみおわられてるかやは。郡村名俗名。しるさずに。大和と計りしるせしは。さては此人大和にて。一か国をおさめたる。あるじのすへにてありけるや。わかき人にもあるならば。さだめし古郷の大和にて。

此おくつゞき又さいもん??? 四へんに出候」(十八ウ)

(広告)

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七」(裏見返し)

六、粹の懐 四編(都々逸以外も翻刻)

寿井の太頃

貞信」(表紙)

(絵)「(見返し)

(絵)

狼狽亭貞信筆」(序才)

頭陀袋の風流も一瓶の瓢にうかれ矢立の墨かれて紅筆にどゝいつをしるす人情の趣ところ色と酒とにまさるはなしと此半丁を序にかへて

先生も小唄でもどる花見かな

一荷堂恋々山人」(序ウ)

大つゑぶし

うたゝ寐の。ゆめにさへ。主と転寐(まるね)の床のうち。一人寐の。おもひ寐も。寐耳にそれと起されて。くやし昼寐の寐おきにも。寐みだれがみとむすばれる。おもひは寐た間もわすられず。二人寐た夜はむつ言に。朝寐して。寐ごとまぜりの寐がへりに。寐ものがたりもくやしやざこ寐と寐とぼける」(一才)

同

七日滞留の。お客さんは。不浄陰のお二方。経水行に。月水や。毎月こゝへ御めぐりは。おきてきびしき赤印。沢山(たんと)月役つめがみに。それとしられた手桶番。鉢まきしめて筋立た。坊さんや。北山さんでも円光でも。おもて御門はさつぱりふさがり。出入もかなわずぐんにやりしながらつらもんさがします」

(一ウ)

同

なたねに蝶の。中さへも。嬉しかなしの世のなかは。恋かぜに。
邪魔しられ。わかれさゝれてうろ／＼と。くるふ胡蝶の羽そで
さへ。なみだのつゆにぬれながら。もつれ／＼たまよひみち。
なたねもいつかつれだし。いろも香も。すてゝ身もちとなるは
ては。つらひつとめにしほりだされた身のあぶら」(二才)

同

からい物が。はなしする。意気でからいのがせうがにはじかみ。
いさみでからいのが。山葵がびゆつときく。たでもかなはぬ唐
がらし。三椒(さんしょ)小粒でもぴりつかす。是にこせうは
あるまいと。咄し中ばへからしがにゆつと出て。みな／＼しづ
まれやかましい。二日酔の。酒豆腐にやおれがなくちやかなふ
まひ。はたからなにをいふてもからしばかりは。耳にきかいで
もはなにびゆつときく」(二ウ)

うかれよしこの

いやよ音信(おとづれ)はつがみなりが始めからして案じさす
油とらるゝアノ菜のはなも浮気してきた後の事
雨に濡てはなの花さへもすがた乱してへばりつく
仇な桜がちらずにあらば松がうらみをいふである

焼野の芒と身は瘦ながら月に添日を待ばこそ」(三才)

あちらこちらと浮気をするか蝶ももつれているわいな

けふが日迄の恨らみははれて又の首尾をば言のこす
袖にとめたる移香迄もおしやちらせる朝あらし
昼のうつゝが夜は夢となりゆめがうつゝの種となる
吹て退(のく)様な其偽りがわたしや気になる癩に成」(三ウ)
つとめする身は皆偽りといつ迄いわれていらりやうか
仁義五常によしはづれても立るみさほは外にある

首尾に心をくたくも義理をやぶりとむなくおもふから
あつき二人が恩ある人に礼もいはれぬ此しだら
風を引たといふてはいれどむねに覚への声がはり」(四才)
親の落した初雷りにしばし逢夜の道がたへ
いやな人をば去(いな)せるやうと立た算木が主にまで
主に智恵をばみな買込れとかくわたしは愚痴になる
お前に尽した此しんせ(つ)は礼をうけたい気ではない
よし偽りでも聞たい迄におもひこがれた此ごろは」(四ウ)

咲た桜の木に 三下り

さいたさくらの木に。駒のかしらをしつかり。ほどけぬやうに。
くゝりつけ。こまが。かむりふりや。見事に咲たさくらの。花
がちる。はなちる見事に。さいたさくらののはなが。見事に咲た
さくらの。花がちる。

同かへうた

すいたどうしが。せなと背などを。しつかり。はなれぬやうに
いだきしめ。すねてあちらむきや。せなで「(五才)さすり。
気やすめいふてのろけかけ。はやあかつきのかねの音に。びつ
くり夢さめ。わかれをおしむいもせ中。いちや／＼いふて。こ
れもつきよの。ゆめかゝるな。

今朝の雨に 本てうし

今朝の雨に。しつぼりと。また。居つゞけのながい日も。みぢ
かふくらす床のうち。髪をひきさき。眉毛をかくし。もうしこ
ちのひとへ。わたしがかへ名はなんとせう。「(五ウ)あれ寐
さんすな起なんせ。あけぼのならで。くれのかね。

わしがおもひは 三下り

わしがおもひは。三国一の。富士の深やまのしら雪。つもりや。
すれども。とけはせぬ。うき名たつかやたつかやうきな。今は
うきななたつのもうれし。どうしんしやう馬鹿らしひ。とんと。
命も。やる気に。なつたわいな。

引すぎに 三下り「(六才)

引すぎに。間夫をかへしてたゞぼうせんと。硯引よせかくふみ
の。身にしみ／＼とあけのかね。二階を廻らしやりませうと。
かな棒ひく。

同かへうた

くれすぎに。けふはたしかにくるはづと。豊ざんして辻うらを。
身にしみ／＼と待わびて。もうしだんなさん。こゝでございま
すかへと。駕のこゑ。

どふぞかなへて 二上り「(六ウ)

どふぞかなへてくださんせ。妙けんさまへぐわんかけて。まい
るみちにはその人に。あいたい見たいおもへども。こつちばか
りでさきやしらぬ。エ、しんきらしいじやないかゝるな。

江戸の四季 本てうし

春の日ながに。ぬしとふたりが向ふじま。サ、ゆきか。みぞれ
が降わるな。雪じやござんせん。ちら／＼と。花がちる。「(七
才)

同

夏のあつさに。主とふたりが夕すゞみ。サ、初夜か。ゑん寺の
かねがるな。初夜じやござんせんほの／＼と。明のかね。

同

秋の夜さむに。ぬしと二人で見る月は。サ、風か。木の葉がま
どをうつ。かぜじやござんせん。ほと／＼と。人がくる。

同

冬の夜ながに。ぬしと「(七ウ)ふたりがおきごたつサ、雁か

かもめの声がするかりじやござんせんちん／＼と小夜千どり

春のうめ 実川延三郎戌どし二の変りしん作うた

住よしの。すまし餅はてもすぬなものよ。そんならモーツ喰て
ゆけば。天王寺に道とんぼりのすでにことしの二のかわり。そ
らきた黄金ふつてくる。雨かあられか矢ぐらの太鼓。音にそや
されて。ふかみへはまつてノウこれまつてい「(八才)なア。
茶屋のこかげにかくれうばア

三国一の 本てうし

三国一の。さアさ富士山たまつばきの。八千代迄もと。ちぎり
しに。

同

西こく巡礼。さアさ御系いか。ちゝはゝの。めぐみもふかき。
粉川寺。

同

さりとはつらい。さアさ。さながら。たらちねの。うらみもふ
かき。ふくれづら。「(八ウ)

番いはなれぬ 本てうし

つがみはなれぬ。アノ蝶々を。見るにつけても。かわゆらし。
花にたわむれ舞あすぶ。それこそよい／＼よいやな。

同

つがみはなれぬアノおし鳥を。見るにつけてもかはゆらし。早
ふめうとになるならば。それこそよい／＼よいやな。

同

淀のくるまは水ゆへ廻る。「(九才)わたしやりんきで気がま
はる。ほんにやる瀬がないわいな。しみ／＼はらがたつぞへ。
さい藤 本てうし

斎藤太郎左衛門。ちよつと／＼。あいたいことじやとなア。る
す／＼／＼どつこいた。となりにか。さりとはあいたいな。逢
た見たさは飛立ばかり。かこの鳥かや恨めしや。しゆびを見合
せそゝりぶし。宵にやきもせで。夜中にやたゝく。「(九ウ)
どこのたれめとしけるやら。さりとはつれなひ君ゆへならで。
茶だち塩だちおさめだち。さか／＼／＼さいの。わたしもり。
ちつとぬるいじやないかいな。

四季 本てうし

はるの夕部の手まくらに。しつぼりとふる軒のあめ。ぬれてほ
ころぶやまぎくら。花がとりもつゑんかいな。

同

夏の夕部の川すゞみ。うちわの風ももどかしく。鳴ぬ「(十才)
ほたるが身をこがす。恋のやみではないかいな。

同

秋の夜さむが身にしみて。物をおもふひとり寐の。やつれすがたを水かゞみ。月とかわれやぬしのかほ。

同

冬の夜ながにおきごたつ。ふとんがゑんのかけはしに。つもるはなしは寐てとける。ゆきがむすぶの神かゑな。」(十ウ)

露は尾ばな 本てうし

露は尾ばなと寐たといふ。をばなはつゆと。寐ぬといふ。あれねたといふねぬといふ。尾ばなはほに出て。あらわれた。

同かへうた

蝶はなたねと寐たといふ。菜たねはてうと寐ぬといふ。あれ寐たといふ寐ぬといふ。蝶はくるふてあらわれた。

同かへうた

雪はあさ日と寐たと」(十一オ)いふ。朝日はゆきと寐ぬといふ。あれ寐たといふ寐ぬといふ。雪はとけるであらわれた。

同かへうた

まりはやなぎと寐たといふ。柳は鞠と寐ぬといふ。あれ寐たといふ寐ぬといふ。まりはけられてふくれづら。

越後の国の 二上り

ゑちこの国の角兵へ獅々。くにをでるときや親子づれ。獅子をかむつて。」(十一ウ)でんぐりがへつて。ちよつと立まする。

親父やまじめで笛をふく。

見たいな／＼ 二上り

見たいな／＼文箱の内を。のぞいて見たれば玉手箱。あけて見たればナ。ふみではのうて。おつぼねさんの。だいじの／＼。夜るのもの。

同かへうた

見たいな／＼。吉野のさくら。のぞいて見たれば花ざかり。折て見たれ」(十二オ)ばナ。花ではのうて。山ぶしさんの。大事の／＼。はなのさき。

芝居の見通し 三下り 越後獅々の合の手にあふ

おゝさへ／＼。口上言ちよいと出て。大序あくれば。桜のはな見。若との太夫。家老かけ引。盗ぞくかべきりやぶり。曲ものまつたと。提ちんばつさり。さりとは残念な。二だん目あくれば上使のおいり。宝ふん失ゆへ。春太郎せつづくおしとゞめ。伯父子の悪事」(十二ウ)を見出す家老。いかに姫のこしいれ。

日のべする。黒しやうぞく。鉄砲ねろつ。松の木目あてに。手裏剣ばつさり。おちるところを。どつさりちよんのまく。三段目の世話場に。立役。たゝみをあくれば。主人の眼病に。我子の血しほと真珠をのませば。どろ／＼あやしや。四段目あくればゆきの山。忍びいる妹せの香づゝみ。うばひ立退たか。」(十

三才)はて口おしや。つけねらふ取手をばつさり。追てゆく。

五だん目あくれば。松原たいまつ。首尾能かたきの。ほんもうち遂。たからばいかへせば。このばは御立。とんから／＼／＼／＼しころうつ。評ばん頼みます。御客はもどつて。げい子やげいしやで。大うかれ

新あしかり 本てうし

名にたかき。なにはのうらの夏げしき。風にもまれて芦のはの。さわ／＼(十三ウ)／＼も。おとにきく。こゝには伊勢のはま荻。よしやあしとはたがつけし。われは恋にはまよはねど。恋といふ字がまよふゆへ。さりとはしらすぎの。とゞまれとまれと。まねく手かぜにゆきすぎて。またもよぶすはま風の。あしもさはだち。磯の波。まつかぜこそはざゞんざ

奈良の大仏 三下り

奈良の大仏。ねづみがかぢる。どせうぞいな。ねづ(十四才)みをどしやうぞいな。猫でもよんでこうかいな。さアさ捨とけほつとけ。

同つゞき

月がかさなりや。おなかゞふくれどせうぞいな。おなかをどせうぞいな。婆々でもよんでこうかいな。さアさ。すてとけほつとけ。

同つゞき

でけたその子が。おた福ならば。どせうぞいな。おたふくどせうぞいな。どこぞ長者の門口へ。さアさ。捨(十四ウ)とけほつとけ。

同つゞき

すてたその子を。夜ばんが見つけ。どせう。ぞいな。夜ばんは。どせうぞいな。とし寄五人組よんでこか。さアさ。すてとけほつとけ。

もんく入度々一

あぶらでかためた椎茸たぼを(落人清元)それぞれのときの。うるたへものには。たれがした。みんな。わたしが心から。死ぬるこの身を。なが(十五才)らへて。おもひなをして。親ざとへ。つれてふうふが。身をしのび。やばないなかの。くらしにも。はたもおりする。ちんしごと。つねのおなごと。いわれても。とりみだしたる。しんじつが「あらひがみにはたれがした

同

しらぬわたしをなぜ惚さしに(ときわづ)すぎにし梅の花みづき。目見へはじめと手をついて。ふつと見(十五ウ)合すかほとかほ「きたのがおまへのあやまりさ

同

心くるわぬおもひの中も(コハイロコトバ山三)エ、おのれ
はなア。廓にあつては君けいせい。一夜ながれのうかれめに。
誠あるとおもはぬが。女郎のことばとるにたらねど。それと
これとはわけちがふ。屋しきづとめの「かたいやくそく今はあ
だ

物まねめりやす

竹に巢をくむ 二上り(十六才)

たけにすをくむうぐひすの。かわゆらしさの谷わたり。うめに
とまらば。ほうほけきやう。

一やうに 三下り

一やうに。はるやきにけりやまざくら。一家ひらけば七重ざく
らや。よいちご。ざくら。いとざくら。にほひざくらの。いろ
もよし

琴うた 二上り

あさがほにつるべとられてもらいみづ

同(十六ウ)

たまだれのうちやゆかしき御所ぐるま

同

すみだはら。われもむかしはいとすゝき

同

世の中に。たへてさくらのないことならば

はいりうた 三下り

まつはちとせのちぎりといへど

同

にしでさくはなひがしでひらく(十七才)

茶屋ばの出

わしはこの町の。うかれがらす。月夜もやみ夜もうか／＼と。

よぼけにとぼけにめうがのこ。わい／＼のわいとサ。

ざいごうた

豆つんで。小むぎつんで。お手にまめが九ツこゝのつの豆をと
るとて。嫁の在処はこゝかへ。

同

宇治は茶どころ。茶は糸どころ。むすめやりたや。むこほし

や。(十七ウ)

花を見よなら 三下り

花を見よなら高尾のもみぢ。いつきて見てもかわらぬ萩は高だ
いじ。咲たわいな／＼。御室のやうなはなを折たいな。ヤア／
＼。ほんに大仏かきつばた。

同かへうた 同

かみをゆうならしま田のわけよ。いつゆうて見ても。かわらぬ
かみはさつかうがい。結たわいな／＼。両わのやうな髪をゆふ
（十八才）て見たいな。ヤア／＼。ほんに勝山おとしはらげ。

蝙蝠が 三下り

こうもりが。出て来たはまの夕すゞみ。河風さつとふくぼたん。
からい仕かけのいろおとこ。いなさぬ／＼いつまでも。なにわ
の水にうつす姿へ。

世の中を 三下り

世の中を。義理ほどつらいものはない。ほれてなま中おゝくよ
／＼と。あけくれこがれてくらすへ。

（広告）

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七（裏見返し）

（絵）

流行の内にもまれてのぼり棹

なんでも鯉のうたのかず／＼（見返し）

（絵）（序才）

酔は我為の粹ならず人のための粹なりといへるを

つゝんだる粹ふところや薄月夜

一荷堂主人（序ウ）

大つ絵ぶし

意気な世界は。朝風呂に。湯豆腐から汁ちよつと霜けし。おり
から表口。これはだんな。いただきませう。松竹梅ではでお仕
舞。船が廻りました子供衆よいかいな。アレあぶなひ手々引で。
恋の重荷を肩にかけ。送られるのか送るのか。夢うつゝ。着た
ところも葭やばし。登るつき地のかげさへうれし夕げしき（一
才）

同

こがれ／＼て。みじか夜を。寐られぬおもひにうつ／＼と。ゆ
めかうつゝか。うつゝにも。姿見せねば声なりと。せめて一声
ほとゝぎす。聞せてたんのうさせたなら。おもひ切よもあるう
のに。月の手まへもはづかしく。なま中に。浮気ぐもりの色見
せて。ほんにくひよいつかからすにわかれさす（一ウ）

七、粹の懐 五編（都々逸以外も翻刻）

一荷堂主人集

貞信画（表紙）

同

主のうわ気で。この頃は。こゝろもやしている中を。とやかに。うわさして。しらぬ事迄余の人に。たきつけられて胸の火の。きゆるひまなきせつなさに。にへくりかへる腹のうち。おもわずあふて何からと。うらみ事。いふてきかせどにくらしや。茶にしたあとではわたしのしんじつ水にする」(二オ)

大きなことを。京では一かいに。でつちのろうそくやはいつでも二かい。しまつな内は。三がいで。納る四かいにたもつ五かい。薬ぐひにと六かいに。やりくりするのは皆七かい。三蔵の御弟子が八かいに。つらいつとめがこれは九がい。づぼら息子が二階住居(すまゐ)の八かいで。丁度十かい。不細工者でお前は百かいナ。しつかり千かいいづくしもこれでないからこゝらで億かい」(二ウ)

同

おまへゆへなら。わしが身は。たとへどのよになろうとも。うらみとは。おもやせん。どぶで一度は死ぬ命。ほれたからならその人に。まかして意路を立るのが。おなごに生れたみちじやもの。それほどおもふ心根を。しんきやな。余所にしられて腹のたつ。いつそ此まゝ退(のい)たらながいきするである」(三オ)

はるさめに。しつぱりぬるゝ。梅が軒ばの匂ひどり。夏はほたるのともし火も。ながめ見あかぬすみだ川。御被(みそぎ)ぞ夏はうちつれて。散ゆくはづへばら／＼と。来てはざこ寐をおこしつゝ。おとここゝろはむごらしひ。しのぶ夜は。つがひはなれぬおし鳥の。酒が長じてきつねけんでもおもひきる気はないわいな」(三ウ)

よしこの

色と定めて合したからはひしの餅さへかたくなる
おなじ添ても難見た様に気むづかしよな主はいや
切の焼のとアレ菱のもち見た様なお前の色重ね
雨に叩かれちるやま吹はそれさへ人にはいはぬ色
言兼さんした心にほれて明くれ心を砕くむね」(四オ)
笑ふて山さへ別るゝ春とおもや今さら樹がふさぐ
鳥渡裾から桜の陰でぬれて出にくひ別れ際

浮気者だよアノ初虹はまるひ中にも色分る

胸にたづねて心で引てして迄一こゑ鼠啼

待身辛気な辻占迄もあわぬ今宵の拍子間」(四ウ)

鐘を別れとしていぬ人に名残おしひか慕ふ花

罪な男が可愛くなつて人にもしらせぬ苦を造(つくる)

仇惚さす様なアノ桜にはつれない嵐が添わいな

おしていはれず我胸いたため心でいさむる気の苦勞

行衛定め流れの水に浮て添たる花筏」(五才)

若ひ氣性に任せて鮎も登りつめるは無理でない

明しおくれて誠も嘘となつて苦勞が又ひとつ

梅の若ばも実を持ちからは花を咲せた後の事

ばつと世間へ浮名を立て花は当座に散安い

やがて身持の氣ざしとみへて花もやつれた顔見せる」(五ウ)

当座かるのは別れのもとよ霜も日にノノ薄くなる

主に飽れて私はたれに好れて嬉しひ人がある

花と蝶さへ迷ひがあるにまして定めぬ中じや物

偽り聞さへ嬉しひ迄におもひこがれて逢ぬとは

主に知恵をば皆買こまれとかくわたしは愚知になる」(六才)

添たき綱が切たるからはかたひ火ばしも替る縁

宵に降ては流れの水もすまぬ氣を持朝の色

おもひ積雪落して仕舞や傘も今では骨折ぬ

よもや人眼に悟られまひといふてさしたる紛へ櫛

せつない思ひに啼時鳥それをきことは情無」(六ウ)

松の二葉 二上り

まつふたばはナ。あやかりものよ。青葉はまして落ばさへ。

いもせかはらぬちぎりとは。うれしかるふじやないかいな。

同かへうた 二上り

まつがつらいと。おしやんすけれど。こぬ夜は恨みあひおいの。
中に小松をもふけなば。うれしかるではなひかいな。

おんらが在処 同

おんらが在処は。風雅な」(七才)ものよ。むくつけにねまり
もふす。かたろうならば。桃や柿にぶらさがる。九十九足の
はなかけ猿に。おんだてられてもわらわれても。根(はね)ご
んぞほれたが。性根かへ。

かんしやうぜう 三下り

菅丞相は。つくしのくにへながされて。丑に引れて安らく寺へ。
御とももふすは白太夫平馬が首は飛うめで。怒りのがん」(七
ウ)しよく。鳴神は。なるかいな。なるわいな。そこからら
みやさつても。都のかたへはとゞかぬ。

同かへうた 同

ゆびきりかみきり。すとおまへにほれました。それに恋め
がかんしやくに。ござんす俣の川。ながれの身。抱れて寐るが
ふしぎなか。つとめでごんすとやつておけ。やるわいな。やる
かいナ。なんでもやるのが。よいわいな」(八才)よいノノ
ノノよいやサ。

同 同

梅がへぜんせい。すんとこたつにこしをかけ。煙りくらべん
浅間山ノ。そらさぬ顔してふくきせる今宵のうちに三百両。

でけるかへ。でけまする。なんでもよろひをとりかへし。あな
たの御手へと入ませう。

桜見よとて 三下り

さくら見よとて名をつけて。まづ朝ざくら「(八ウ)夕ざくら。

間夫のひるじやとるナ。エ、どふなと首尾してあわしやんせ。

なんどきじや。ひけすぎじや。さぞやあんど。ちらりほらり。

金棒ひく。

同かへうた

おさなあすびと名をつけて。まづ木杭かくしかくれんぼ。あな
ーおし絵や。中の小坊主じやとるナ。けんノ。いもむしつ花
つむ。やん「(九オ)まつり。輪廻し。あちらへはしり。こち
らへはしり。風のぼし。

づぼんぼへ 二上り

づぼんぼエ。づぼんぼはらたちやつらにくひ。池のどん亀なり
やこそ。さゝの合手にづぼんぼエ。

あふて言たい 同

あふていゝたい。ノ。あふてノノノノノノノノあふて言たい
な。しんけんでおますエ。毎ばん顔見にや寐られぬウ、ノ、ノ、

ノ。(九ウ)

しよがいな 二上り

しよがいなノ。しよんがばさまは。よぼけたばさまで。破れ
たちやんぶくろに。まつたけをいれて。嫁女こちらむけな。エ
ノ。ほにほが。エ、。それもそうかいな。それはエ。

同かへうた

エ、しよかいなノ。しよんが奴は。下馬先そろへて。殿はお
馬で。台傘立笠大鳥毛「(十オ)ふつてふり出すな。はれわい
さのさ。エ、はるノ、先のけ。それはな。

同かへうた

しよがいなノ。しよんが紙子は。今はやうノに。かどにた
ゝづめば。喜三よかわりはなかりしか。引ばやぶるゝナア。
あみ笠の。エ、手づからぞうりをエ。しよんがいな。

沖の大船 同

沖の大船なア。磯ばたに。三十三反の帆をまき「(十ウ)あげ
ておもかぢとり櫂よきあらし。むかうの。嶋から女郎衆が出て
きてまねくやら。船頭衆は見るよりのろを立て。いかりをざんぶ
とみなといり。よかねエ。ヨカノ。

同かへうた

おさん女郎衆が井戸ばたで。すべつてころんで。ちよつこらも

ゝ出して。そこな。ながしが毛だらけに。家根で鳩めが氣のどく余りの。ほてつ「(十一才)ぼゝ。ぬらくらするから氣をつける。みよちよろらいちよろちんがらも。よかねエヨカノゝ。

とつちりとん

むかし釈尊。長者の姫に。「ゆびをさしたが縁となり。たちまちはらむやすだら女。「つるに。赤子を生落し。是ぞまつかないつわりよ。指ではらんだ子なれば。指ら尊者といふ物を。「羅でこしらへた子」(十一ウ)なれば羅こら尊者ともうし升

道成寺 山づくし 三下り

おもしろや。四季のながめは。三国一の。ふじの山。雪かと思れば。はなの。吹雪か。吉野山。朝日やまノゝを見わたせば。うたの中山石やまの。すへのまつやま。いつか。大江山。いくのゝ。道は。遠けれど。恋じにかよふ浅間山。一夜のなさけ有馬山。いなせのことはを。いつか木曾「(十二才)山まつち山。わがみかみやま。いのり北山。いなり。山ゑんのむすびし。いもせやま。ふたりが中の。こがね山。花さくゑいこの。このノゝ姥すて山。みねのまつ風。音羽やま。入相のかねをつくば山。東叡山のつきのかをばせ。三笠やま。さるほどにノゝ。てうノゝのかね。月落鳥啼て。霜雪天に。みちしほ程なく。日高のてうの。江村の漁火」(十二ウ)うれいにしづんで。ひとノ

ゝねむれば。よきひまぞと。立舞やうにて。ねらひよりて。つかんとせしが。おもへば。此かねうらめしやと。龍頭に手をかけ。飛よと見へしが。引かづいてぞうせにけり

ひなぶり 合の手 ことば入。糸にはなれていふべし

恋のおも荷のナア。しまのうち。おくりむかいかくかごの。(かごや)「だんなおかがまいりました たれであるふとしてこいな。(仲居)「ヲ、おあぶのござり升(客)「おつとせうちノゝはやくやつてくれ(中)「さよならおちかひ」(十三才)うちにハイア、モシだんなどなたへもよろしふ(かご)「おうちまでやりませふかな ぼうばなにくゝりつけたる提灯の。(かご)「ハイノゝゝたのみ升ゾだんな今ばんはひどくおはよくり升ネ千話げんくわでもなさへましたかね(客)「なにそのやうにつゞひてはどむならんはエまた四五日するとせつくだもの 日がらのやくそくしてきたなエ。(かご)「ハイノゝヲットどふした合棒しつかりしなエソラがけたエ たかいも。ひくひも。色のみちなアエ (かご)「火がくらいぞモヲやつつた「ヲットせうちだかただヨ たてる立んのいきづへも。つきぬたのしみゑつさつサ。さアさおせノゝ (かご)「だんなモシおうちでござい升ヨモシノゝよく寐入さつたハイだんなモシノゝだんな(いびき)「ゲウノゝノゝノゝノゝムニヤノゝ (客)

「おつとよし／＼（かご）」「へいおぞうり　ゆめのかよひぢ」
（十三ウ）なあま

上るりさはりドゞー

すむのすまんのあんじをやめな（菅原二）あなたになんぞ恨
らみがあるかたゞしは時平にたのまれしかよくにはなじみの女
房もすて母さまのぎりも思はず」うをと水との中直り

同

富士の山さへ十里にや足ぬ（忠八道行）はづかしひやら嬉し
ひやらあんじてむねも大井川水のながれと」（十四オ）人ごゝ
ろもしや心はかわらぬか日かげに花はさかぬかと」恋の登りは
きりがなひ

同

可愛男に誠をつくし（いもせ山）なみだにしぼるふりそでに
むちよ手綱よ立上り竹にサア雀は品よくとまるナ止てサとまら
ぬナいろの道かいな」アゝもしんきな事計り

同」（十四ウ）

呼も通ふも恋路のみちは（菅三）たけのそのの御しよぼう公
下々の下々たる牛かいとねりもつたいなへも身近くめされ菅丞
相の姫君とわりなき中の御ふみづかい」筆が立石みちしるべ

同

一寸も放れまいぞとおもふたなかは（夏祭）そでなし襦袢一
ツになりぬいてわたせば針さしの糸のむす」（十五オ）ぼれ糸
んのはし」主も五分なら私も五分

春さめかへうた

むらさめに。しづ／＼くれるいほ崎の。住居（すまひ）も詫て
ものしづか。露の小草のむつまじき。小声のむしをもるともに。
これもうき世のあら世帯。ぬしとわたしの恋中も。いつか身俣
気俣になりわびて。サア惚合ふ中となるからは。サアサなんで
もよゐわいな。」（十五ウ）

やなぎ／＼　二上り

やなぎ／＼で。世をおもしろふ。うけてくらすが命のくすり。
梅にしたがひ。さくらになびき。其日。その夜の風しだひ。う
そもまことも義理もなし。はじめは粹におもひそめ。日ましに
ほれて。ツイ愚癡（ぐち）に成。昼寐のこの。うきおもひ。
どふした拍子のひやうたんに。あたはらのたつ。すぎじやア。」
（十六オ）

柳ばしから　本調子

やなぎばしから。小ぶねいそがし三谷ぼり。土手の夜風に。そ
つと身にしむ衣紋坂。ぬしを待夜は。あわぬ其夜のかんしやく
に。かた／＼けふはくるはづと。おちたかんざし畳みざん。

同かへうた

扇かまへて胡蝶をねらい。花のゑん。須磨やかあしの。そつと乙女やまぼろしの。富士のう「(十六ウ)ら葉や。あたるはつ音や玉かづら。わかむらさきや。まきばしら。乗せてかゝり灯。身をつくし。

わすれ唱歌 本調子

こんど長崎で。かわつた唱歌をなろうた。あとさきはおぼへなんだが。中のしやう唱歌をわすれた。さこそあるべきと。書て戻つたが。それさへ出口でなくした。首尾も諸わけも。そのとふり。ハテ面目ない。世にこゝに。しゆどの吉三が「(十七オ)里通ひ。宵の口絶におもやせて。あなたのかたへおさらばへ。こなたの方へおさらばへ。のとさまエ、猪牙にも駕にもエ乗いで。色あみ笠を買こんだ。土手のくぼたまりに。けつまづいて。膝頭をすりむいた。あいたしこ。なんとした。おたゝんのたんせつぶ。ちんば引ノ、金龍山へ。米ノ、まんぢうは占ひか。銭やあり。おんじやれもふしや。あるよさ。とかく浮世はおもしろや。」(十七ウ)

夕ぐれかへうた

はるさめに。ながれをわたる高瀬川。つきぬおもひを待わびて。恋しき人が見へたぞへ。ソレ都なる木や町の。互ひにゆめを見

るはいな

秋の七草かへうた

萩や桔梗に女郎花。のぼる最中の月のかげ。ほつと句になるうれしき思ひ。ほんに今よいの秀逸じや。

二カ

女房のこしらへにてかんどくりと？口をもつて酒にようたるおも入にて「(十八オ)ひよろノ、して出て又さけをつぎがぶノとのみながらへげたれた風さまおかし

「エ、イア、うまいことじやわしやモフ何よりかより酒さへのでいたら。御きげんで一寸出るのも銚子と盃を持てあるくがこれを人がみるとアノ嫁々(かゝ)はいつも酔ているエライかぬ性もんじや気性者じや羅生門じやといふてほめてくれるが外の二ツはわかつて有けれど羅生門がわからんテア、分つたこれは又さけの妻といふのか」(十八ウ)

(広告)

泉陽堺 具足屋重兵衛

摂都 河内屋輔七「(裏表紙)

八、粹の懐 六編（文久二年序。都々逸以外も翻刻）

数意迺不斗幸呂

恋山人

半水集録

貞信画「（表紙）

緒（じよう）

近属（ちかごろ）の流行唄（はやりうた）に。不二の山から三保の松原。どなたも覗て御覧じませとは。如何なる遠鏡（めがね）かは知らねど。其歌枕の西行を松茸かと見紛ふは。覗き甲斐なき眼鏡なれど。愚眼（どんがん）に儒経史（あをべうし）を覗て。頻に唐好癖（とうへんぼく）とならんよりは。今此小冊（こぼん）を天稟（もちまへ）の通眼（まなこ）にて。一回（ひとたび）覗ば。「（見返し）青楼遊里の有調天を見通し。

芸妓（げいしや）幫間（たいこ）の腹袋（しんしやう）を見透すこと。ギヤマンの暖瓶（かんびん）よりも鮮なるべし。ところで通の通。粹の粹たる懐となりて。此題号（へうだひ）の虚（うそ）でなひ証拠は。四方好子（どなたも）覗て御らうじませと。遠眼鏡やの主人にひとしく。一荷堂に住む恋の山人誌す

文久第二晩夏日「（序オ）

（絵）「（序ウ）

大つゑぶし

夏げしきそよ／＼と。夕かぜかよふ浜ざしき。しのぶのしづく。青すだれ。蘭の鉢うゑ藤むしろに。かけ香の薫ぶん／＼と。意気な女のあらひがみ。なるみのゆかたまき帯に。肌もあらわにつめ引は。きよもとの。あだなもん句が気にあたり。エ、まアにくひとたゝかれたる蚊は果報者「（一オ）

同

辻占昆布も。帯紐解て。合ぬうらみに見すてられ。気に合ぬ。御鬮さへ。紙屑籠にまるめられ。エ、しんきらしはらのたつ。あたりさはりに迷わくな。煙管はやたらにたゝかれて。くやし紛れの茶碗酒。廻り気に。もゆるおもひのむねの火を。消してもらふはほんにぬしより外になひ「（一ウ）

同

顔見あわせて。につこりと。髪をなであげ汗ぬぐひ。ヨ、しんど。にくらしひと。口ではいへどこゝろには。うれしおもひのへだてなく。しんじつおび紐とけ合て。雪のはだへのうつくしさ。ながれの水もおまへゆへ。はづかしく。もらすくらひのなかじやもの。気まゝにさしやんせわたしや御客とおもやせん「

（二オ）

同

かあひと。いふことば。とけて寐た夜のまくらこそ。けむりをたつる。しづのめの。ふたりしてつる蚊帳のひも。おぎふくかぜのおとづれも。中にすいあり不粹あり。ほんにあこぎが浦めしや。日がらのやくそく仕てきたナアエ。雲にかけ橋。散ど薫はなを残る。伏見竹田に野田に衛のなをもよはひのますいづみ」(二ウ)

同

あだなゑがほに。惚こんで。月がないたかほとぎす。竹やの人と。呼子鳥。妹がりゆけば冬のみち。アレ鳥がなく鳥のなに。うき名をながす鳥さへも。せかれあわれぬ身のいんぐわ。さなきかけるうぐひすの。つがひはなれぬほれてかよふになにこわかるう。あをげば顔にばら／＼と降はなみだかあきさめか」(三オ) ふうかぜも。さま／＼に。そつとかよふた初東風が。つばみのはなの。紐とかせ。うわ気でかよふはる風が。いつかさくらにあてつけて。ちらしかけたる夕あらし。こゝろうれしひかぜかほる。たがひの肌に涼かぜの。ひや／＼と。おもへば今は秋かぜの。身にしむさむかぜあひに北かぜかあひと子かぜに。よいや魔かせ」(三ウ)

うかれよしこの

ばんにこそとて待たのしみがあはぬうらみの数ふやす

嘘も誠となるからこんな心しれなひ人をまつ

通ひ船だよ売なひげい子かわる御客を乗てさす

恋の欲だよ今宵も翌(あす)もあふに限りがなひにつけ

胸の算用と此書出しも逢ぬしんきにふさぎ出す」(四オ)

男勝りに気をもみぬひてむねに思わぬ苦をふやす

初手はしらねど馴染だからはいはずにされるよしん実が

浮気男におなごの道をとめて誠がきかしたひ

親のいけんとおまへのじつに明暮気をもむ事ばかり

誠しりつゝ噂ではらを立るおまへの気がしれぬ」(四ウ)

当付いふては投たるまくら?られて今さらふさぎだす

わたしが心底見透迄もかよおまへのこゝろなら

いたゞき升よとさす盃の後の尻目がにくらしひ

おなじ盃わたすにつけてこゝろとがめがするわゐな

おもはず嬉しひ此さかづきをうけて眼先の色に出る」(五オ)

持つけられてはアレ盃も今さらいやとはいへぬ仕義

泥も真水と澄だるからはそふた田螺も角かくす

かたく添たる田にしでさへも身はなされては貝がない

仇に身拔をしられたうへにやすく田にしも身を売れ

誠づくからうるさい眉を引て出るのもつらくない」(五ウ)

解て寐た夜も浮談（うだ）つき計りいふてなぐさむきが憎い

同

浮談つき事から気が合かけて人にも咄せぬ中となる

あきのおすびは。月の夜に。しのぶ二人が亭（ちん）ざしき。

覚た処（とこ）からアノ赤衿もいつか苦勞にかはる衿

つゆにしつぽり。ぬるゝ千草や。啼てうれしむしの音は。いと可愛さますおもひ。」（七ウ）はなれぬ中とより添て。も

泣て返した羽織の衿はむねのもつれの数の外

らすまいぞと。つゝむ中さへうらやまし。月の雲

つとめなりやこそ此はで姿衿も重るおもひごと」（六オ）

名残おしさのこゝろが余り口ぜつまぜりの憂わかれ

同

程のよゐ手にツイ握られて肌にすりよる天瓜粉

冬のおすびは。四畳半。おともしづかな雪のよに。かほる梅が

いやな毛虫がいるとも知らず軒で出合の立ばなし

香。うれしふくさに。むねもさばけてへだてなく。すきなこゝ

馬鹿な奴だといはれておくれ粹がわたしの身の苦勞

茶の口うつし。ほんにどふして香箱と。まゝに火ばしの。つれ

結び止たる粽の中をにくや紐とく人がある」（六ウ）

そふ中はどこ迄も。放りやせぬ」（八オ）

いよぶし

ふみのたより 三下り

はるのおすびは。樋のくちや。仇なさくらの宮かけて。好たど

ふみのたよりはナ。今宵ごんすとそのうわさ。いつのもん日も

うしが。意気なすがたに。ほろよゐきげんにほたへかけ。ころ

ぬしさんと。野母なことじやと。ひよくもん。はなれぬ中じや

びあふたる。草枕亱もにくらしはな風が。わる洒落。しかけ

としよんが亱。

て。裾をちらほらまくりだす。はづかしさ

むらさきの 同

夏のおすびは。夕すゞみ。家かた紅ばゐ棹さして。」（七オ）

むらさきの。ゆかりの色やかきつばた。そめてなま中くよ／＼

登る大川。あだなつめびき。くらひ灯かげのさしむかぬ。うた

と。あけくれあんじてくらす亱。

のもんくを辻うらに。いやみいふたりいはれたり。つめる指さ

世の中に。義理ほど」（八ウ）つらい物はなひ。ほれてなまな

き。アレサいたいよこそばいヨ。またさんせ

かくよ／＼と。あけくれこがれてくらす亱。

柳よ／＼ 三下り

やなぎよ／＼すぐなる柳。いやな風にもなびかんせ。

(コトバ)「あちらへゆけば浅草の観音こちらへ行ば芝の神明
アどちらへいたらよかろうやラ しあんばし(コトバ)「なに
はともあれ猪牙できなサイ

梅は北野の 三下り(九才)

梅は北野の。てんじんさんの御神木。見ごとに咲たとせ。咲た
その梅どふじやいな。東風がふく。にほふその香がわしやうれ
し。二人が中は。二世も三世もかわりやせぬ。

同かへうた

たけは八幡の。八まんさまの御神竹。見事にのびたとせ。延た
その竹どふじやいな。雪がつもりて。しほ／＼と。朝日さす。
とけさんすのがわしや(九ウ)いとし。二人が中は。二世も
三世もかわりやせぬ。

川かぜに 二上り

かわ風に。すだれまくりてふねのうち。あだな姿にあらひがみ。
ちよつと松葉につげのくし。さそかさすまいか。サ、そこらは
どふじやいな。エ、。さす氣じやエ。

いなり祭りの 同

いなりまつりのたいこの音。たぬきつく／＼かんがへて。一人

で氣をも(十才)むはらつゞみ。サアサきなサイ／＼。

鎌倉のナ 同

かまくらのナア。よいこの。御所の御庭に。庄家さんの。／＼。
娘が酌に出た。

同

しやくに出たそうなナア。よるこの。さかなよりも。イヨさけ
よりも。庄家さんのむすめが。眼についた

同

眼にもつかばやナア。よいこの。つれてゆかんせ。イヨどこ
(十ウ)迄も。おんなは。他所のゑんじやもの。

同

ゑんじや物とてナア。よいこの。たとへ野のすへ。イヨ。山の
おく。どんなしん苦もいとやせぬ

登り夜船 同

登り夜ふねは。かゝるゆるじやとて。櫂をとつたエ。佐太やひら
かた。淀。水にくるまはくる／＼と。伏見へつくへ。ヨ、イノ
。脚半の紐じやまひとつじや。(十一才)三尺おびじやま
ひとつじや。笠じや簀じや。シテあるくのじや。

同かへうた 同

おのれ夜這を。今夜しよじやとて紙をもんだエ。どこがあたま

や。おいどやら。へそのあたりをくる／＼と。おさへて。つくや。いまきの紐じやまひとつじや。ふんどしはづして入れるのじや。そこじや／＼。アレいくエ。

鎌倉北条 同「(十一ウ)

鎌倉北条。四代目ときより。諸国へ修行に出しとき。てんこちなひ雪に。した／＼かなめに合。佐野の源左衛門が。経世が粟の飯(ま)。梅さくら松たいて。寒さをしのがんせ。

四季 同

はるが気ま／＼になるならば。さくらにうめの香をとめて。柳の枝にさかせたひ。

同「(十二オ)

夏がき俣になるならば。蚊のなひさとに住居して。エ、糺すの嵐にふかれたひ。

同

秋が気ま／＼になるならば。もみぢに伽羅の香をとめて。エ、雄鹿につのがなきやよかる。

同

冬が気俣になるならば。ほたと雪をこきまぜて。エ、こたつの柱がなきやよかる。「(十二ウ)

七草合の手 コトバ

矢倉太鼓を。うちつれて。大人さじきは。うへした平場もつまつて。口上いゝ出て。役者かわり名付の次第。よんで。チヨン／＼でまく明く。そのとき茶屋から。持てまいり升。さげ重に。酒器(さかづき)。乗て。さけぬる澗でも。一杯のみんか。ばんづけ絵本。うりにくる。宇治山水から。女中さん。女中がむりに。着物をひっかけ。だま「(十三オ)つて通れば。女中ぼやく。女中が手水。しんぼがならひで。立て見たれば。花みち群集で。がんまちに出る。モシちよつとまつた。往ふかひよるつく。あぶなひ。嫁々(か)さん。手水場つかへきつた。女中はづみきつた。こりやなんとせう。そもはや果前。弁当しもたり。ぞうりさがす間も。今日はこれ限(ぎり)と。矢ぐら太鼓をうつ。とん／＼から／＼とん／＼「(十三ウ)から／＼。とんがら／＼評ばん／＼。評ばんたのみ升と。目出たくうち出す。祝ふてしやんの。おしやしやんのしやん。

おつかさん 同

おつかさん買てもくんさい。朝せん鼈甲のはり形を。ヨイ／＼。地下でもたない物は。わつき一人たん子しようか／＼。五升計りねらしやれ。人数が多いとサ。すつとこどつこい／＼「(十四オ)

かみなり 同

かみなりぐわら／＼。地しんはゆさ／＼。ゆうれいヒウどろ／＼。うらめしい。身にヒユ／＼。どん／＼。キウ。どん／＼。手うち連中は。ヤツきりちよん。馬よ太鼓うて。一升の豆みな喰そ。

富士の裾野 同

富士の裾野に。西行さんの昼寐。ナウ／＼。うたを枕に。こゝつアまた。田子のうら。ナウ／＼。「(十四ウ)

どつこいせうぶし 二上り

ほれちややめ。ほれちやほつとき。またほれちややめ。それぢやいづもの帳よごし。どつこいせう／＼

同

かねといふもの世かゝるになくば。こんなおとこと寐ぬものに。どつこいせう／＼

同

ふみのもんくはうすゞみなれど。なかに恋路がかいてある。どつこいせう／＼「(十五オ)

物間似(こわいろ) いづれも役者は其得たるをつかふべし

宮本無三四

笠原 異人 山の段かけ合

(無)「まことやおもひ出せば。湊瀬とかわる人の行すへ。両親に分れほん国を出しより。浮つしづんつ。かんなんしんくはいくばくぞや。中にも備前岡山におゐて。敵の伯父たる。白倉がかん計にて。すぐに一命もおわるべきに。義女がなさけにそのばをのがれ。今又まよふ木曾の山中。ふりつむ雪に。前後を忘ずるこのありさま。ハ、アあやまつたり／＼。我母の胎内を出しより。女と「(十五ウ)いふては乳母(めのと)よりしらず。まつた此鳥は。妹背のはじめと聞およぶ。白倉が娘。われを助けしも。なさけの道。たけき計りが武士にもあらず。情のみちも弱きにあらず。生者必滅。有為転変の世の中じやよなア。(笠)八テ心得ぬ。雪おとしげきこの山中。人気どう／＼と立ありさま。さてはまれ人のきたりしよな。のう／＼それにたゝずみたもふは。旅人にて候はずや(無)「いかにも拙者。肥後の国の浪人。望みあつて諸々方々「(十六オ)と武者修行。道案内のどうじにはぐれ。なやみつかれしこのさん中(笠)「その童子こそ身がさしづ。物たらずとも一宿あらばこゝろまかせ(無)「それは千万かたじけなし。しゆ行のそれがし何かいとはん(笠)「一樹のかげ(無)「一河のながれ(笠)「これは雪の軒ふりて(無)「うきみながらのかりまくら(笠)「サア／＼これへ(無)「しからは御めん下されイ(笠)「さて／＼此

大雪になんぎもさこそ今宵は夜どゞもゆつくりと。おはなし申さん（無）「さて」（十六ウ）物ずきなるこの住居。はるをまつたるかん紅梅。自在の竹に葉を生じ。まつたる木に茅ののき。ほうらい山のおきなに出合。千年をのぶる心地でござるテナ

同

佐くら藤五郎

「アノ鐘は。西明寺の亥中のかね。久しぶりできけば。なにとやらなつかしひ。彼古歌に。山田守（もる）僧都が身こそかなしけれ。秋はてぬればとふ人もなし。今はわが身も秋はてゞ。まねく」（十七オ）尾花の穂にさへも。おどろかれたる雪おろし。人目に立ぬそのうちに。うらもん口よりおとづれん。そうじや／＼

藤五郎女房おさん

「この秋からの鎌倉行。下女や下男にいとまをとらせ。右と左りに乳のみ子を。かゝへてたてるほそけむり。兄はさすがにおとなしく。夜るも四ツ迄手習のつくへにもたれて寐るかわいさ。いくつ寐たればとゞさんが。もどらしやると子心にも。まちしかあなきこのさり状。やぶつて」（十七ウ）立るわたしがみさほつゝまずあかして下さんせへナア

同

小はるや弥七

「アゝとんと気のすまぬ事じゃ。此あいだ浅草で。おたかと約そくした日限（ひぎり）は。てう度けふあたり。それにこのころは。文ひとつおこさぬは。但し事あらはれ。手うちにもなりはせぬか。アゝようすがきゝたいなア。イヤ／＼此やうに。思案ばかり仕ていてもすまぬ。まア喜多八にそうだんのうゑ。」（十八オ）そうじや／＼。

植木や空右衛門

「でかしたいもふと。くど／＼と礼はいわぬ。きんじよがあるゆへ。おやかたどのに。うらから来て下されと。いふたれば。追つけかごもつてみへるであろう。そちもそれ。身じまひでもしてまつて居やれ。アゝまゝならぬうき世じやなア

（広告）

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七」（裏表紙）

粹能太幸楼「(表紙)」

(絵)「(見返し)」

(絵)「(序才)」

(絵)

応需 貞信「(序ウ)」

大つゑぶし

女夫(めうと)げんくわは。犬もくわぬ。かしこい人はすかくはぬ。酒づきは。餅喰ぬ。名人の太夫は鎗くわぬ。たつとい出家はさかなくわぬ。おつとどつこいその手はくはぬ。だましておくれな二はゐは喰はぬ。のせておくれなそりや喰はぬ。すゝどめでつちは。じやうだんしてもお目玉喰ぬ。ゑらそふに。ぼん／＼いふてしみたれさんすが気に喰ぬ「(一才)」

同

恋ごろも。縫そめて。わたしやひと重とおもひつめ。どうぞして。衿先は。せめて褌ともなりたさに。袖をあわして神だのみ。つらひしんぼを下がへも。なくておまへはにくらしひ。悪性こゝろの上がへを。しりながら。わたしやこらへておくびにも。出さずにじせつをまちばりして居る身のつらさ「(一ウ)」

同

恋の意気路を。たてとふす。こゝろの針もさま／＼に。小ちやほから。おもひつめ。づなしに惚てこの頃は。今宵も翌(あす)も大ぐけと。こゝろに当たしきしじり。たがひにあはすゑりしめも。かたいなかなるもめんぬい。それさへも。今は人めのせきとじに。へだてられてはさびつきあふたるくさりゑん「(二才)」

同

さつまが一けん。茶やが二けん。むかゐが三げんに将? (しやうぎ)が四けん。つかまへられて。どつちもい五けん。伊勢に六けん藪には七けん。ぼん屋が八けん新丁九けん。浅草の店(たな)が十けん。くるしい長家が百けん。富士の神体千げんに。子供あすびの。ちんばがけん／＼万げんに。此上は億けん佐夜の中やまでそいつは無けん「(二ウ)」

同

二世も三世も。神かけて。かわりはせじなかわらじと。いゝかはす。中さへも。うきよの義理にへだてられ。あはぬおもひにくよ／＼と。こがれなみだも袖のうち。人眼をはゞかる身のつらさ。けふはたよりがあることか。あすは逢れることもやと。寐ても覚ても。片ときわすれぬ其人に。身もよもやつれてほんにうき世ゆめうつゝ「(三才)」

恋の道具もいる／＼と。かづある中に四角でも。ほどのよる。
仲人は。こたつやぐらに箱火鉢。きせるが一寸はしわたし。こ
ゝろひかした三味せんが。色となり物ゑんの糸。ちろりのあつ
かんいたら貝。廻す屏風や。二ツまくらに夜着ふとん。すんだ
あとではなければならぬよ延がみ五六まい

うかれよしこの「(三ウ)

又の約そくよしせぬとてもすなをに返すは誠から

こがれまつ身も今宵と成てうらみいふさへあとや先

お前のしん実わしや嘘なぞといふたも心がさぐりたさ

たまに嬉しひ便りのへんじちがはさんすなばんにこそ

乗たからとて陽気につれてともにうかるゝ花見ぶね」(四オ)

いづれ戻るといふ約そくがあつて乗たる渡し舟

心ならぬよアノ家かたぶね主に似たふり似たる声

おもひつかれて寐る門口をにくや水鶏に起された

涙かくして気を取なをし瘦はせぬかと水鏡

遠座かるのも浮名をふせぐ一ツ身のため主のため」(四ウ)

世間はれねどアノ早乙女はぬれる覚悟で出たる笠

つんとすねたり気取をしたりしられてうか／＼乗られた

仇なおまへに尻つめられてにくやうれしやいたひやら

ひよんな所から曇りがでてぬれにやならぬよ夕立雲

こがるゝおもひかアノ青柳は露も重気なふり見せる」(五オ)
ちよつとかられて紅付られてそしてうれしひ汗ぬぐひ

水の出花とふたりが中は人眼づゝみも切かける

濡て間もなく退く白雨(ゆうだち)のやうなすげなひ降わいな

主の浮気とわたしの愚知がやまる時節はいつである

しん気まぎれと団扇をしがみつがひの蝶見てふさぎだす」(五

ウ)

夢が誠かまことがゆめか首尾を仕た夜の明安さ

扇おとしもその手は喰ぬうまく乗てはよいものか

寐るが早ひか又いぢられて蚤までわたしに腹たゝす

数はつめども今では仇とおもやくやしひつくま鍋

尻も据(すわ)らず気も落付ず朝からそわつく此暑さ」(六オ)

ぬれる便りがおそひか蝉もこがれ啼して日をくらす

せまひくらしをする浮人形よる辺なき身をなくさまれ

散易き芥子の花見りや二人が中も今に散かと又ひと苦

ぬれに重る五月雨よりもいつまア晴るよわしがむね

親がおとしたはつがみなりにしばし逢夜の道がたへ」(六ウ)

高尾 三下り

紅葉ばの。あをばにしげるなつ木立。はるはむかしになりけら
し。世わたる中のしな／＼に。われは親はらからの。ために沈

みし恋のふち。うかみやらぬながれのうきみ。たばこのんで
もきせるより。のどがとふらぬうすけむり。なひて。あかさぬ
夜半とてもなし。人のながめと。なる身はほんに。しんくまん
苦のくの「(七才)せかぬ。四季のもん日はおぐるまや。

ちるはうき 本てうし

ちるはうき。ちらぬはしづむ。もみぢばの。かげは高尾か。や
まかわの。水のながれと。つきのかげ。

いたこ出じま 本てうし

いたこ出じまはまこものうちに。あやめさくとはしほらしひ。

よいやなア／＼。

同「(七ウ)

宇治の柴ぶね。はや瀬をわたる。わたしや君ゆへのぼりふね。

ア／＼よゐやな／＼。

同

はなはいろ／＼五色にさけど。ぬしに増りし花はなひ。ア／＼よ
ゐやな／＼。

柵の達摩 本てうし

あまりしん気くさ／＼に。柵のだるまさんをちよいとおろし。は
ちまきさせたり。マころばしても「(八才)見たり。

同

あまりしん気くさ／＼に。たなの布袋さんを。ちよいとおろし。
ほこりはらふたり。マわらわしても見たり。

沖のくらのいに 本てうし

おきのくらゐのに。しら帆が見へる。あれは紀の国。よいやサ。
みかんぶね。

同

夜たかかをとて。よしで眼を突て。とかく。夜(ママ)「(八
ウ)

うめが香 本てうし

うめが香を。とめてかほりのぬしゆかし。顔は紅梅うぐひすの。
いつか音色をたのしみに。はつこゑそつとまどのうち。いきな
せかゐじやなひかいな。

同

辻うらや。まつ葉かんざした／＼みざん。恋といふ字にひかされ
て。一人雪の夜をしのんできたに。腹がたつかへわしぢや「(九
才)とて。またすこゝろはなひわひな。

ひとつくづや 本てうし

ひとつくづやに。／＼。四季のはな。粹な水仙むるざぎのうめ。
いとしかあひとなで子の。よれつもつれつ糸ざくら。垣根卯
の花かきつばた。からさを歌のめうとあひ。か愛らしひじや。

なひかいな。

一夜明ればかへ歌

一夜こがれてほたる火「(九ウ)のおもひをこがす胸のうち。
しんの闇にもうか／＼と。河端柳の草まくら。水にあわずに居
らりやうか

長き夜の 同

ながき世の。とうの寐むりのみな眼ざめ。浪のり舟のおとのよ
きかな。下からよんでも。ながき夜の。とをのねむりのみな眼
ざめ。なみのりぶねのおとのよきかな。正月二日はつ夢に。「
(十才)

同かへうた

清水の／＼。清げんが。ちらと見そめしさくら姫。恋ゆへまよ
ふたちすがた。やぶれ衣にやぶれがさ。山の奥にてとじこもり。
絵がきしすがたをながめつゝ。ひと眼あひたひさくらひめ

同

あけがらす／＼。うらざとが。庭の古ぼくにくゝりつけ。おり
しも「(十ウ)ふりくる雪ふぶき。篝火おつとりうつおとに。
かむろみどりがとりつゐて。旦那さん御かんにんあそばせと。
すがるかむろをともしばり。

きんときが 本てうし

金ときが。熊をおさへてまさかり持て。富士や裾野の松ばやし。
義つね弁慶渡辺の綱。からの大将あやまらす。神功皇后竹うち
の臣。いくさ「(十一才)人形やよしあし粽菖蒲がたなやあや
めぐさ。

のけば長者 同

のけば長者が二人と。いへど。此あくゑんがうれしふて。深山
のおくのくらしなら。すいたとふりの別せかゐ。

同かへうた

どうじや逢かとざしきでとへば。こちやこのごろはと眼になみ
だ。うき世の義理にからまれて。いるわひな。つらひしん「(十
一ウ)苦をするわひな。

おもひこんだる 同

おもひこんだるわが恋は。さきが邪けんできれかうじやう。た
とへきれても切はせぬ。おもひにおもふた人じやもの。まだわ
たしや。みれんがあるわひな。

口絶して 同

口絶して。おもはせぶりなぞら寐いり。おくの座敷のつめびき
が。つみなか立にそれなりに。乱るゝ「(十二才)かみのつげ
のくし。八まんがねのきぬ／＼に。別れとむなひあけがらす。

松竹梅 成こまやゑどもどり 同

花のなにはに。浪花にはなの。香をなつかしき冬ごもり。今を
はるべとたちかへる。逢瀬を梅の玉づさに。とる手もゆるぐは
つ日かげ。登るうれしさ。またはづかしさ。もと木にまさる。
浮気をやめて。なをいつまでも住の江の。まつもむかし「十
二ウ」に。かわらぬ色の。君がなさけをくれたけや。ふしに込
たるかづ／＼を。いわでおもふやこゝろのくせ

うば玉の 同

うば玉の。闇とおまへにのぼりつめ。一かゝるせかれて忍びあふ。
夜はゆめさへ。黒ぬりの。まくらことばじやなひかいな。

おまへと一所に 同

おまへと一つ所にくらすなら。「十三オ」深山のおくのわび
住居。柴かるわざにいとぐるま。ほそ谷川の布さらし。ぬいは
り仕事もいとやせぬ。

のぼりくだりの 同

のぼりくだりのおつゝら馬よ。さても見事な手づなぞめ。かい
なアヨ。馬士衆のくせが高声で。吉田とふれば二かゝるから招く。
しかも鹿の子のふり袖。

まかしたからは 本てうし

まかしたからはあく迄も。「十三ウ」きげんなをして。こち
らむゐて寐やささんせ。アレまどからあけてきたわいな。ぢれつ

たひでは。あとからからすがなひてきた。カア／＼。

夕ぐれにすだれ 同

夕ぐれに。すだれまきあげたばこぼん。ふつと吹くる涼かぜに。
木の葉こぼるゝつづつらを。はんじて見たりあんじたり。エ／＼。
どうせうぞゑな。つらやしんきや。腹がたつわゑな。「十四
オ」

川たけかへうた 同

はる／＼と。たづねてこゝに紀の国の。きしうつ波は三熊野の。
順礼に御ほうしやと。いふもやさしくになり。名乗もつら
さにむせくるなみだ。あはれなるとのうみの親。

抱たるこの子を 同

だゐたる此子を見るにつけ。おもへば／＼はらのたつ。げんざ
いおのれの嫁々（かゝ）とられ。間夫（まおとこ）くさい馬鹿
らしひ。ばか／＼／＼「十四ウ」

同

なくも道理とこゝかしこ。やまをこへてさとへいた。さとのみ
やげになにもろた。でん／＼太鼓にしよの笛。ヒウ／＼／＼／
／

同

げんざい親にかごかゝせ。のつたわたしは不孝者。かんにんさ

んせゆるさんせ。いきづへさんせ休まんせ。ハイ／＼／＼／＼
こりや／＼ぶし 二上り

富士の山から。三保の松原。「(十五才)どなたものぞひてご
ろうじませ。田子のうら／＼。ふねか木のはか。西行かまつた
けか。こりや／＼／＼

同かへうた

花の弥生はむかうじま。こりや／＼。さゝのきげんで。土手を
ば見廻り。御茶やの姉さん。狐できなさい。かゑりは夜ざくら。
おめらんがめて。格子でのろけ升。こりや／＼／＼／＼

同

しんと夜ふけて。となり「(十五ウ)ざしきの。むつ言そろり
と。のぞひてごろうじませ。膝にじつくりもたれて。おまへに
まかせた。からだじやなんぞと。やたらにのろけだす。コリヤ
／＼／＼／＼

おていなかへうた 二上り

這ていこ。ツテチン。ほうていこ。ツテチン。ほうて／＼／＼
／＼いきたいな。しんけんでおますへ。あんどがあかふていか
れぬ。ヲ／＼／＼ヲ／＼／＼

同

布袋さん。ツテチン。ほてさん。「(十六才)ツテチン。ほう

てほてい／＼／＼／＼布ていさん。ちよろけん福すけ。お馬
になで牛犬猫。にやん／＼にや／＼／＼／＼

追わけぶし 二上り

あいはせなんだか遠江灘で。おもふそさまははや上下。

同

笠を手にもちどなたもさらば。いかいおせわになりました。

同

鳥もかよわぬ玄かい灘を。「(十六ウ)風にまかした帆がにく
ひ

同

咲てほころぶアノ山ざくら。とけてはるさめは化粧のみづ

なんぞとぶし

何をくよ／＼かわばたやなぎ。水の。なんぞと。水のながれを
見てくらす。なんぞとようまア。そんなこといはれたもんだヨ

ざしきニカ

長吉のこしらへにて手に椀と銚子なべをもつてついではのみし
てうろたへたふりにてはしつて出てさけをがぶ／＼のみ／＼」
(十七才)

(コトバ)「サア／＼ゑらいことになつてきたそうどじや／＼

内のいとさんと帯やのむすことしん中に出たといふことでこれ

からさがしにいけといふてやかましい事じやしかしこの夜のふけたに桂川へいくのは気味がわるいよつてなんでも一ぱいぐつとやつていかんとどむならんがそこで此椀で此通りにゑらやりのゑらのみ。ヘイ／＼。今すぐにゆくといふているが。エ、モフせわしなひ (落)「おわんやイ銚子もんやイ」(十七ウ)

同

黒のもんつき朱ざやの大小手ぬぐひほうかむりしてしりからげくせものゝこしらへにてまきゑの吸もの椀をふところに入て塀をきりやぶり出るていチ、チン／＼／＼／＼

「おくざしきへしのび入。まんまと味よぶ。すましでやつたまき絵の一椀。チエ、かた地でよい。さいわい外へこぼれぬうち。

あんじやう咽へさし入なば。ほうびの酒はのみしだひ。ハテ吸ものが手にいつたナア

トこの落合になるとはやがはりにてすぐに家老のこしらへにて是もおなじく」(十八才)すい物わんのふたをもつてエイとしゆりけんうつ

「なにかいやしひアノすい物。うまくさそうな其一わん。こつちへわたして。(落)「ふたわつてしまへ

同

げんばのこしらへにて三みせんにふるしきをかぶせ首じつけん

のおも入にている／＼ふりあるべし

「ヤア何。すりやこれがかんしやうじやうの首とナ。ムフ。よくうつた。今身どもがじつけんして。くれん。テモほそながい首だ。ヤア／＼こりやかん丞相とおもひのほかデ。(落)「てんぢにシヤンじや」(十八ウ)

(広告)

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七」(裏表紙)

十、粹の懐 八編(都々逸以外も翻刻)

粹のふところ

第はちへむ

半水あつむる

貞のぶの画」(表紙)

(絵)「(見返し)

(絵)

貞信」(序才)

日月のたふときはゑがける人物に譲りいたらぬ作者と画工板元は彼諺に似たればとて

限りなき粹の天上をつくらんとおろかに智慧をほしがつて居る
一荷堂主人額題「(序ウ)

大つゑぶし

神やほとけ。仇名のつくものは。出かはりせぬ女中がこれは稲荷。新町女郎が。天神に。御寺のかこい者が大黒で。耳が遠て戎さん。色の黒いが護摩堂の不動。けつかうな人が如来さま。人が尊とむにん徳で。くさでけ八まん。端手な伊勢参りが三宝荒神で。高い下駄はきや行者さんで。やかましひお嫁々(かゝ)が山の神「(一オ)

同

星のつく物を。よせていをふなら。家老の由郎之介は大星に。播州にあぼし。障子のかげぼし。干物やの店には切干に。夏の酒もりや物ほしで。着類道具の土用干。瀬田の唐はしやからかねぎぼし。城のばんばは合羽ほし。天道ぼし。天王寺の蓮池に亀が甲干。祖父(ぢい)さんばさんの梅ぼしで。十日ゑびすの吉兆のうり物立ゑぼし「(一ウ)

同

家名はなんと。たづぬれば。ひぎに手をおき高砂屋。岸うつ浪

は。ふだらくや。浜の真砂は石川や。ひとりでこするのが蝻そくや。後生ねがひのありがたや。幽霊どろ／＼うらめしや。屏風のうちの泣声は。ゑら文屋。うつ／＼しらなみうなばらや。おんあぼきやべいろしやのまかばたらまにはんどましんばらはりたや「(二オ)

箱入娘も。ゆだんがならぬ。しきより外へでんでむし。と。そだて上られし。火取虫め。蝶々とかけて寐るこうろぎ。うらで鈴むしとかこつけて。久松虫にあぶ首尾は。いなごの方からこがねむし。人の蛇(くちなわ)にかゝるも。いとほづに。よめりこみ。かわづまくらのむつごとに。いとじてならぬと。たがひにくつわむしなめくじり「(二ウ)

同

親たちの。そのいけんやんま蚊やの蝉へかたへ。げぢ／＼嫁入を。さゝねばならぬ。蟻がみのむしをかゝる犬に手をかまきり。みつ／＼蜂をしりながら。おやの蚯蚓と忍び合。羽蟻とはなさけなひ。蜘蛛かける。百足いふじやなければ。きゝわけ。さつぱりチヨンと。思ひきり／＼す。ハイと返事はしなからも。此道計はとんぼやもりも止(やま)りよか「(三オ)

同

雲ふりは。山城で。からひお口がこりや大和。いけ花は。遠州

で。けんは薩摩で主が淡州で。定めなひのが美濃尾張。でけて
わるいが紀州に肥前。小べん丹後に百姓一揆。礼者が上野下野
に。おなごのやもめは。江州。夜鷹が相州でさけの信州。水の
阿波気のおほひお客でこいつが伯耆」(三ウ)

うかれよしこの

宵は嬉しくきく鐘の音も今はつらさの明のかね

おもひ出す程わするゝ閑がなくてしばしも苦が絶へぬ

仇な朝顔根のなひ竹にそふて色ゆへからむとは

籠の鶯おもひの竹にかこはれながらも啼わぬな

主を松むし啼音をとめばもしやそれかと気がもめる」(四才)

逢ぬ其夜のしんきにつれてともに枕もいぢられる

はれてうれしく添ながらにももれりやはづかし新枕

過し一言まだ耳そこにあつて夜毎の夢に迄

おもひ切たといふひと言にどふか未練の残りぐち

明くれこがれて見た夢覚てけさは夢やらうつゝやら」(四ウ)

歌の文句がふと気に当りうたひながらもふさぎ出す

色も味(うま)みも薄(うすい)と知つてはつといふので好(す

く)新酒

ゆすり起されこちらを向(むけ)どいやな嵐にすねた萩

逢ぬつらさを打夜の礎主の寐耳に這入まで

かるひ身じやゆへ添ぬものとしあん定めて散た露」(五才)

昼の枝折(しをれ)に夜は引かへて草もちる露のぼるつゆ

稲に鳴子が付さへせねば鳥も苦勞はせぬものを

おもひ染にし色さへ今はなくて苦勞の種茄子

へんな風から雫とかわりこゝろおく露さへ残る

人前は咲て見せても苦があるゆへかしんはやつるゝ萩の花」(五

ウ)

なるのならぬと此鬼灯は破れかぶれの身の苦勞

すがたかくして陰からそつと声で迷わす草のむし

程のよる場を立とむなひにすかん鳴子が稲すゞめ

へんなはづみにふと誘れて一夜つれ添おどり連

顔の紅葉の色見てとつて人の見ぬ間と手折かけ」(六才)

あけんしられてうつ向ながら逢か逢ぬの畳ざん

深ひおもひがいつしかそれてあさひ流れにかゝり船

花の便りに色よい返事夜半のあらしがふかぬまに

そつと二人が気を置ごたつたれも当りにこぬ様に

ひよんな障りがでけたる故に根じめ狂ふた忍びごま」(六ウ)

上るりさわり入 よしこの

命迄もおもふたからよ(鬼一の三)あの人を頼んで。雨の

ふるほどやる文に。へんじしやらぬのは。但しはおんなにほれ

らるゝがきらいか。嫌ひなら此様に。どこもかもほれられるやうに。可愛らしひなぜ生りやつた。そなたをのけて殿御とは。ほかにしあんはないわいな

同

ふつと逢ふたがわたしのつみよ「(七才)」「(賢女ノ八)三千せかゝるをたづねても。又とあるまひ殿御ぶり。目にちら／＼とかたときも。忘るゝ間なき三つらさま。」いつそせつなひ胸のうち

同

すへの苦ろうも皆打わすれ「(廿四孝ノ二)御主さまとも御主人とも。わきまへしらぬつたなひ筆に。心のたけを岩本の。神のむすぶのおなさけに。うれしひ枕かわした時」「(七ウ)うれしはづかしこのすがた

同

人にやいわれずおもひのたけを「(阿わの鳴戸)めうとのまこととを天道も。あわれみあつて国次の。かたなのせんぎすむ返は。夫のいのちたすけてたべと。」ねがふは神さまほとけさま

同

日頃おもひのうらみも今は「(忠九)むすめこゝへと呼いだせば。谷の戸あけてうぐひすの。梅見つけたる」「(八才)ほゝゑ

がほ。まぶかにきたるぼつしの内。アノ力弥さんのおやしきは。モウこゝかへ。わしやはづかしひと。」いふにいわれぬ袖のうち

同

こがれなみだに又ふさぎかけ「(ひらかな二)つまかふ鹿の果ならで。なんぎすゞりのうみ山と。苦ろうするすみつき事を。かづかくお筆が身のゆくへ。いつ迄はてしなにはがた。」「(八ウ)すへはどうなることじややら

同

それといわねどアレしんきらし「(伊賀七)おそでは一しんしづ馬が顔。テモよゑ男とおもひそめ。いゝたひこともむすめ気の。口へ出かねる茶の花香。かほをながめて汲手もと。わきへながすも気はそゞろ。茶わんばかりを手に持て。さし出すころのおもわくは。」すいりやうさんせわしが胸「(九才)

いつしかに 二上り

いつしかに。君をまつちの。やま／＼こへて。かよふ五十崎こまがたや。千どりかもめのこゝろがあらば。しらひげさんへ。しんじつしんから願かけて。ちよつとおかほを見めぐりならば。うれしのもりであるぞひな。それ／＼それもそうかいな

同つゞきかへうた

衣もんざか。今宵くるわのあふ瀬の首尾を。は「(九ウ)しば
のあめにしつぱりと。君はさん谷の三日月さんよ。しんじつし
んから願かけて。二ツまくらでたのしむならば。うれしのもり
じやなひかいな

大尽舞 二上り

そも／＼曲輪の始りは。ゆげの道鏡勅をうけ。はじめてくるわ
をたてらるゝ。来るとは御客がくるゆへに。やわ和(やわ)ら
ぐるこゝろにて。くるわと名「(十オ)づけ初にけり。ホウそ
れ。大じん舞を見さぬな。その次の大尽是。そも／＼御客のは
じまりは。高麗唐土にはあらねども。今日の本にかくれなき。
紀の国文三でとゞめけり。ホウそれ。大じん舞を見さぬな。今
はくるはとなりふりも。粹でまるめた恋の山。出ぐちに柳をう
へたるは。これぞいはれのある中に。お客をまねく合ことば。
諸事は「(十ウ)柳にやり羽子の正月しよさぬは客のはれ紋日
ひがらをうけこんで六条三すじのあげ屋町こゝにうつせしらい
れきはかよひなれにし深くさの少将さまにはあらねども小まち
つゞきとおもてぶせ顔は朱雀ののうかなや出口にかけし橋の名
は衣もんばしとはもふすなり入くる客の粧にかたちつくるう所
とて衣もん「(十一オ)橋とは号(なづけ)たり。今の世迄も
人ごとにゑもんばしとはもふすなり送つてもらふ御客たち名こ

りをおしむさらばがきなさけをつくる君たちに松のくらひと名
づけしはヲ、秦の始皇の御狩の場であめをしのがせ玉ひしに松
の木かげのやどりとて太夫とくらひを玉ひしに余風をいまに色
里の江口神崎堂の津や浅づまふねの「(十一ウ)浅からぬ。契
りは千歳いろかへず。嶋原と世によばれ。たのしみうたふ一す
じに。おもしろや。

よし／＼ぶし 本てうし

そも／＼是は。宇多の天皇。くだらぬ恋の大將軍。平の卿か不
器用か。仕て見にやわからぬ紋づくし。偕もいろよき若まつし
まや。千代も目出たきいてうづる。丸にいの字のあげはの蝶に。
世の中まるふて。よし／＼／＼「(十二オ)

同

さてもこゝろがうかれだしたる。たつぷりいやみの子ども衆が。
地につきかぬるによし／＼。世の中丸うてよし／＼

同

引ぞわづらふはなあやめ。ひぬきをねがふは二葉ぐさ。しつか
と取もち菊桐に。御代はあんせいよし／＼。世の中丸うてよし
／＼

同「(十二ウ)

見つけられたるふたりが顔は。あからむ月には玉兔。雪やかう

りとつもりし中も。とけてさくらの花ざかり。世の中丸うてよし／＼

同

引か引ぬか二挺の弓。引ねばわからぬ三十三間堂。したりや／＼してふり立て。合すは内儀の手際ぞや。とりもちしつぱりこいの／＼。世の中まるふてよし／＼」(十三才)

浮世小路 三下り

浮世小路に。うき世をのぞく。浮世の外の世たいして。木具で飯喰てにしき出の茶わんはしがみは旦那さま。のし。乙子朔日は。小倉野。茄子はおもやから。あくおけが。エ／＼／＼。わしや気にかゝる。ア／＼／＼。浮世じやわいな。／＼。氏はのうても玉のこし

色がある 三下り

色がある。せうちで惚た」(十三才)よこれんぼ。いゝ出すからはあくまでも。立てもらはにやならぬぞへ。どうすりやそわれるえんだらう。ヲヤ每ばんあふたらつれしかろ。じれつたひ。

むかし／＼ 三下り

むかし／＼。山のあなたにあつたげな。祖父(ぢい)は山へ柴かりに。婆さんは川へせんだくに。るすにすゞめが柵もとの。

のりを残らず喰て仕まい。ばさまは見るより腹を立。」(十四

才)舌きりすゞめでおみはなす

同つゞき

祖さんいとしや。杖つきのの字で。糊を喰た雀どんはこゝらにござらんか。ちう／＼。野こへやまこへさと／＼たづねて。エゝいたといな

同

かにどん／＼。どこへゆきやさんすぞへ。猿がしまへ。親のかたきをうちゆき候。おこしの物は。なんで」(十四才)ござる。是かこれは。日本一のきびだんご。ひとつ下んせおとももふす。はさみの化者。丹波ぐり。引うすに。針。功の者がよりあつまりて。さるが嶋へおし渡り。エイヤどう／＼。念のうおやのかたきをうちおふせ。皆さんいかあお世話と。一礼し。もとの穴へとは入けり

よいしよこせうぶし 二上り

をもふははてるし。をもふとり」(十五才)やかへる。あとにのこるは。四本ばしらに土俵にすな手をけに「よいしよこしやう。塩とみづ。

この外いろ／＼かへうたあれどいづれもよしこのにてうたへるなり

一ツ夜着 三下り

ひとまへだてゝ。恋のやみ。かこいといふもつたわれて。見てもふかいは。うらやまし。ぬれて手水のみづくさき。はなれぬ中ぢやあるまひけれど。なんのかのなき一ツ夜着

こゝはしま原」(十五ウ)

こゝは島原出口のやなぎ。まねくかむろが合づの手くだ。しのびあふよのそのたのしみは。恋の重荷はいなばのまつよ。あを葉さかへてともしらがまで。千代のおもひは。これなんべ。サアノよゐノよゐとのご。

声色(ものまね)

いづれも役所は得たる声にてやりたもふべし

髪結源五郎

「うめが香や。人の心も春しらず。アノウつくしひ者は」(十六才)器量ばかりじやない。このあふぎまで。よう書をるナア。せめて一夜さでも。あんな者を抱て寐たら。男にうまれたかゝもあるといふものと。いふた所が。こつちおもひのあつちなんともないじや。そんなこといふていずと。仕事場の火でもともそうわい

奴矢田平

「ハ、ア奇妙ノ。かゝるふしぎを。見るも尽せぬ互ひの奇えん。おきづかいなされ」(十六ウ)一まづこのばを切抜て。命

まつとふまたのさい会。おさらば

駒沢治郎左衛門

「君が一日のなさけに。妾がもゝとせの命をすつると。いふこと。これまで余所事にきゝしが。今といふいま。我身にひしとあたつたり。一人りの妹はわが殿の。おために最期をとぐる。それとこれとは事かわれど。も。をもひがけなき深雪どのなれのはて。袖ごひと」(十七才)迄なりさがり。われを尋るせつなるこゝろ。ふ便とは思へども。それといわれぬ大事の役目。大もうをかゝへしわが身のうへ。ことにせんこくおんなが申せしは。幼少より言号(いひなづけ)もあるとの事。始にそれと聞ならば。やさしき言ばもかけずして。今のなげきをさせまじもの。しらぬ事とはいゝながら。まことあるぶしが。愛子(あいし)にかんなんいたさせるも。我あやまり。種々さまノのしん」(十七ウ)くをかたる其身より傍にきく心のうちのくるしさアおもひまはせば不便やナア

手品(てづま)の伝いろノ

こよりにて火を釣伝

紙よりをふとくかたくよりて口に生塩をすこしいれてこのこよりの先にかみつけてよくおこりたるかた炭の火にしかと当ればよくつくなりどこ迄つりゆきてもおつることなし

座敷を大海にする伝

白狐のふん（木葉やにあり）を黒焼（十八才）にして水にてとき壁たゝみふすまなど一間のうちそこら一面にふきかけ高さ二三尺ほどもぬらして其一間をしめきり中にて何なりとけむらすべし其煙り彼（かの）ふきかけたる薬にふきとられてぬれたる所より上にはけむりなしこれを一間へだてゝ灯をともし見れば真の海のごとくに見ゆるなり其煙を扇にてあふげば波のうつごとくにて実に物すごきなり（十八ウ）

（広告）

泉陽堺 具足屋重兵衛

撰都 河内屋輔七（裏表紙）

更て遠音の爪弾にくや耳にさはりのあだ文句（序才）

二編序

おもしろく弾や諷へや舞の手の、其合の手を抜文句は、チヨト一ト口を粹とやら、ころばす声のどこやらが、味（うま）イ処へサハリふし、すツくり合す太棹も、づる／＼／＼と本調子、跡はどふなとさん四郎、杯と持込上手さに嗚呼よしこの人もいふらし

編者述（序ウ）

うつてかわつたあの気やすめも（本能寺の段）たとへ不忠になるとても。君の御最期よそになし。なんと此まゝ落らりよ。これをおもへばみづからが。宵の酒宴の其時に。はん女が閨のかちごと。その一さしの扇とは。別れをつげししらせかと「おもや今さらうらめしい」（一才）

すげなひおまへとしつてはいれど（すしや場の段）たとへこがれて死すればとて。雲井にちかきおん方に。鮓屋の娘がほれらりよふか。一生連れそふ殿御じやと。思ひこんでいるものを「ちつとはくまんせわしが気を

神やほとけもたれゆへいのる（よしはら二かいの段）こうした事とは露しら（一ウ）ず。此の妹はまめなかしらぬ。とゝやかゝ様おわづらひでもあらふなら。よもやしらしてたもふら

十一、新版サワリ都々逸 弐編

「新版」サワリ都々逸（よしこの） 弐編

（絵）「（見返し）

（絵）

ド、一

ふもの。たよりのないを杖柱首尾よう年を勤めたら」よそへゆく身ぢやないものを」(二才)

実意つくせどさきへはしれず」(ぬまづの段)燈し火の消しよ。アノ妙薬をどうがなと。おもひつきしが身の因果。どふぞお慈悲にこれもふし。今宵の事は此場ぎり。お年よられしお前に迄。苦勞をかけし不孝の罪けふや死うか翌の夜は。我身の瀬川に身をなげと。思ひし事はいくたびか」いかにほれたがわるいとて」(二ウ)

たよりのない身がやつぱりましよ」(お三茂兵へ)かくぞとは。いさ白露と消る身の。科なき科に埋れし茂兵衛は義理にからまれて」たよりがでけたら苦がました」(三才)

女ごゝろもさだめたからは」(けやむらの段)人なき道に日をくらし。さまよひありく親と子が。たよりのない身の上もなき。便りの人にめぐりあい。わたしが心の奥底を。明すは二世の我夫かならず見すてゝ下さんすな」どんなしんくもいとやせぬおもわぬしゆびしてかほみたけれど」(いもせ山三段め)」(三ウ)山と山とが領分の。さかいの川に隔てられ。物ゆひかわす事さへも。ならぬ我身の俣ならぬ。今は中ノ思ひの種。いつそ隔てゝ恋わびる。あわれぬむかしがましぞかし」とりのなぐねにうらみごと」(四才)

とふざかるのはやくそくなれど」(忠八道行)はづかしいやらうれしいやら。あんじてむねも大井川。水のながれと人ごゝろ。もしや心はかわらぬか。日蔭に花は咲ぬかと」おもひすごしてめになみだ

おとごゝろはそふしたもののか」(二代記八ツ目)夫婦のかため済までは。どうやらつんと心が済ぬ。みじ」(四ウ)かい夏のひと夜さに。忠義のかくる事もあるまい是程迄に附しとふ。私しがごゝろおもひやつてはくれもせで」あへばじゃけんなすてことば」(五才)

おもひつめたる気も推量せず」(大功記十段目)残らず聞ておりました夫の討死あそばすを妻がしらひでなんとせう。二世も三世も女夫(めうと)じやと。おもふているになさけない」おとごゝろのにくらしさ
またのねがひはいくちよかけて」(廿四孝二段目)お主(しう)屋とも御主人とも。わきまへしらぬつたない」(五ウ)ふでに。こゝろのたけを岩本の。神のむすぶのお情に」どふぞあかれませぬよふに
人のいけんもみゝにはいらぬ」(いもせ山四段目)なみだにしぼるふり。？にむちよ手綱よ立あがり。竹にサアすゝめはナアしなよくとまるナとめてサアとまらぬいろのみちかいな」ほれ

たこゝろのてまへでも」(六才)

あへるしゆびにもとやかかういふて」(かしく新やしき) 爰もながれの嶋の内花めづらしき新家敷夜はゆきもとだへなく。軒にかゝやくかけあんど。仇なかしくのちらしがき。これもたれゆへあき鹿の」よそへいかんすつらにくさ

気づよいばかりがおとこのくせか」(ゑんがく寺の段) むりと
はさら／＼おもわ」(六才) ねどぎりある弟大事の夫いづれを
いづれと分かねて。ひとりあかする夜明の鳥。可愛かあいと鳥
さへも」やさしいことばもあるものを」(七才)

にがいいけんのくすりもなんの」(合法下の巻) しゆん徳様の
おん事はねた間もわすれず。恋こがれおもいあまつて打つけに。
ゆふても親子の道を立。つれない返事かたいほど。なをいやま
さる恋の測いつそしづまばどこまでもと。あとをしたふてかち
はだし」そへにや命もいらぬもの

たよりにする身と」(七才) ぬしやしりながら」(?口) 此世
でそわれぬあくゑんときけばきくほどなを。こひしく。お手に
かゝつて死んだなら」?(こが) れてしぬよりはるかまし」(八
才)

いまさらすまぬといわんすにくさ」(あこや) 水責火責はこら
よぶが。なさけと義理にからまれては此ふし／＼もくだくるお

もひ。それほどせつないことながらしらぬ事はぜひもなし。此
上のおなさけにはいつそころしてくださんせ」捨た命がひらは
れよか

こがれりやこゝろも身にそひかねて」(八才)」(朝顔宿や場)
難波の浦を船出して。身を尽したる憂きくらふ。泣て明石の風
まちに。たま／＼あいはあいながら」人目あるゆへまゝならぬ」
(九才)

それといわれずひとめもあれば」(伊賀越七ツ目) お袖は一し
ん志津馬が顔テモよい男とおもひそめ。ゆひたい事もむすめ気
の。口へ出兼る茶の花雪顔をながめて汲む手元わきへ流すも気
はそゞろ。茶わんばかりを手に持てさし出す心のおもわくは」
すいなこゝろでさとらんせ

おもふほどにはふでにはかけぬ」(九才)」(あたり見廻し由良
の助釣燈籠のあかりをてらしよむ長女は御台より。敵のよふす
こま／＼と。女の文の跡やさき。参らせ候ではかどらず」あふ
てゆいたいうらみごと」(十才)

わたしばかりかぬしまでやせた」(泪が嶽) おんなのきつすい
天下一。そのこゝろを見るからは。物がたらんとひのたくり鏡
にうつる我顔を。ためつすがめつうちながめ」ほんにしんくは
どくなもの

いかに男のわが仮じやとて「(おそめ久松質や場) そりやきよくがない胸欲な。高いもひきいも。ひ」(十ウ) めごぜの。はだふれるのは只吉人。それにまだノ、かなしきは。ゆふべのふるのあがり場で。このはら帯をかきんが。見つけさんしてコレお染「推量さゝんせおんな気も」(十一オ)

ゆへばぐちじやとゆいまげられて「(みぶむらの段) いやといふたらとゝさんの。ためにならぬがかなしさに。うられてゆくはゆくけれど。かならずあんじておくれなへと。いゝつゝそでのうらぬなく」ほんにおなごはそんなもの

うわきもさゝんせあくしよもさんせ「(おびやの段) わたしも女のはしぢや」(十一ウ) ものりんきのしようもまんざらしらぬではなけれども。かわいゝ夫に苦をやまし。わづらひでも出ようかとあんじすごしてなんにもいわず。六角堂へお百度も。

どふぞ夫に飽れぬよふ「わたしを女房ときめたなら」(十二オ) かとふやくそくしたしゆびなれど「(千両のぼり) 相撲取を男にもち。江戸長崎や国々へ。行かしやんすりやそのあとの。留主はなほさら女気の。ひとりくよゝものあんじ。夫にけだのないよふと。いのる神様仏様。妙見様へ精進も戻りやさんして顔見るまで」どふもまことゝおもわれぬ」(十二ウ)

かならず見すてぬとのお言葉を「(志渡守のだん) 長者が捧げ

し万燈より。わづか貧女の一燈が。百倍ましたる未来のたむけ。草葉のかげの兄さんが。嘸悦んでござんせふ。うれしいぞやかたじけない。爰からおがんでいるぞやと「いづものかみともおもひつめ」(十三オ)

ほどがあるぞへうたがふかとして「(十種香のだん) 勤めする身はいざしらず。ひめごぜのあられもない。とのごにほれたといふ事が。うそいつわりにいわれうか「いやならいやじやと言わさんせ

ほれたといふ字がわがみをせめて「(安達さいもんのだん)「(十三ウ) 爰、爰はお庭さきのしほり門戸をたゝくにもたゝかれぬ不孝のむくひ。此垣ひとへがくるがねの門よりたかふこゝろから」ゑにしがくるふのしはり縄」(十四オ)

あぢなところからついとうざかり「(上かんやのだん) 若者のおん顔をつくノ、と打ながめ。ア、定めなき世の中や。果報といふもしばしの内。かりそめのおあそびにも玉のこしよ。手ぐるまと。もてかしづかれたまいし身が。今は野もせの草のうへ。

綾やどんすのしとねとも。にしきのよるの物」(十四ウ) とては此乳母がひぎの上。さぞやゆめにもうつゝにも「せけんはれてはあはりやせず」(十五オ)

ほれにやよかつた今さらおもや「(ひばり山雪ぜめの段) あら

いたわしの中将ひめ。七月七夜はなきあかし。あくる八日のけ

さのゆき。我をせめくの種となる」さきはなんともあるまいに

気づよくされてもおまへのそばが「(せんだいはぎごてん場)

サアこれでもかと。なぶり」(十五ウ)ごろしに千松が。くる

しむこへもきもさきへ。こたへるつらさ」はなれにくらしつみ

男」(十六才)

うわきさんすをとめるぢやないが「(東天紅)お前がたのびつ

くりより。わしにびつくりさゝしやんした。にせむかひをこし

らへて。かんせうじやふ様ころそふとは。あなたになんぞうら

みがあるか。但しは時平にたのまれしか。よくにはなじみの女

房もすて。母様の義理もおもわずか」ちとはわたしがこゝろに

も」(十六ウ)

さかいすじ

むら井店」(裏見返し)

(絵)「(見返し)

(絵)「(序才)

序

嚮にさわリド、一初編二編を書輯めしに乗が来たやら当りつけ

こと葉の花が咲かけて終にはさわリ三編目一口癖に耳近ひ文句

をたつぷり撰出して風呂家稽古の説漏(でたらめ)を止なん?

と云爾

一徳主人」(序ウ)

佐和理」(表紙)

(絵)「(見返し)

(絵)「(一才)

あく性さんすもエ、ほどがある「(京四季)おもひぞつもるま

るやまに。けさもきて見よゆきみざけエ、」そしてわたしをど

ふさんす」(一ウ)

うれしふたりがこゝろもとけて「(二上り御所ぐるま)ゆきに

おもひはふか草の。もゝ夜もかよふこいのやみ。きみがなさけ

のかり寝の床に」みだれがみさへはづかしい」(二才)

しとうまことはアレ見やさんせ「(はるさめ)はなにたわむれ

しほらしや。小とりでさへもひとすじに。ねぐらさだめぬ気は

ひとつ」なんのふたみちあるもので」(二ウ)

十二、(さわリ都々逸)

佐和理」(表紙)

またの首尾とてまかせぬからは「(しほくみ)あふたそのとき
やツイころび寝のおびもとかみでそれなりに」はなれとむない
夜着のうち「(三才)

へだてられたるたがいのもとは「(狂らん)花の夕部のうつり
がもれてそらにしられぬゆきの日也」しとふころのつもりか
ら「(三才)

あわぬおもひにまた案じかけ「(そでのつゆ)つらさにあきの
夜ぞながき。あだにとひくる月はうらめし。つきはうらめし」
すまぬころにふさぎだす「(四才)

いまはたがひに口ぜつもとけて「(ゆき)なく音もさぞなさな
きだに。ころもとほき夜半のかね」うれし時さへ子(ね)よ
とうつ「(四才)

こがれながらもころのうちを「(系ちごじ)かりのたより
にとどけてほしや。おぢやちゞみのどこやらが」わつていわれ
ぬ義理もある「(五才)

うれしがらせもうわきがじつか「(木づ川)ちりゆくはづへば
ら／＼とふるはなみだかあきさめか」しかとわからぬぬしの気
は「(五才)

それとあかさぬまだそのうちは「(朝とで)鳥のなくこゑはる
には似てもおち葉いろ／＼落ばがなかに。すゐたいてふをとり

あげがみの「いふにいわれぬはづかしさ」(六才)

ころ知らずがエ／＼にくらしい「(かよふかみ)しり目づかい
をよそにしてまかせぬしゆびをわけあるやうに」うわさきくほ
どしやくの種「(六才)

へだてなひとはうれしいことば「(なのは)うゑ／＼さまのち
はぶみもべつにかはらぬさままいる。おもひまはせばもつたい
のうて」うけたなさけがあだとなる「(七才)

なぞをかけられまたいまさらに「(くろかみ)ぐちなおなごの
ころとしらでしんとふけたる鐘のこゑ夕部のけささめて」ゆ
かしおもひがますわいな「(七才)

あぶらでかためた椎茸たばを「(ぶんごおかる勘平道行)とま
り／＼のはたごやで。ほんのたび寝のかりまくら。うれしいゑ
んじやないかいな」あらいがみにはたれがした「(八才)

いつそあはねばこれほどまでに「(新内らん蝶)すいもぶすゐ
も恋ぢには。くろうをするがならひぞと。いふがなかにもわた
しほど」つらひしんくはせぬものに「(八才)

ころがらとてわしやこのとふり「(新内あわしま)系りそで
ぐちもほころびの。わたさへあしにかゝりうど。いまはたがい
に見ぬかほを」あんじますすぞへぬしのこと「(九才)

おもひとげたるそのうれしさに「(さいもん小くり車びきの段)

かはすまぐらのむつことに。かわるまいぞやてる手姫。かはら
せたまふなわがつまと。寝ものがたりもはやむかし「わすれか
ねたが身のいんぐわ」(九ウ)

ぎりやせけんてだがみにせかれ「さいもんかるかや高野山」
石堂丸のふりそでと。かるかやめされし御衣の。そでとたもと
がもつれあい「ひよんなわかれをするつらさ」(十オ)

いのちまかせてこうなるからは「さいもん藤五郎」たとへこ
の身はやつぎきとも。一ぶだめしにあふとても。みぢんもふと
ふうらみませぬ「おまへのこゝろのすむやうに」(十ウ)

どふでいち度はわかれにやならん「そでがうら」ちれどかほ
りはなをのこるたもとにきやらのけぶりぐさ。きつくおしめど
そのかゝるもなきたまごころも「ほんにこうなりやゑんまかせ」(十
一オ)

くやしなからも身をすりよせて「こすの戸」しやくにうれし
きおとこのちからじつと手に手をなんにもいわず「いまじやお
ちつくむねのうち」(十一ウ)

うめとつばきがゑがほをふくみ「二上りまんざゐ」とくわか
に御まんざゐと御よもさかへまします。あいきやうありけるあ
ら玉の「床にうれしきさしむかい」(十二オ)

時せつなりやこそはやいろづいて「はうた福寿草」めでたき

御よのどかさよ。はなのこゝるもうつり気な。ツイ。つぼみ
さへひらきそめ「かわぬがられたはちのうめ」(十二ウ)

ふかい色香にツイまよはされ「うらしま」はなや恋しきおも
かげを。さつと。ふきとく。はる。かぜに「いつかこゝるもつ
わのそら」(十三オ)

ちとせかわらぬわたしがおもひ「ときわづの老まつ」この松。
たちまちたいぼくとなり。ゑだをたれはをかさね。木のますき
まをふさぎてその「よそでぬらしはせぬものを」(十三ウ)

うそかまことかアレひとぢらし「ねやのあふぎ」あきのあふ
ぎとすてられて。わしやどうむならぬへ。なんとおもふていさ
んすことか「どうぞあかしていわさんせ」(十四オ)

ふかうなるほどなをぐちになる「源太」まくらの下へやる手
さへつとめぎはなればからしいぢよろう冥加にかないしを「い
んぐわ定めてすゑながら」(十四ウ)

あだにまよふて意気路に惚て「さいもん」の谷くみ討「ぼう
／＼まゆにうすげしよう。かねくる／＼とふくませて。今べに
さしたるよそほひに「うつゝぬかすは無理じやない」(十五オ)

とくしんづくならどうなるとても「すゞ木もんど」昼夜あげ
づめなさりよとまゝよ。又はわたしがさられたあとで。おまへ
にようばにならんすとても「うらみりんきはおもやせぬ」(十

五ウ)

どふかあやしきそぶりとおもひ「(???)かな」しらぬながらも
千鳥がすいりやう敵は川を渡さじと水底大綱小づな十文字?引
わたし「あじな手くだをもちかけな」(十六オ)

命すてゝもおもひはすてぬ「(あこや)水ぜめ火ぜめはこたよ
うが情を義理とにひしがれてはこのほねノもくだくる思ひ」
思案さだめて添ふたもの」(十六ウ)

またもそれかとおつま戸を明て「(一の谷)さてはよろひのかげ
なるか恋しとまよふ心からおすがたとみへけるかと」にくや水
鶏にだまされた」(十七オ)

一座しながらツイまよはされ「(一の谷組討)中に一きはすぐ
れしひおどしさしもの平山あしらいかねはま辺をさして逃
す」とめてくろうをするわいな」(十七ウ)

とかく浮世はおもひの俛に「(新口村)奈良のはたごや三わの
茶や五日三日夜を明し廿日余りに四十両つかひはたして二部
のこる」かねがせつないわかればゝる」(十八オ)

そへぬほどなをそひたきおもひ「(道行)お公家さまやら侍さ
まやらしれぬなりふりすつきりと水ぎはの立よいおとこ」まよ
ひそめたが身のいんぐわ」(十八ウ)

わけを聞たらまた今さらに「(二代鏡)さのみむりとはおもは

ねどいかに男のこうけじやとてわしといふものそは又おき寐所

迄をしみてやり」これがなかずにいりりやう歎」(十九オ)
この世ばかりかアレさきの世も「(お七)手に手を引合てめい
どの旅を仕升はいの思ひ廻せばまはす程」どふぞこの身をすて
ぬやう」(十九ウ)

いつかたがひに気をくみかはし「(???)七)水の出花へ茶のはな
香そつとさし出す追蹤も」へだてなひぞやすへかけて」(二十
オ)

ふつと見そめてどふした縁「(岩井ぶか)何のゆかりもないも
のにうみ山御おんのその上にまたいるノの御くろうかけおも
へばおそろしい」しのぶおまへもわたしゆへ」(二十ウ)

おくる庭先わかれのそでに「(鳴と)今一度かほをと引よせて
見れば見るほど胸せまりはなれがたなきうきおもひ」切戸ぐち
とは気にかゝる」(二十一オ)

とても此世でそふ事ならにや「(はし本)乗たわたしに神さん
や仏さんがばちあてゝなぜにわたしをさかさまにおとしてころ
して下されぬ」いつそ死んだらまじじやある」(二十一ウ)

そんなくもりのある身じやないと「(千両のぼり)うつして見
たきかゞみ立うつせばうつるかほかほ」あわす眼もともつ
なみだ」(二十二オ)

どふでおまへにまかしたからじゃ「(一ノ谷)早く御身が手にかけて人のうたがひ晴されよとにしに向ひて手を合せ」すきにさゝんせこのからだ「(二十二ウ)

あつひなさけをフト身にうけて「(八陣)あなたの事がくになりてほんにねたまをわすれかね」しをれがちなるなつのくさ「(二十三オ)

いろはしあんの外みちかけて「(いもせ山)おん又も恋はかへられず恋にもおんはすてられぬニツのみちにからまれし」まよひましたよぬしのかほ「(二十三ウ)

手なべさげるはせうちのうへと「(イモセ山)たかいもひくも姫ごぜの夫といふはたつた一人りけがらしい玉のこし」なぞとぬかしてちく性め「(二十四オ)

ほんにつとめの身はまゝならぬ「(かみ治)南の元の親かたとこゝとにまだ五年ある年の内人手に取れては」つらぬ意気路になきわかれ「(二十四ウ)

おまへゆへからこの身のなりを「(質店)夕部の風呂の上りばでこの腹おびをかゝさんが見つけさんしてコリやお染この腹おびはなに事ぞ」なさけなひとはどうよくな「(二十五オ)

ほんにうれしくそふたる中も「(一の谷)年月待た夫ふのさかづきかはす間もなくふり捨てのこれとはどふよくな」ぬしのう

はきにくろうつする「(二十五ウ)

命までともかはせしなかを「(平治)きこへぬ仰やうらめしやと主すじはなれ水仕から嫁に成たる嫁かたぎ」それに悪性なこ
と計り「(二十六オ)

とげてそはれぬ二人りが中に「(二度目)その覚悟とは初? がてんして居ながらもあんまりほるないうきわかれ」おもふやくやしむことばかり「(二十六ウ)

いふてあいそをつかされまいと「(帯や)あんじすごして何にもいわず六角堂へお百度もどうぞ夫にあかれぬやう」おもふな
かにもはらがたつ「(二十七オ)

しのびかねてはツイうつかりと「(がつぼう)おもひあまつて打つけにいふてもおや子の道を立」傍の人目のはづかしさ「(二十七ウ)

ほれた男のすがたとおもや「(廿四孝)いかにお顔が似ればとや恋と思ふかつより様そも見まがふてあられやか世にも人にも
忍ぶなる御身のうへと云ながら」仇におもひがますわいな「(二十八オ)

逢ふてはなせばほどよぬくちで「(お七)事をわけてのお詞をさら／＼むりとは思はねど飯の契りも二世迄と云かはしたる恋
中を」またもうま／＼のせかける「(二十八ウ)

人にうき名をツイ立られて（八百や）よい女夫（めうと）じやとなぶられてかほのみぢは色つやもツイ祝げんの新まくら」いとゞおもひがますわいな」（二十九才）

わけをきくほどなをわすられず（彦山）はたちの上を越しながらまゆをそのまゝいかな事かねもふくまぬはづかしさ」いふにいわれぬ身のつらさ」（二十九ウ）

ふたつこゝろのあるぬしゆへに（円がく寺）心一ツにとつおいついふてはうらみうらみでは一人明する夜明の鳥かはる／＼と鳥さへも」とかくうらみがあるわいな」（三十才）

愚知なおなごとしりつゝほんに（三かつ）在所うまれのこのわしと人なれさんした三勝どのたとへていはゞ深やま木とみやこの花」うはきさんすがにくらしい」（三十ウ）

あきもあかれもせぬその中を（雪姫）アノ大ぜんのおによ蛇よ人にむくゐが有物かないものか喰ついてもこのうらみはらさいでおこふかと」人にせかれてこのくろう」（三十一才）

たとへいかなるくろうはせうと（新町）下宮嶋へも身をしたり大坂の浜にたつてもこなさん一人はやしのかふて男にうき目はかけまいもの」ぬしに不自由はさせせん」（三十一ウ）

おぼこゝろにいとしとおもひ（山姥）そも水上の初日よりふとあひそめて丸三年何がたがひの浮気ざかりのぼるほどに」

はづかしいほどわすられぬ」（三十二才）

せうちしながらみれんがのこり（鳴戸）今更おどろくきはなけれど一合とつても侍の家にうまれた十郎兵へどの」こつちも氣づよくさゝんすか」（三十二ウ）

今はわかれてこふなるからは（羽生村）其顔もせず朝夕かはひがつて下さんしたおなさけ過て情なやなげうち明て有やうにいふて聞せて下さんせぬ」？わぬはじめがこいしなる」（三十才）

いやなおとこにツイおもわれて（百八）わけて恋しいそなたの事見てはこたへられぬそのうつくしい心の下紐とゐてもらはにやおちつかぬ」いとゞにくいはぬしのこと」（三十三ウ）

十三、ゑらみどゝいつ（幕末刊か。石川堂板等編）

東西ノ、高うはムリ升れど口上ヲもつて申上奉り升此度相もよふし候どゝいつおだい福寿草初夢ゑてうのほか五だい三だいい、即評のヲ、はん者ア、本町一丁目工窓月庵芋介ア、三芳のヲ、群鶴楼ヲ、中村芝翫催主ウ、くさのや草枝イ若々亭花山右の

外連中に相かはり諸君子御ひろう奉り升間御求の程ねがひ上奉り升子ヨンノヽノヽノヽノヽノヽノヽノヽノヽノヽ

当初春新板 石川堂板等「(一オ)

のべのわかぐさままたそよ／＼とてうもこゝろをうかさるゝ(川ごへ草枝)

ぬしに見せたいこのはつゆめとまくらかはしてひとりごと(仙波連浮立坊)

あわざくろふもなんにもせまいあふたそのひがうらめしい(石川どぶ「(一ウ)

ふじよりもたかいおもいをなすのがわたしうれしやはつゆめぬしのこと(入り連竹友)

とふじはやりのこぼんのいろけもつたわたしがふくじゆそ(青梅丁竹女)

きれてはなれてとふざはいれどみれんでさくのがふぢのはな(しんよしはらさくら川しんと「(二オ)

ひともくさ木もうちよりそだちたまのうでなにくじゆそ(赤尾れんかつら)

こいのふかみのながれのみづにあそぶこてふのあだまはり(入り連林鳥)

ねんきいれ／＼あげばのてふのわたしをおもへばあきのやま

(青梅丁ことぶき「(二ウ)

ひとにやせたといはるゝつらきくるふもおまゑをたのしみに

(本所?二はこ常)

つらいかなしいやまさかこへてしあげたせたいがすてらりよ(為永春水)

すまぬかほいろ見てとるじつはたにんにしれないほれたなか(為永春鶴女「(三オ)

かぜになびいてゆくてう／＼もおもふかたへはとびやすい(石井連左友)

おふめぐさとはよいつぢうらよ(汐くみ)おふたそのときやついころびねのおびもとかいでそれなりにふたりがすそへかり

だぬをかけてぞたのむ「たとへあわずにいればとて(石川洗光)ろくといふじはあるじにあづけこがねはなさくふくじゆそ(石川堂「(三ウ)

こちのひとだとおもふていてもいまだせけんはないふうふ(新吉原ふしみ丁桑石や内初女)

くせもくせとておまへのくせがみんなわたしのゆめにまで(石川れん?内理せ女)

にやうばもつならもつのもよいがわたしも見すてゝくだんすな

(かつ女「(四オ)

かほにさくらのちるほどうれしされどいわれぬはつのゆめ（八幡山文字喜の）

いゝだしにくひもさてほどがあるこふなりやうちはでありながら（？石？冰山）

たとへせけんてわらわばわらへたてたみさをはわしがむね（片門前にばん組内さか女）（四ウ）

むつまじくあそぶこてふをあれふきわかるなさけしらずのはるのかぜ（片柳愛好）

はつのごげんをわすれねば見ぞめのゆめ見の見のこゝちよさ（ちゝぶおふみや登沢兼七）

きみをまつよはひとよがちとせあへばせんりもちかいちり（仲の丁都武中）（六オ）

はらたちながらにそのあてこすりこそでにこしのあついほど（足利常わ津みさこ）

じやうをおろしたおまへのこゝろあいかさするやつはにくらし（亀ざわ丁彫小いわ）

しのぶこひじにゆきひらさんのくるかゝとまつのかぜ（さの常はづいな吉）（六ウ）

はつゆめのおもはしどこへたまづさつかいひらきやちるかとくるふする（入り連??）

しのぶこいじはありやむろのうめひとにしられづさいている（？由）

ふたりしあんにこりやあまれどもよそをたのめばあらわれる（中ばしときはづもじたせ）（七オ）

とふざかるよとこたへていたにどふしておまへはぐちばかり（本所松井丁??）

はつゆめにはるののにでゝわかなをすてゝきみがためにはそでしぼる（入り連多かな）

おやゑおくるとうそかきこめしまことはおまいにやりしふみ（人はしきく女）（七ウ）

ふみのたよりをみたはつゆめのさめてくやしきまくらがみ（？左坊）

さつとわつたるこゝろのたけをまるくまるめるおげやさん（石川れん）

けふのたまづさはだみにつけてあふてねたきのはつのゆめ（名？連しらず）（八オ）

むかしやちやみぢんいまあいみぢんわたしやおまいにこなみじん（ゆしま天じん清元？生）

こいにぜうげはないとはいへどみすたまだれこそひんのよさ（??）

にはのわかくさとこなつかしくてふもおり／＼きてあそぶ
(???)(八ウ)

わたしやあさがほそのせうこにはかゞみついてははなれやせぬ
(彫竹れん十売?)

さつしましたよさぞおまちかねしゆびしてくるみもさつさんせ
(よし丁ちか女)

こいのやみじはかね／＼せうちしのびあふみのうさつらさ(吉
原岡本龍太夫)(三才)

はなにもゝたびくるきやくよりもゆきのしよかいがたのもしい
(長連?かく)

せじもいふまいきがねもせまいおまへもうはきをやめさんせ
(坂東かつじ)

しのびあふのはかねてのかくごひとのくちはがこわいゆゑ(松
夢)(三ウ)

はつゆめにまくらならべてしづかなみにのつてこぎだすたか
らぶね(しら玉)

うそでかためたつとめのうちにまことあかしたいのちがけ(小
林亭かね女)

とんできながらくるのはなをよそにみなしてゆくこてふ(し
ら玉)(四才)

あだなすみれのはななつかしくひとよねてゆくのゝこてふ(は
ら山うらを)

てふづつかふてひをうつつうちにひらきだしたよふくじゆ草(仙
ば連頭九坊)

はちをじぎいかゝさんたるうむまであづまくだりのふくじゆそ
う(ことぶき)(四ウ)

はちにしかけもみなさきそろへたれにうるみのふくじゆそふ
(青梅れん一郷)

むろのねんきもはやあけのはるはれてはなさくふくじゆそふ
(藤倉れん籠子)(五才)

いきなぎしきにとこのまつけててふどゑほふにふくじゆそふ
(所沢れん梅巢)

そふと見たのがまさゆめならばじつにふたりがたからぶね(片
柳愛好)

よつてわかれてまたよるこてうどこでこゝろがきまるやら(赤
尾連さだ女)(五ウ)

てう／＼やわかきおんなのはなかんざしにあとやさきへとたわ
むれる(さし?いわ女)

たとへはものできられよがまゝよたてたいきじのこいのじやう
(足利れん二丁メ柳白)

てうもはな見のみちづれなるかうかれひやうしのあとやさき

(小林亭梅茶)「(六才)

こふりがねさへけさうちとけてはるのはつかぜふくじゆそふ

(石井ふみ女)

あいきやうくらへのあのふくじゆそふうへにおかめの大小いた

(好松)

はつゆめはぬしにこがるゝわたしのふねよくぜつはなしもみな

めざめ(赤尾れん)「(六ウ)

ねたるうちさへわすらりよものかはるのはじめのゆめにさへ

(下新井れん好松)

わたしやひしやなりおまへはかくよよこにりみちをゆきたがる

(石川堂板等)「(一才)

かりねまくらにはつゆめむすびせめてこのよをにやさんや(ま

とばれん喜?)

ぎりとなさけについつまされてきれるといふのもくちばかり

(川ごへかぶん)

はつゆめを見たかノといはんすけれどわたしやうつノひじ

まくら(所沢菊遊亭)「(一ウ)

きみにこよいのはつゆめなればのせて見たさのたからぶね(水

のれんりてふ)

よそのうはさにうかノはなしするうちやわするゝむねのうち

(本所板安)

かみもごぞんじないみちまでもむすびそめにしはつのゆめ(小

林亭)「(二才)

つきのひかりにくもりがなけりやこいにじやまする人もない

(武おし庄大丁つねやせん女)

こぞのうちからこへかけすぎてけさははらみのふくじゆそふ

(飯のふ丁?好)

ときもときとてふゆのゝかぜよこいじのいけんもときによる

(松さき暉風)「(二ウ)

つらいつとめはあのこめだわらくにからうられてゑどずまい

(??町??)

ひらきかゝりしあのふくじゆそふいろかあいらしいのさと

(入り連林鳥)「(三才)

はつゆめやきみのまくらにあのたからぶねぐつとひきよせかほ

とかほ(寺山連花山)

おのゝこまちにのぼりしおかたそれはせうノたらぬゆゑ(板

ばし盛川百女)

こいのあいづについのせられてねんがあければふくじゆそつ

(入り連田川)「(三ウ)

にはのはつはなくなると見てやてふもひことにゆきかよい（飯能れん物好）

はやくのみたやみづさかづきでてふのかけさすあのさけを（豊田れん小静）

たとへしあんにあまればとてもどふしてたにんにあかされう
（よし町秀？）（四才）

おつないきじについのりがきていまじやたにんとおもわれぬ
（浜口れん久女）

ちるはなをさだめなきよとうたにはよめどさかねばなるまいや
よいづき（吉原狂文章春江）

たとへあわづにくらそがまよこのこはいはいのたねじやもの
（板とふ）（四ウ）

たゝぬがちなるわたしじやものをおまへのこゝろもしれにくい
（吉田れん暉文？）

そばにありてもきまゝにならぬひとのおとことみづのつき（石
はらはま）

どふぞひとたびおふたるうへはそのまゝしんでもうらまれぬ
（梅川れん登奈美）（五才）

しかいなみしづかなるよをみふうふそろへうたふてねまつのは
つのゆめ（梅川れん？）

つきに見たればぎんいろなれどひにはこがねのふくじゆそう
（下中泉井）

はつまがきおふてうれしくとびたつむねをたがいに氣がほのふ
くじゆそう（小石川文字？）（五ウ）

かいたきせうはことはづれたらしんでみらいでそふかくご（松
夢）

はつゆめに見めぐりおふたそのうれしさよおんなではなしもす
みだがは（大しまかふ）

あてにせぬぞへおまいのこゝろちりやすいぞへけしのはな（石
川堂板等）（六才）

ゆふべのはつゆめわしやきにかゝるこよい見なをすゆめをまつ
（入り連林鳥）

ことわりじやうならなぜこのよふにめでたくかしくがにくらし
い（糸の長れんいや女）

しよてはかくしてつゆしらぬかほほにでたおばなはなんとせう
（常津津文字小寿）（六ウ）

はつゆめを見るまにふつともしをけしてかよふこいじのよめ
かぎみ（青梅れんたけ女）

あだとなさけのそのはりませはこいのこてふのそでびやうぶ
（石井？林？）

ふくじゆそふ見るにつけてもあるかげぼしやおやこそろふては
なの春(???)(七才)

むろでそだちしわしやふくじゆそうおまへのそばとはゆめしら
ず(入り連義徳)

ぬしとつれそいよいこをもふけてうよはなよとそだてたい(下
新井宝?)

はつゆめやさめていさまししらべのこいははるのかよへるおき
ごゝろ(足立さし扇れん東?)(七ウ)

ふくじゆそうめぐむやいなやなもたかさこのぢゝとばゝとのか
たすがた(???)(林八)

まゝにならぬがこにはのはなよしのぶこてうのまゝならぬ(所
沢宿車遊)

はつゆめにおまへ見めぐりきもすみだがはこゝろのたけやをわ
たしたい(さ?め)(八才)

おもいおもわれそいとげたるがおもへばにくらしあけがらす
(??陵)

てうがみちびきはるのにいでゝわかなつむのもきみがため

石川堂板等校

登奈美梅寿画(八ウ)

十四、新作こゝろいき文句四十八文字大一座しりとり都々々
一(幕末刊か。両国屋百板。)

新作こゝろいき文句四十八文字大一座しりとり都々々 上

両国屋百板(一才)

いへばくぜつのたねとはなれどよそに花あるふたごゝろ

ろくにはいふまいせけんの人が二度のつとめのこのしらは

はかないすがたとわしやなりふりもみんなたれゆへぬしゆへに

にくいしうちとうらみつないつなみだかくしてまたしんぼ

ほぐにはなるまいあのことのははすへのすへまでじやうくら

べ(一ウ)

へんなゆめ見てふとめをさましおもいすごしもぬしのこと

とふざかりやこふもじやけんとわしやなくばかりおんなごゝろ

でせまいぐち

ちかいたてたよおもわぬ人にかいたきせうもときのぎり

りかいらづめでこいじがなるかこうなりやいきじできればせぬ

ぬかにくぎうつおへやのいけんむだなことだよそいとげる(二

才)

るらうさせたまみなわたしゆへたてづはなるまいぬしのかを

をつなはづみからついのりがきていまじやかへらぬあすかがわ

伊呂波四十八文字しり取心いき都々一 下

わけはこふだところのそこをゆふてきかせちやわるいのか

かみにねがいもほかではないがはれてあいたいたゞひとよ」(二

ウ)

よもすがらねやのひまさへつれなき人とおもいだしたるうたが
るた

たまにきづとはおまへのことよすこしはしんぼうしておくれ

れんがはいかいうたよむひとまよふちやとけまいこいのなぞ

そえるゑんならいくちよかけてともにじせつのすへをまつ

つまづく小さいにあと見かへりてにくいながらもなでるむね」

(三オ)

ねづみなきしてついだまされてぬしのてくだにかゝるわな

ながめ見あかぬつきよもやみとよわりやすいはあきのそら

らくなむかしにさてひきかへていまはかへなきみをくやむ

むすぶいづもでむすばぬゑんはあふたしよてからこのくろう

うきなたゞずのまもりがあらばかけてうわきがしてみたぬ」(三

ウ)

新作伊呂波四十八文字大一座しり取都々一 上之巻

こゝろいきもん句

両国屋百板」(四オ)

あやなかぜにもなびくはやなぎして見りやくがいはつらいもの

のきばづたへのつばめでさへもめうとぐらしてゐるものお

およばぬことじやとわしやしりながらそふて見たいはこいのよ

く

くみわけて見ればしうとが何にくかるういとしいをまいをうみ
のおや

やくじやなけれどたらわぬわしをむまくだましたくちぐるま」

(四ウ)

まゝにならねどこふなるからはあさいこゝろのおよぶたけ

けさのわかれがわしやきにかゝるつがいはなれぬこのびやうぶ

ふかくなるほど人めのせきをこへてゆきたやぬしのこと

こゝろうちとけやう／＼ねたらもはやあけがたとりのこえ

えんのあさせとわしや白波のおともきゝたいふみのつて」(五

オ)

てなべさげてもそうきでゐるにいまのくがいがなんのまあ

あはぬむかしにくらべてみればたよりをまつよのじれつたさ

いろは四十八文字しりとり心いきどゞーツ 下

さへたつきよにじやまするくもがあるかこよひのむなさわぎ

きれてみれんで又おもいだし人にいわれぬそでのつゆ」(五ウ)

ゆきつもとどりつしあんにあまりねぐらさだめぬむらすゞめ

めいかこうさへかほみめぐりとむりなねがいのかみだのみ

みづにうつりしそのつきかげにとゞかぬこひじにみをやつし

しのびあふよはふさいだかほゝみせてうきななたゝぬちゑ

ゑんもゆかりもないしよへせじをゆうてつくろうけうのしゆ

び」(六オ)

ひんすりやどんすのやくとはいへどぬしにはしかけもかんざし

も

もつれかゝりし此くろかみをとけてやうきにならしやんせ

せけんはれてのわたしが人といふをたよりに日をくらす

すへにむすばるゑにしにあやかとけでうれしいいきのふ京

京はめでたいさて四かいなみはれてふうふのわびずまい」(六

ウ)

大新板よしこのさわり入

貞信画」(表紙)

(画)

小信筆」(見返し)

(画)

貞信」(序オ)

佐和利都々の義も暫く中絶に及びしが此度書肆が見出しに預

り嗚呼がま敷も蛇にさへ応ぜぬ盲目の籬のぞき春の夕の徒然に

蜷の海もはしやぎて筆の命毛縮む程傾く首は明がたの月のかつ

らにあらねども其おり／＼の淋しさの閨の伽にもなりつらんと

云も作者の得手勝手なぞと軍光うやまつてもうす」(序ウ)

ながい其夜もみぢかに明し」(忠臣ぐら三だんめ) ひがしがし

らむよこ雲にねぐらはなれてとぶらかす」けさは鳥さへうらめ

しい」(一オ)

ぬしのことばを何そむきましょ」(かゞみ山) 憚りながらよい

ようにおさしづたのみ上升とやなぎながしのしなやかに」しら

す目もとのあいらしさ」(一ウ)

ぬしのまことを聞度々に」(かゞみ山長つばね) 成人の此わし

をいとしがつてござる其中へかゝる嘆きを聞いたら何と身も世

も有ふかと」あとはことばも泣ばかり」(二オ)

十五、大新板よしこのさわり入(明治初期刊。軍光序。本

屋安兵衛板。)

いふてかへらぬくり言ながら「(忠臣ぐら四だんめ)さてもノ
ものゝふの身の上ほどはかないものが有べきかいまつまの御
さいごに」いわぬつらさはなをまさる「(二ウ)

かどにきよりとぬしまつよさは「(忠しんぐら五だんめ)向
ふよりくる小灯燈是もむかしは弓張のともし火けさじぬらさじ
と」いだきついたるかをとかを「(三オ)

いまさらかへらぬ事とはしれと「(志渡守)てゝ御がこの世に
ござるなら馬のけいこよがくもんよと座敷の内もをてぐるまむ
ばも衣裳を着かざつて一寸出るにもかち若党びゞしいげうれつ
有べきに」ほんにわたしはひとりぼし「(三ウ)

かくしとふてももうかくされぬ「(質店)此はらおびは何事ぞ
とふから様子しつたゆへたびノのこはいけんてゝ御のみゝへ
入まいと」むりにしりつゝかみだのみ「(四オ)

ひろい世かいに生れた身でも「(忠臣蔵六段目)さてもノ世
の中におれがよふないんぐわな者がまたとふたり有べきか」せ
まるおもひのむねのうち「(四ウ)

くちとこゝろはみなうらはらよ「(太功記十段目)かなしさか
くすわらひがを随分おてがら高名してせめて今宵はがいぢんを
と」たゝみたゝいてくどきごと「(五オ)

ひろいせかいに一人をまもり「(同十段目ノおく)二世をむす

ぶのまくらさへかはす間もなく此よふな悲しい別れをする事
が「神もごぞんじないかいな」(五ウ)

あだや浮気でほれらりよものか「(朝顔日記宿やの段)恋ゆへ
こゝろつくし琴誰かは憂をとひ吟の糸より細きゆびさきにさす
つめさへも八はしの」ならすしらべもぬしのうた「(六オ)

しんていづくならまだこのうへに「(同大井川の段)ひれふる
山のかなしみも身にくらべては数ならず三千世界をたづねて
も」わしにうへこすものはない「(六ウ)

ぬしのうはさがよみぢのさわり「(矢口の渡し)しぬる此身は
いとほねどあとに残つたおまへの身のうへあんじ過しがしられ
ると」まことあかしたつまをもひ「(七オ)

どんないけんも徒には聞ぬ「(をびや)おやの慈悲心身にこた
へさしうつむいたる夫のそばいわんとすれどむねふさがり」わ
しも其氣でいるわいな「(七ウ)

わたしやりんきで夜の目も合ず「(かさね土ばし)引まはしノ
ゝひきまはされてうたかたひめ」われとわがでにぢごくゆき「
(八オ)

どふでいろノうはさもたとう「(七条川原)人が云ならいひ
けしてお前の子じやと云ておいて下されや夫でばつかりをたの
みます」おがむわいなとしやくりなき「(八ウ)

ぬしの戻りをまつかひもなう「(梅よし) 入相のかね諸とも命取るゝ長吉が夏の虫かや燈火の」かげもかたちもわかりやせん」

(九才)

おやのこゝろは子はおもはずに「(安達さいもん) ちく生の様なはらから見事いぬねこも産おらずむまれおちるとこじきさす子は」なんで利口なものじゃやら「(九ウ)

かたとき逢ねば気もさんらんと「(安達) 立上つてはいこま様のいふ／＼わしや今きられてしぬわいのふ」是ほど恋しう成ものか「(十才)

世にはよぶにたたとへもあるに「(五ツかり金) 人にやほれねどなにほれておなじ名をきくたび／＼に」目にはなみだのたまくしげ「(十ウ)

もつたいたいとはわしやしりつゝも「(野崎) くはんおんさまをかこつけに合にきたやら南やら」すげなふいうのもほどがある「(十一才)

りんきする気はわしやないけれど「若い女中のねいり端殊にまくらも二ツあり定めて夜伽の人ならん」見れば云ずにおかりやうか「(十一ウ)

どふかかふかとあんじていたに「(ろう内) 段」よふいきてくださつてちゝをはいするありがたさよどこへもおしまぬうれし

なき」はなれらりやうかどこまでも「(十二才)

やつれはてゝも根は侍よ「(信仰記) よしてゐる様の御公達たとへ敵のとりこと成刃の下になをる共みれんなさいごあそばすなへ」わるふおもふていわりようか「(十二ウ)

こゝにいれどもいへず「(安達さいもん) 此かき一重がくろがねの門より高ふ心から泣こへさへもはゞかりて」我と世けんをせもふする「(十三才)

いかに私がつとめの身でも「(あこや) まだそれでもうたがひはれずばハテいつまでもせめられうわいなア」みんなおまへのためなら「(十三ウ)

わたしや一匁におまへがだいじ「(千両のぼり) いのる神さま仏さま妙見さまへ精進ももどらしやんして顔みるまで」茶だち塩だち朝まいり「(十四才)

とかく私しが気にいらぬやら「(忠臣講釈七ツ目) さほどつれないおまへでも此子がおやじやと思へばこそまいばんねづのはごにも」思ひわするゝひまはない「(十四ウ)

すねたおつとのそばはなれずに「(大功記杉の森) わがつまのふとおしうごかし尽ぬなごりの百千劫こへをかぎりに泣さけぶ」しよせんかなわぬ身のねがひ「(十五才)

ぐちな奴じやと笑はんしても「(忠臣講釈八ツ目) かを見てな

んところされうあんじたほうさうもしたものをいかにおつとのためじゃとて「うきめ見よとはおもやせん」(十五ウ)

ぬしのじついがわたしの身には「あこぎのうら」(ぎばへんじやくのはいざいで呑より尊いこの良薬いか成おもき病でもほんぶくせいでなんとしやう)「うれしござんすしみノ」と「十六オ」

なんの私に気がねがいろう「(蝶八)アノ姉さんのもつたいないかう成行もさきの世の定まり事とあきらめても」ぐちにからまるなさけなさ「(十六ウ)

大坂日本橋南詰

問屋本屋安兵衛「(裏見返し)

十六、辻うら都々いつ(明治初期刊か。やかな坊作。)

辻うら都々いつ「(表紙)

やかな坊さく

白山人系がく「(見返し)

けんいてん

とふぎの事ならよしてもおくれ口とこゝろはうらおもてねがひごと叶うくがたし まち人おそし しんノすべし「(二オ)

てんふうよう

すへをとげないえんならよしな苦らうするだけむだなことねがひごとあらそひあり うせもの出がたし「(二ウ)

てんさくか

らくなくらしののぞみはないがくがい放れてともかせぎねがひごときうにはゆかず 待人きたる也「(三オ)

てんらいむほう

名ごりおしさにあとをばながめ月にすゞみてひとりごと

煩ひごと人をたのみてよし まち人すこしおそし うせ物いつ

る「(三ウ)

てんすぬしやう

やきもちらしいが云はねばならぬ主しの身持をなをさんせもめ合てのちにとゝのう「(四オ)

てんくわどうじん

みれんらしいがきれたいほんのとふぎのがれのくちふさぎねがひごとかなふ うせ物いつる まち人きつとくる也「(四ウ)

ウ)

てんさんどん

人のあけんもなにきくものかそはれづはあまともなるかくご

ねがひごとかなひがたし まち人おそし」(五才)

てんちひ

心がら野ずへの小屋でふゆも苦にせぬ水仕わざ

ねがひごと目上のさはりありうせもの出がたし」(五ウ)

たくちすゐ

七重八重さかりきれいなやまぶきなれどすへは実のないこひわ

いや

ねがひごと叶ひがたし まち人おそくきる 病ひはほんぶく」

(六才)

たくさんかん

雪の中にも梅さへひらくいつか時せつが来るわいな

ねがひのぞみとも大吉叶ふ うせものすぐさまいづる」(六ウ)

だいたく

とふざのいろならよしてもおくれすへのすゑまでとげる気だ

おもひごと叶はず まち人はたよりのみ うせもの出がたし」

(七才)

たくすゐこん

おもひおもはれいたなかさへもつしいした事からあきがくる

ねがひごとらちあかず まち人おそくくる也」(七ウ)

かみくわ

おもひさだめてきればみかけどとかくなみだがさきにたつ

ねがひかなはず あらそいごとまけ 病はほんぶく」(八才)

くわさんりよ

はなにまとへるてふノ、さへも女夫(めうと)はなれぬなかの

よさ

ねがひごと心さだまらず うせもの知れず まち人きたる」(八

ウ)

十七、サハリよしこの 三編(明治七年刊か。本屋為助板。)

サハリよしこの 三編」(表紙)

(絵)」(見返し)

(絵)

浄瑠璃大会連中部家賑之図

貞信筆」(序才)

方今(このごろ)文明の時におもむき。機械で弁理を發明し。

自由自在を新規の開化（あらたにひらけ）。されど替らぬ人心（ひとのき）を。わづかな文字に書こめし。よしこのぶしの其中へサハリ文句の実情を。さがしくわへたるざれ歌も。誠ごゝろをもて見そなわさず。むかしも今もかわりなき。機械（どうぐ）でいかぬ人情の。これやこよなき世事世態（ありさま）。実意に開ける原書とやいわん

なんぞとよし此の功能

松？堂のあるじ伏て述る

戌の初春（序ウ）

今宵わかれて遠ざかるのか（鳴戸）今一度顔をと引寄せて見れば見るほどむねせまりはなれがたなき憂おもひ（けつくやさしい気やすめを）（一オ）

逢ふたはじめにほれたが因果（岸姫松）甲斐なき恋路と思へども忘れがたなくなつかく此順礼を幸に鎌倉を見せていのといふたももしや恋人にめぐり逢んを力ぐさ道の間も其人に添心ぞと閑しみに（むりもきかしやれ神ほとけ）（一ウ）

ぬしのきづなにわしやからまれて（毛谷村）園はとりはけ悲しさをやるせなみだのくとき言ほんに浮世と言ながら身にうきことのかくばかり（うらむ此身も心から）（二オ）

とめるわたしをおもしろがつて（橋弁慶）所は名におふ加茂

川のながれに立川なみどう／＼／＼どうどよすればしら鷺のあしべにあさる片足立すがたはつくばね羽子板のひやうしは碓の音むそう返し（去ぬとふりさき気がもめる）（二ウ）

ぬしにわかれて起せうをうらみ（一の谷）此世のゑんこそうすくとも来世ではすへながふ添とげてたべ我つま顔にあて身にそへて（どふでわたしもこがれ死に）（三オ）

苦ろうするのわがこゝろから（新吉原）斯したことゝはつゆしらず此妹はまめなか知ぬとゝ様かゝ様お煩ひでも有ふならよもやしらしてたもらふ物便のないを杖はしら首尾よふ年をつとめたら（とは云へわけはいわりやせぬ）（三ウ）

義理でせけんをわかるゝつらさ（恋女房）おちの人よお局よと玉のこしに乗たとてこれがなゝなることゝとげてあふのは今しばし（四オ）

たわれことばが実意となつて（伊勢物がたり）祝言仕たは去年なれど陸奥から此里へ来ると馴染の友遊びお前は十三わしや十ヲあとない時の女夫ことおかしと人のわる口が世間に広ふ張箱や（添ふてうれしききのふけふ）（四ウ）

しのび／＼が身のあだとなり（明がらす）ソリヤあんまりじや情ない今宵わかれてわしが身や可愛みどりは何と成ふと思はんす（人も我身もうらむとは）（五ウ）

わたしゆへにや寐顔のやつれ「(上うんや) さぞやゆめにもう
つゝにもむかしの国の御でんとも思ふて御寐なるお心が一ばい
いとしうござるはとひぎにひきよせいだきしめ人目もしらずな
げきしが」苦勞するぬし見てなみだ「(五ウ)

ぬしのなんぎもみな金子ゆへと「(かゞみ山? 局) 思ひ詰た
るうきなみだ包むにあまる風呂敷中ゆひしめて玉の緒も今を限
りそら話には封もしどろにかきくれて」みつぐわたしがはだう
そを「(六オ)

貞女たてればたてるで人が「(中将姫) あらいたはしの中将姫
七日七夜は泣明しあくる八日の朝の雪我を責苦の種と成り身も
ひへかへる其上にすあしに雪の氷道つるぎを踏がごとくにて」
いらぬ口ぜつをいゝたつる「(六ウ)

ぬしはつとめの身としりながら「(千代萩) 死るを忠義といふ
ことはいつの世からのならはしぞとこりかたまりし鉄石心さす
が女の? にかへり」顔のやつれを見るくろう「(七オ)

もとはわたしがわるいとしれど「(?) ふしぎの縁でこれ迄は
おつとよつまよと主従の道をわすれていもせのかたらひおもへ
ば盧生がゆめのたのしみさめてくやしき身の上とおとこなきに
ぞ」とかくたよりとぬしにむり「(七ウ)

内をおもへばさきへはたゝず「(紙治) 泣しやんせ／＼そのな

みだが蜷川へながれたら小春がくんで呑みやらふぞあんまりむ
ごい治兵衛さん」胸の思案もとつをいつ「(八オ)

もとはかなしうつられた此身「(壬生村) いやといふたらと
様の為にならぬが悲しさに売れて行はゆくけれどかならず案じ
ておくれなへと云つゝ袖のひたぬるゝなみだ流れのさとはたゞ
地獄の様に思ひ取」好けばうれしい事がある「(八ウ)

子までなしたるふたりがゑんも「(荻萱) いたはしや石堂丸か
ゝる難所をたど／＼とこゝろも空にうき草の根ざしの父は顔し
らず」のちは別れと思やせぬ「(九オ)

ほれて居るのを余処ごたらしう「(廿四孝) いふ顔つれ／＼打
守り云号ばかりにて枕かはさぬいもせ中お包有は無理ならねど
同じ羽色の鳥つばさ人目にそれとわからねど」すげなふさんす
もほどがある「(九ウ)

人にせかれてわがとちはなれ「(新口村) いたわる身さへ雪風
にこゝへる手先ふところにあたゝめられつあたゝめつ石原道を
あし曳の」ぬしもわたしも命がけ「(十オ)

死で花実をちらそふよりは「(三代記) 思ひ切たる最期のお覚
悟わたしもおまへにつれそふからは何の未練にとめやせぬ／＼
なぜあからさまに打あけて此世の縁はこれしかぎり未来で夫婦
になつてやつと」くろうしますよ日かげでも「(十ウ)

いなしとむなき此さむぞらに「(宗五郎)天も哀み給ひてや又
ふりしきる白雪に見へつかくれつちらソラスと婿はなれしおや
どりの」氣づよういなすも首尾ゆへに「(十一才)

好くもほれるもむかしとなりて「(楼門)絵にとゞめしは古へ
の顔もつや有みどりの鬢鏡は今の老やつれ頭の雪とかはれ共か
はらで残る面かげのめもと口もと其俣に我影にもさも似たり爺
がくかたゆづりの額のほくろ」今はたがひの友しらが「(十一
ウ)

人にいわれぬ此岩田帯「(忠臣ぐら九)鳥類でさへ子を思ふに
とがもない子を手にかけるは因果といんぐはの寄合とおもへば
足も立かねて」ふかひ縁にしがあだとなる「(十二才)

人もすいりようして下さんせ「(菅原四)しやくりあげたる御
なみだめいどのたびへ寺入の師匠はみだ仏しやかむに仏六道の
うけの弟子に成さいのかわらで砂手本いろは書子はあへなくも
ちりぬる命」とげて心のやすむまも「(十二ウ)

ぬしの悪性が胸一ぱいに「(かゞみ山)女ごころの一とすじに
又おもひ出す口をし泪はやなくにくれのかねあすは我身もきへ
てゆく」心ほ？ひか苦のやまい「(十三才)

わたしやこゝろをこれ此よふに「(岡ざき)風にあてじと寐ま
きのじゆばんあかの他人は慈悲ふかくひよくとかはす女房をむ

ごふ引出し戸を引立おく口見廻しさし足し勝手は見直釜の前」
もやすつくしのはてまでも「(十三ウ)

しばしきれるも世間をおもひ「(太功記)お諫め申たその時に
思ひとまつて給はらばかうした？きはあるまいにしらぬことゝ
は云ながら」人のしやくりがじやまゆへに「(十四才)

おやのゆるさぬ男にそへば「(いもせ山三)あだ口々も雛鳥の
胸にあたりの人目せくつらひ恋路の其中に親と親とはむかしよ
り御中不和の関と成りあふ事さへもかた糸のむすばれとけぬわ
が思ひ」やぶれかぶれの末しぢう「(十四ウ)

つとめざかりにくるはをぬけて「(八重桐)俱にはなれし妹背
のなかあはれむかしはせんせぬの松のくらひも冬がれし風る敷
包ゆくさきは」今のくろうもぬしゆへに「(十五才)

ようきうはきにこたつもちらす「(志渡守)長者のさゝげし万
燈よりわづか貧女の一燈が百倍増したるみらいの手向草葉のか
げの兄様がさぞ悦んでござんせふ嬉しうござる忝い愛から拜ん
で居るぞやと」ぬしとふたりのわびずまい「(十五ウ)

あけてきかさぬおまへの氣しつ「(大文字や)目には一ぱいな
みだを持たしがかんしてつくさけをおうけなされた杯もふる
ふてこぼれる酒よりも」そらして下され真実を「(十六才)

おもひ合ふたる中引わけて「(信かう記)心ほそくもたゞ一人

りむざんなるかな雪姫は何を科とてからまれしつまも最はやさい期かと思へばそよと吹風もあはやそれぞと見上れば花の散さへ恨なる」人の？見を遠ざかる」(十六ウ)

絵草紙仕入所

大阪心齋橋通八幡筋北へ入

本屋為助板」(裏見返し)

十八、開化どゞー 三

開化どゞー 三」(表紙)

勤めする身でまことをあかし添はざ止まい此くらう

やくやもしほもたのみにならぬからすに雑子ねをおこされる」

(三十一オ)

月を友とてなくむしの音は萩のしたつゆぬれたどし

あかぬわかれのなきがほのぞき化粧せよとはむごひ親」(三十

一ウ)

ふさぎやどこ迄ほうづがないと思案する程りに落

おまへのいふことわしやまに受て末のくゝりを胸の中」(三十

二オ)

となりざしきはちん／＼かもでこちの女郎はなぜこない

つもる恋路に水もらさじといただきしめたるつがひおし」(三十

二ウ)

どこへいつてもおまへのことわ人がほめれば気がもめる

春雨に手と手手と手がかさなりまして恋ぞつもりて漉となる」

(三十三オ)

思ひきりましよあきらめましよが実にはんのうにや引される

岩戸開いて戸ざゝぬ御代に戸ざす初日のまつの色」(三十三ウ)

しゆびがないとのふみ三保のうら松に羽衣きにかゝる

春雨にぬれてしつぱりあの鶯はひゞにほの字のねがさへる」(三

十四オ)

清き心に似合ぬはちすつゆを何ゆへたまとをく

梅に手がありや来るうぐひすもあだな初音をだすわいな」(三

十四ウ)

思案なかばに空とぶ鳥はにげてそふとのつじうらか

ぐちな女だはてやかましい永く勤はさせはせぬ」(三十五オ)

ふじのすそので西行ほふしうさのひる寐が田子の浦

先で丸くでりやなにわしじやとて角にでやせぬ十五夜の月」(三

十五ウ)

奥のざしきでふとしたことばあせになるみの染ゆかた

傘のほねになるまでかよはにやならぬどうでやぶれたこのから

だ」(三十六才)

むちやのやうでもまさかのときは主の顔をばつぶしやせん

人目多けりやはなしがならぬぢれてきをもむ茶わんざけ」(三

十六ウ)

わたしや奥山一重のさくら八重にさくきはなわいな

ほれていれどもまだぬしさんの心しれぬがきにかゝる」(三十

七才)

広い世界にせまいはおんな浮気されても情立る

逢ふはたまさかかよふは夜であはずにかへるは幾度か」(三十

七ウ)

ちらと見たのでふたゝび見ずはさほどこがれはせぬわいな

早くおまへを親にもあわせわしが旦那と名号(なづけ)たや」

(三十八才)

花ぞめのうつろひやすきはうき世の習ひもしやそふかとも思

ひ

元旦やきのふ口舌の赤鬼さへもこゝろ直して礼に来る」(三十

八ウ)

千のきせうで鳥をころし主と朝ねをしてゐたい

麻系のよれつもつれつもつれつよれつ末はほどけぬなかな
る」(三十九才)

張つめて見ればいこちで身はあつ氷とけてしまへばたゞの水

雀めどのお宿も聞ぬまうその先に笹の相手がゑんとなる」(三

十九ウ)

下枝の花は折ずに扱ものずきなとゞかぬ梢で苦勞する

行暮れし人に宿かす主の花も朝の別れは袖の露」(四十才)

雁がねの心みだれてたよりのふみもひだりまへなる八文字

驚の心とめてはあまたのとりのねぐら／＼もうはの空」(四十

ウ)

十九、団々芳此(明治初期刊。綿屋喜兵衛板。)

団々芳此

大坂氏龍

貞信

半水題」(表紙)

貞信

浮言何？莊子示蝶夢

他所ゆきでも心でしやうちもしも見へたか電信で」（見返し）

うそもまこともしかたでしれるかくすおまへの気がしれぬ
ほれたどうしと寒暖けいはあつくなくなるほどのぼりつめ

ぬしの下齒はわたしときめてやめてくれよくいちらし

ちよつと口舌でせなかとせなかさぐるたがひのはらとはら

上等なおまへに下等なわたし」（とばへ）どうぞだかれてねず

みとはおよばぬこひの身の？？」中等にへだてる？？」（一？

オ）

ぬしのちかひとはやりのペンキはじめ見ごとではげやすい

赤い下た着にまよふたゆへにあかいべゝきる土はこび

色町（さと）のぬり家（や）はツイはげやすいそでかためた

煉瓦石

心とこゝろがあいさへすれば性があをふがあをまいが

ぬしの心がくるはぬやうに神にねがひをかけ時計

うは気心はすこしもないが恋しいお方があるばかり」（一？ウ）

胸に手をあてかんがへ見ればどうしてこんなにほれたのか

きりでもむよな真身ないけんこたへましたよむねの針

どうせ新聞（ユウス）にかゝれたからはすへに貞女と出るまで

わたしや長靴おまへはとんびはれてあはれぬ身のいんぐは

ぬれて居ながら手のうらかへすやうなしくれのうはき雲

白と黒とはわたしのむねにおいておまへにゆづる勝」（三オ）

馬車や汽せんにくらうじやないがうつかりのれない人の口

恋のをも荷を山ほどつんで水にこがるゝ川じやうき

しやくをいたわる手先にふれた乳にこゝるも身もくたく

あふといふ夜にさはりがあつて月にむら雲うらめしや

心経病じやとわらはばわらへ死んでも思ひのとゞく丈

たよりばかりで互ひに居れどえんはきれない電しんき」（三ウ）

開化したとはたゞおもて向むねはひらけぬ恋のぐち

ぬしとつながるくさりがあらば赤い着物をきるとても

かうもしたらといさめて見ても用ちひられぬは浅いゆへ

ふいとあまへてわがまゝ気まゝそれでもをさまる好たどし

しのびあふ夜はわしやおもひ鳥なるこの音さへむなさわぎ

きれてくやしい思ひも急うにさきへとゞかぬでんしんき」（四

オ）

何と書りよが新聞（にうす）は／＼わたしやわたしでほれた人

以後のうは気は罰金取るぞこれまでしたのは御取消

はやく三すじの束縛といっておもふをまへと一トすじに

おもふお方が兵士にあたりわづか三年が百千歳（もゝちとせ）

まよふうば玉恋じのやみをてらすランプはなぜできぬ

ぬしはなをさら姑はだいいほれたおまへをうんだ人」(四ウ)

蚊やの籠城枕の砦君の進撃まつて居る

雪よ花よと今宵の月に三ツの根じめの奥ざしき

ぬしの心のくさらぬさきに漬けておきたやアルコール

出雲の国へとでんしんかけていもせ結びの神だのみ

文も至急に名も書とめはほつれぬ縁にしのむすびいと

一羽でつれないアノかりがねはふみのたよりをしてくれぬ」(五オ)

口でばかりはまことがしれぬならば心を写しん鏡

つもる口舌でツイ夜をあかしのこりは附録にしてあげる

ふつと目さまし手をうちながめ思ひ出さるゝ爪のあと

身分ちがへどほれまい物かすしやおのおさとはニイまくら

そめた此齒が証券印紙うは気で反古にはさせはせぬ

あまりたえかね一筆そめ井内のやうすを菊の花」(五ウ)

悪性男を出雲へ訴訟産神たのんで代書人

ふみや言づてそりやまだ初心むねのエリキでかんじあふ

ちり積んで山となるほど借金したも三味のてうしにのせたばち

ぞつと手にとりおまへの写真あふたはじめを思ひだす

三合の小ぬか湯やにてつかつてしまいあすは婿いりするつもり

火がないといふて持だす西洋附木一ぶくするなとすりつける」

(六オ)

はなれ座しきでむすびしえんも今じやはなれぬ中ざしき

いまのいまゝでだいにされて用がなくなりやおとし水

ぬしをまつ身はこうもり傘よあめのふるにも天気にも

ぬしをまつ夜は千年のおもひあへば間もなくあけのかね

来さうな物だとれんじをあけて見ればかすかに夜なきそば

鼻はしゝでも角兵への子どもゑちご自まんの雪のはだ」(六ウ)

かはすせいしを活字ですつたことままでせけんへ新ぶんし

ぬしの郵便ん見てさへうれしあふてうれしさ口へでぬ

主のかいくわはほどよいけれどずがるたもとにそでがない

月とすつぽんおよばぬ事とかくごしながら恋のよく

まはしのあるときやとかくにぬしはかへなゝと車夫のまね

目ざまし時計を十ぶんすゝめやばを追だすかねのこへ」(七オ)

口の車へやばをばのせてそして三すじの糸でひく

まつ夜のながきを四時間つめてあふ夜みぢかいたしにまへに

どうかはじめの浅瀬へもどりおまへにうきあしさぐりたい

おやじのらんぷは開化にくらしよくに???米会社

たゝく戸口をぬしかとあけりや端がきなげこむ配達しや

月にそなへたアノ花すゝき風のふくたび小手まねき」(七ウ)

十日戎に大黒つれて開化坊主の二人り連

いやで起証をさて書く時は熊野で烏がアホウ／＼となくだろ

すゐてきしやうを夜かく時はくまのでからすが三羽しぬ

忍ぶ恋路に悪まがさしてあわずにいなした事もある

羽おりきせかけ行きき根どひすねてたんすをせなでしめ

広い世かいにひとりとき？てのぼりつめたる日曜日「(八才)

はれてあわれぬ心のやみにてらすかいなき月曜日(ぐはつよう
び)

野暮な女房はたきつけられてもゆる思ひの火曜日

浮気あそびの調子がついてながすつもりの水曜日

恋の???に?がさいて中をさかれし木曜日

かたい稼ぎのおまへにくふてどんとたまるよ金曜日

とど?ぬ恋路はなみだのアめにしめりがちなる土曜日「(八ウ)

「書物画双紙」問屋

大阪心斎橋筋塩町角

綿屋喜兵衛版

千金丹吹寄都々「(表紙)

千金丹吹よせ都々いつ

長谷川梓「(見返し)

大つゑ

ぐわんそは大きかのあづちまちのぶやまかでのせんきんたん
そのまたくすりのこうのうはだい一ひぬをとゝのへてむねはら
いたみにひやくなやみづつうにめまいたちくらみたんせきしや
くつかへまたはりやあんせうにのむしとこゑそろへふたりみた
りとつれだちてかうもりがさに手にはかばんさげてちまたをう
りあるく「(一才)

おなじく

かんだはなだいのやなぎわらてんぐやかでんのせんきんたんこ
のまたおくはしのこしらへはだいはたいはくかんざらしやはら
かにてはにつかずだい一ひぬをとゝのへてたんせきはらくすり
子どものなくのにあてがへばぢきだまるさアサおかひとしやべ
りたてそろひのいでたちづきんかぶつてうりあるく「(一ウ)
おなどく

二十、千金丹吹寄都々「(明治十四年以降刊。都々逸以外
も翻刻。)

ぐはんそまんきつのへれ／＼おどりさみせんたいこでにぎやか
にたいこがなつたらばにぎやかだほんとにさうならすまないと

あかいてぬぐひほふかむりあふぎをさつとひらきてあしをうご
かしてへれ／＼へエのはら／＼はアとくびをふりおどりますて
うしとり／＼はやしたてきやくはやまなすまんきつぼうずのお
はこもの「(二オ)

おなじく

あんけはたつぶりなあづきもちのむらのかせいのむらさめおこ
しふなばしようかんは上しんでかにやなだいのまつかせせんべ
エふうげつのまんぢうにゑいたらうのあまなつとうまつやのし
んせいおくはししるこはたるまにきはらだなふきやちやうだん
ご大橋にしのくぼおはぎはしんばしすだのめいぶつさくらも
ち「(二ウ)

おなじく

かいくはのよのなかはかはつたものはのきにはひのまるのはた
をたてにちようがそんでいびいかいきやうしきやちやうちんま
つりゆうびんはがきたよりはんげんぶくのごんさいふうはやい
てりがらふくはつじのひきふだしんぶんしみなさんがさんぱつ
あたまでひげはやしせいようりやうりにうしにくようしゆにこ
ほりみづ「(三オ)

おなじく

たうじはやりのくわしうりはかしらにはんだいそめ小そでしよ

かいだいりよにほうねんおこしてんぐやいちりうのあめくはし
はづきんでかさをさしみないちやうのはこそをさげまち／＼よう
りあるくへら／＼おこしはあかてぬぐひほうかむりあふぎをひ
らいて子をまねぐだいごくいでたてかねやたいこでぢやんがら
がんのどん「(三ウ)

おなじく

あさくさおくやまのにぎはひはむかしもいまもかはりなくやう
きうばみづちややしやしんみせものごやはのきならびなんきん
のはやはぎにかめさるのげいづくしあぶらゑの大めがねやすも
とおやこのめいさくのいきにんぎやうなかにもめにたつさんご
じゆのにんぎやうはびをつくしまめぎうのかごぬけはやてじ
な「(四オ)

ぢんく

あかいてぬぐひへれ／＼おどりまんきつぼうずのおはこもの
とうじはやりのせんきんたんはおほさかひろしまいづがはら
「(四ウ)

ぢんく

子どもあつめておどりのてまねへれ／＼おこしのあかあふぎ
てんぐやーりうせんきんとうはだいはたいはくはらくすり「(五
ウ)

どゞいつ

わしがよわたりヤばかけていれど「たいこがなつたらにぎやか
だアヨほんとにそふならすまないよヲへれへエのどつこいしよ
のへエ、と」いはなきヤおきやくのきにいらぬ」(五ウ)

どゞいつ

あかいあふぎにてぬぐひかむり」(角兵へ)かぐらはやしてま
ちノめぐるおなじよわたりうめさくら」うたひはやしてくわ
しをうる」(六オ)

どゞいつ

うしろはちまきはんも、ひきで」(さがやおむる)はなはゑん
やうがゑんじのはなはひくけれど「いづれおとらぬうでくらへ」

(六ウ)

どゞいつ

主のうはきをわしやくにやんで」(ことば)ぐはんそはたいし
ういづがはらすみながかでのせんきんたんそのまたくすりの
かうのうはだい一ひゑをと、のへたんせきりういんしよくつか
へ」づゝうめまいやしやくのたね」(七オ)

さむさいとはず身はかちはだし「ぐわんそはかんだやなぎわら
てんぐやいちりう千金とうそのまたおくはしのこしらへはだい
はたいはくかんざらし」ぎやうめいちかかんまいり」(七ウ)

かつぼれ

せきイのヲ、かうざアにイ、へれノ、が見イへるあかいてエぬ
ウぐウウい ヤレヨノこれわいサまんきつじや エ、まんきイ
つウノ、ナア、、ヨイトコラサうしろはアチイマアキヤレコ
ノすて、こサゑんやうじやエ、、」(八オ)

おなじく

まちイにイ、そろひてエ、ちらほらア、、云へるあれはせエ
んきイんたアんヤレコノアレハノサくすりうりじやアエ、くす
りうりノ、ジヤアエ、、ヨイトコラサあれはおほさアかヤレ
コノひろしまサいづがはらじやアエ、、」(八ウ)

どゞいつ

てにはかうもりかばんをさげてぐはんそははやりの千きんたん
とうじはやりのせんきんたんはくぎぬきわちがひさうほんけ」

(九オ)

どゞいつ

てんぐや一りうあめくはしうりはづきんそろひのはでぬしやう
あかいてぬぐひへれノ、おどりあかいあふぎできやくをよぶ」
(九ウ)

二十一、粹人秘訣系竹迺栞（明治十六年。活版本。）

粹人秘訣系竹野栞（表紙）

粹人秘訣系竹迺栞（扉）

第十三 文句入都々逸の部

第十四 都々逸の部（中扉）

文句入都々逸

かへる羽織の袂にすがり（鎌倉三代記）みじかき夏のート夜
さに忠義のかける間もあるまい）しく尻や私が立過ごし

ゆふべの夢見が迷ひの種よ（清水主水）しかも桜の初日の夜
はでな一座の其中でツイ岡惚の浮きから）今じゃ二人が身の迫

（つま）り

またもお株な気休め文句（清元きせん）世事でまろめて浮き
でこねて）人をでつちと甘（あまく）見る

ついた事から浮名が洩て（はうた）桐の雨掛りて袖に濡燕
ア（一頁）レ見やシヤンせ鳥でさへ馴しところを振捨て）つ

れないお前に此苦勞

登るはしごを心で数へ（ステ、コ）逢たサに見たサしたサに
来たのに）涙ぐむとは恨みだよ

髪も結まい化粧もしまい（清元保名）すがたもいつか）乱れ
次第にじやう立る

じれつたい程疑ぐり深い（全権八）つらい勤の其内に情は売
と心まで売ぬわたしが苦界のまこと）など、手管でそら涙

好な酒なら吞なじや無が（一中）まだ其癖が大淀のせきも出）

（二頁）ぬのに）重ちやお止よ御身の毒

ぬしの為には此身を捨て（清元吉原雀）くがいする身を立る
とて義理いつぺんの仇付は結句心のもめる種）無理な願の神だ
のみ

大きな声だよ静かにをしよ（詞）本家は大阪安土町信山家伝
の千金丹）聞からしやくをば止におし

わたしを自狂して浮気の風に（梅の春）ゆるしの色もきのふ
今日こゝろ計りを春がすみ）きれて梢にやつこ紙鳶（二頁）

都々逸之部

誘ふ春風こほりは解けて嬉しや気儘に開く梅（花淵生）

背中合せの口説がいつか解けし帯まで腹合せ（小利介）

凹（あふ）て凸（とつ）くり話したうへでどうかいつしよに暮

し度（米蘭明）

若や夫かと門の戸開りや棒を抱えて立て居る（吞天）

思ふ事さへ言はれぬ口で嘘を突れる筈がない（阿加子）

極た規則で浮気が止めば早く立たいれん慕律（烟峯）

早く其方（そなた）をワイフと極て家族二人と届けたい（苦楽多）

惚た同士とかんだん計は熱くなる程登りつめ（百一生）（一頁）

くわつと燃立つ私の胸を主のポンプで消止る（蘆園）

蚊帳の籠城まぐらの取手君の進撃待つている（田村）

離れ座敷で結びしえにし今ぢや離れぬ中座敷（小利介）

行燈搔立て寝顔を見ればほんに鼻毛の長い人（開化楼）

ひろひ世界をこの春雨に狭くして行く模合傘（武陵）

持被（もちかけ）られても乗れぬ物は他（ひと）の女房と口ぐるま（小僧）

如何程此身は耐忍しても将来見込のない足下（掬月）

こひし男に郵便やつて二銭の約束（ちぎり）をする積り（雪降

景様）

吸付煙草につい浮されて人の意見が煙むく成（喜多川）（二

頁）

恋といふ字を分析すればいとし／＼といふ心（玉閑人）

解て嬉しい帯ひとすぢで十重も甘重も結ぶ縁（拙久台）

化学術でも分析できぬ主とわたしの新和力（小狐紫）

月落烏が啼とも儘よ不使帰（かへしやせぬ）ぞへ今朝のしも（蘆

陽堂）

何（どう）でもお做（し）よと投出す体其（そん）なら斯（か

う）かと引寄る（木一庵）

苦勞しとげた嬉しい息を火吹竹から吹て出る（山守舎）

四辺見まはし小声に成てお名残惜やと覗く顔（釜椀）

昼は彼（あゝ）して夜は此様（こう）してと世帯持日の仮規則

（喜多世）

外にや瓦斯燈内には硝燈（らんぷ）何処で話を仕様やら（清風

堂）（三頁）

折々亭主がお世話に成と遠火で焦さぬ焼上手（九如）

じれて当なく待には増か嘘でも来（こい）との此端書（横月）

羽織着せ掛行く先根問すねてたんすを背（せな）で（前田乙）

アレサお止（よし）と大声立て嬉しいのだよと口の内（放息生）

義理や人情が守れる成ば恋は思案の外ぢや無（真水）

昼の家業は家への勉め夜るのかせぎは国の為（大川兼）

主を寐かして嬉しく解けば帯も察して鼠なき（おちん）

恋の山路にトンネル開き人目知さず通ひたい（木一庵）

顔を包んで夜道を忍ぶ恋の曲ものふたりづれ（篤敬堂）（四

頁）

跡は野となれ又、儘の川流す積りのゆきの朝（木一庵）

烟草は尽（つきる）し火の気は失（うせ）る来か疲のなき寐い

り（米蘭明）

己惚（うぬぼれ）お客に貰つた猪口を色は思案の外へさす（百

一生）

金は敵（かたき）よ身はひとつのもの然れど心はぬしの妻（暗白

子）

明の鴉がわる世話やけば時計の音まで肩を持（半拙）

摩（すれ）ば琢（する）ほど濃なる恋路ぬしは磨墨（するすみ）

わしや硯（十）

更て待夜の身に染ものは蕎麦の風鈴かは千鳥（半拙子）

恋の会議を出雲でひらき鐘と鴉がはいしたい（新猫子）

逢度（あいたい）見度を停止にさせて苦勞が禁獄すれば宜い（琴

屋）（五頁）

こゝろ土筆に袴をとらせ濡れる嫁菜も春の雨（うかれ酔史）

腹を立てて又た笑わせて嬉しがらせて泣（なかす）のか（迂似

夢史）

逢た其日のこゝろに成て逢うくぬ其日もくらし度（文狂）

寧（いつ）そ身体（からだ）も郵簡（てがみ）にふうじ人目の

関所を通し度（半拙子）

夜這するなら裸でお来（い）で忘れ物からたつ浮名（車楽斎）

蔑視（みさげ）しやんすな夢喰虫も透（すき）を狙て間夫が来

る（贅々亭）

蜜（そつ）と裏から返したけれど履（げた）が気になる雪の朝

（滑稽笑史）

吸附煙草の煙となつて主の腹中（おなか）が見て来（きた）い

（香巖漁史）

よそで解とは露しら糸でくける博多の男おび（喜多世）（六

頁）

主も莞爾（につこり）妾（わた）しもにこりしたで四凝（しこ

り）が出来た腹（庫太）

神代このかた変らぬ物は水の流れと恋のみち（横堀久）

恋のふち瀬に身を投島田浮くも沈むも主次第（北圃）

私の言事主や水にして湯に入る外には解ぬ帯（全）

口と口とのそのよい中え誰れが始めた髭の垣（新昇）

出来た様だと心でさつし尻へ手をやる爛徳利（南晋）

一寸顔みせまた雲がくれ主はわたしに秋の月（煙峯）

まくら相手に写真を詠め主とそいねを為た心（千年）

岸のやなぎはそよ吹風に靡（なびく）真似して逃てゐる（春風

楼）（七頁）

斯(かう)なりや別が又惜くなるとけた話の雪のあさ(偕老舎)

ねずみ穴より牝猫の穴が蔵の為には不用じん(愚案無斉)

すねて往(ゆく)よな気随な人に降よかゝれよ花の雨(妻蘭)

折ちや悪いと心のこまをつなぐ桜に又くるふ(華蝶)

口もかるいがお尻も軽い夫でも娠(はらめ)ば身は重い(中文)

月夜鳥と止めては見たが嘘のつけない鐘の数(梅廼家)

飾る花壇の究屈よりも私じや野菊の乱れざき(迂流)

焼て燃たつ私しの胸は主のポンプでつゐ湿(しめる)(全)

お前どれだけ私しや是丈と思違ひに齟(くひ)ちがひ(横堀久)

(八頁)

朧月夜が白地(さらり)とはれて忍ぶ恋路の妨(じやま)をす

る(縁橋閑人)

アレサお止(よし)と払つた手先いつか枕の下になる(春風楼)

人は何ともまだ白雪のうちに綻ぶ梅のはな(緑柳山人)

顔は見ゆれど互ひの胸の明ても言れぬ硝子窓(篠崎)

ツボン短衣(ちよつき)の姿に迷ひ袖ない恋路に苦勞為(する)

(暁夢)

よそで弘誓(ぐせい)のふな遊して一ツ蓮もないもんだ(常盤

舎)

お前に見せよと結たる髪を夜中に乱も亦お前(小利介)

ひたと寄そひ抜身を握り殺してお呉と鼻で息(月雫亭)

夫と言ねど差れた猪口に浮む情をくみかわす(木一庵)「(九

頁)

火箸で火鉢へ書口説かれて直(すぐ)に返事を灰にかく(枝連

鷹)

舟板一まい怖(こわ)くはないが舌の二枚が怖ろしい(天水亭)

憎らしいよと横目で睨みそして可愛い抓(つめ)り様(信平)

ぬしは上等私たしは下等人が中等(ちうと)で邪魔を為(する)

(京都村)

離(はなれ)られ／＼られない訳を言(いわれ)られ／＼られ

／＼ぬ(美学)

写真とるなら硝子にさんせ裏からお前の腹を見(根来嘩)

指切や疼(いた)かる髪切や違註(かいぬ)何為(どうすり)

や誠が立だらう(迂春生)

主が貧(ひんす)りや緞子の帯も売て世帯のたしにする(富久

喜)

違ぬ泪で両そで滋(しめ)し逢へば涎で袷帯ぬらす(蘆陽堂)「

(十頁)

あさいお前のその水性を汲とる私のこひ柄杓(ひしやく)(南

幸金)

浅いこゝろの女のまへにふかいところが唯一（たゞひとつ）（無鉄炮）

夢の様だと膝すり寄り寄て話そとおもへば帯（さめ）る夢（仰山房）

逢ねば逢ぬで苦勞に苦勞逢へば逢たて又苦勞（百一生）

言て仕舞か言ずに置こか思案なかばの洗ひ髪（豊年舎）

太く書るゝ細見よりも細く家族と書りたい（馬淵）

いつか二人の口説は解てたゝむ帯まで腹合せ（鈴の家）

深く成たるその水もとは真言（まこと）のなみだの一雫（久留米紺）

米紺）

忍び逢ふ夜の燈火（ともしび）消せば憎くや影さす窓の月（烟峯）（十一頁）

富士の山ほど苦勞を駿河もとは一夜の出来心（此花心二）

妾といふ字を分析すれば果して波かぜ立つ女（湖山）

待て寝られぬ其夜の鐘は来んと鳴さへ氣に掛（かゝる）（醉史楼）

口で悪言（けな）して心で惚（の）ろけ時々潜（しの）んで見る写真（三勝）

好と嫌ひが一度に來れば算木立たり倒したり（香漁史）

同じ、（ちよい）でも天地の違ひ、とおいでと、と來い（木一庵）

長い月日を指をり尽くしいまは思案に組（くむ）両手（名内）

君を違（まつ）夜は月よりほかに入れぬ私しの蚊帳の中（鈍沢生）

昔し流した浮名がいまの川といふ字に寐る始（本蘭子）（十

二頁）

耳へ口寄せ囁く千話に笑顔で冠（かぶり）を豎に振る（不見廼代二）

寐ると云ても枕は貸さぬ恋しがらせた意趣返（吟雪堂）

ほんに嬉しと指た盃（ちよく）を取れば隣へおとりづき（小利介）

雲と雨との濡（しめり）がなけりや斯（かう）はふえまい人の種（温故堂）

硝子障子とたんすの環が無（なけ）りや腎虚を為有り（曙窓）

思案最中にらん燭（ぶ）が消てくらう做（する）との辻占か（土岐）

お玉杓子で否（いや）ならおよし主も蛙の子のくせに（川友）

松の様なる片意地ものも雪の肌には折れ易ひ（独楽山人）

主は二十一わたしは十九四十中好く暮したい（文三）（十三頁）

義理も糸瓜も人目も儘よ川と云字で寐て見たい（頓痴奇）

主のこゝろは西洋がみよ厚く見せても切易い（曙窓）

待に甲斐ない今宵の雨で内に居ながら袖濡す（名 内）

主は風鈴わしやたん冊よ振れながらも附て居（伊奈子）

雨がさゝせる相合がさは濡るはじめの袖と袖（鈍沢生）

浮た同士と言はるゝ筈よ涼み舟から出来た中（正風舎）

人の口には戸を立ながら門（かど）を細目にあけて待（安本）

好ては居れども未（まだ）新櫛（あらぐし）で胸の素（もつ）

れは解にくい（好明子）

唄（うたつ）て居（ある）のに気が付ぬのかト迄言ても呉ぬの

か（蛇幕斎）」（十四頁）

恋の法律確乎とたてりや鐘とからすは国事犯（物部糖袋）

化粧したのでフト見違る雪のあしたの桃桜（土岐）

逢ば二人でしつぽり濡て別れりや独で濡す袖（？々堂）

何を何して何してなんと何でかためた内証文（車楽斎）

主の嘘をば手帖にとめて死ぬ？閻魔へ訴へる（倉谷）

顔見りや苦勞を忘る様な人が有やこそ苦勞為（する）（残気粹

史）

一寸首尾した夜は逢阪の関たつ咄しで後や先（いの丸）

背（せな）から羽織を着るに付て叩いた昔を思ひ出す（三鑑斎）

角が有ても巨燧は粹だ色の媒酌（とりも）ちヨして呉る（紙屑）

（十五頁）

袖が障つてさへ腹の立つ髪も乱すは主ばかり（林花）

雨も厭はず来見る花は初手から覚悟の濡支度（清琴舎）

どんな隔てくの垣するとても惚たと言字が突破る（春の家）

燃る思ひを涙で消して焼ぬふりして待（まつ）悶襟（つら）さ

（文盲庵）

解て嬉しい此したひもを結ぶ思案に私や瘦る（頓珍閑）

思ひ直して寐やうと為（すれ）ばにくや返辞の枕がみ（唐子僧）

玉子食れしかたきを取るか鶏は早鳴して起す（道義）

好で求めたわたしの苦勞助ける貴郎（あなた）がお愛（いとし）

い（黄喙子）

羽織着たまゝ終（つい）転（ころ）び寐の皺が悋氣の種となる

（林花）」（十六頁）

草の戸ぼそに為る立咄し虫も聞く気か止る声（道義）

川と云ふ字に嬉しく寐れば風も冷（すゞし）い蚊帳の内（車楽

斎）

通ふ千鳥の心も知らず霧がかくした須磨の浦（名歌廼舎）

泊に来るなら嶋田は目立つ丸く結なよ棒除（ぼうよけ）に（車

楽斎）

下手な芸者と趁跋車夫は乗たり引たり転（ころん）だり（柴の

戸)

大事の鉢をばお前に割れ水も泄(もら)さぬ中となる(道義)

人の恋路の妨害律が有れば只置く奴ぢや無い(団平)

逢たい見度は夫や色の内今じや互に地味な中(亀尾)

抓(つめ)る手先を確(しつか)と握り忘れちや否(いや)だと目に言せ(独恋肆女太)

思は遂げたが此投島田丸く結ふのが恥かしい(千桃園)「(十

七頁)

忍ぶ切戸に色香を留めて露を目に持つ花の雨(豊年田)

主の浮気が自主自由なら妾(わたし)に愷氣の権もある(永井

湖山)

待がつらけりや逆(さかさ)に読などうせ末には妻と成(島欽)

アレサ明(あかり)を消さしてお呉見(みら)れちや悪(わる

い)よ影法師(睡蝶)

主を帰(か)へして一人にニツならぶ枕の物をもひ(松香)

真綿の様なる手で首(く)て嫌み云れる其つらさ(元智辺楽)

一寸時雨に袖濡らされて暫し仮寐の雨やどり(吟雪堂)

しつぱり濡たる夕の雨ではれた私の胸のゆき(陳秀翰)

春の心もまだをそ桜かたい蒼みの内がはな(小せん)

主ゆへ苦勞で瘦るを人に知せまいとて髪化粧(名川巳之)「(十

八頁)

杲(あき)が来たなら明してお呉私もゆつくり思案為(竹笑社)

あれさお止(よし)と口には云ど解て嬉しい繻子の帯(烟峯)

早やくあい鯛そい鯛み鯛か鯛お前にすかれ鯛(木一庵)

思ふまいぞへもう思ぬと思へば思はず思ひ出(似水)

きのふ逢そめ今日なれ初て好たらしいと思染(花寿軒)

惚たは私が重々わるい可愛といつたは主の罪(清静堂)

積りノヽし口説もいつかとけて添寐の雪の肌(藤屋よし)

恋の邪魔すりや那(あの)鴉さへ可愛と鳴ても憎まれる(茶楽

久齋)

一ツよりない私の命ち二人とはない人にやる(出鱈目)

花に心をうつしていつか濡てうれしい雨の蝶(糸竹屋)「(十

九頁)

アレサと声をば立きる屏風中は離ぬ蝶つがい(真心亭)

露の千草に宿かる虫も月にこがれて鳴あかす(絵馬屋)

笑顔ふくんで咲たる花も仇に折らるゝ庭の梅(浪花楼)

曇りがちなる気も知無(しらない)が独すました松のつき(吉

野舎)

右の通りと慥(たしか)に惚れて如此(かくのごとく)の苦勞

する(心菊齋)

主が浮気に浮気をすれば私や苦勞に苦勞する（南幸金）

恋の迷ひ路明りはいらぬ人目はゞかる事計り（暗白坊）

よれつ纏れつする青柳は風が悋気で分て来る（小泉店）

儘に成（なるな）ら写しておきな逢たまぼろし夢うつゝ（平太夫）

蔭でほめるは誠との色さいやな客には表むき（木一庵）（二十頁）

愚痴や恨をツイ嬉しさよ言たり聞たり聞たり惚（のろけ）たり

（京都村）

二人打とけよりそふ処へ袴着て出る爛どくり（馬唐子）

ぬしの心も知らない中に惚た私しも気が知れぬ（玉潤亭）

思ひ切ます諦らめますと詫る跡から出る惚気（のろけ）（親釜散史）

散史）

主はなほ更舅姑（しうと）は大事惚れたおまへを産だ親

鐘や鴉すに愚痴云よりも早く夫婦で暮したい

月は朧に待夜は更けて雁（かり）は帰へるが主は来ぬ

相乗車で人眼を隠くし雨も嬉しき母衣（ほろ）のうち

寧（いつ）そさつ張（ぱり）いふのは止て鶏のなく迄もつれ髪

逢は別れのはじめと云ど死まで別れて成物か」（廿二頁）

切れる覚悟で斯（こう）なる者か設（たと）へ浮気で出来た迎

悋気らしいと言（いはん）す雖（けれど）誰がこんな愚痴に

した

わるく言れりや共々むりに気られまい迎悪（わるく）云

可愛さうだよ一寸の間にも目顔忍んで逢に来る

末はどうかと案思（あんじる）様（やう）でてんから色には成物か

ぬしの有のに命を掛けて迷ひ初めたが因果づく

腹が立ならどうだと為（さん）せお前に任せた此の体

思案し返て見（みる）きは無が其（それ）じゃ苦勞した効（か

ひ）が無

相談づくなら遠ほざ可（かるふ）が問ひ音信（おとづれ）はし

てお呉

不図した事から遂乗が来て今はかた時忘（わすら）れぬ」（廿

二頁）

明治十六年四月廿一日出版御届

同年五月 出版発兌（定価金四十銭）

編輯者 島根県平民

西村三郎

芝区南佐久間町壱丁目式番地

出版者 春陽堂 岐阜県平民

和田篤太郎

芝区桜田町十番地」(奥付)

二十二、続粹の大蔵書(明治十八年。活版本。)

続粹の大蔵書」(表紙)

続粹の大蔵書 都々一の部

優しい姿たに見惚(みとれ)ちや居れど手は出し兼る茨の花

主しに参らす此玉章は今年の苦ぜつの筆始め

主しと一所に稼げるなれば赤い衣(き)ものも苦にはせぬ

己(おれ)が四五年若くば杯と言ってそろ／＼逃仕度

好たお方にお金がたと有ば苦勞をするものか

偽(だま)す心はわしやなかつたが金の有のが主の咎

演舌中止の如くに主しの浮氣が警部に頼たい」(一才)

浮氣仕遂て苦勞を仕遂恪氣仕遂て添遂た

一度色二三四にした以五は六ねを七八升此苦勞

逢て嬉しい昨日にかえて今日は茫然(ぼんやり)寐る一人

儘よ端書で五厘をかすれどうせ浮名の立ついで

自分免許の今丹治郎に成は恵美須の後ろだて

鏡出しては恨めしそくにエ、も聞えぬ疱瘡神

けふは蚊遣も辛抱すれば跡はすみよき夏座敷

実と浮氣の両花道で痴話と口説の長ぜりふ

解た人情のえにしの糸も末は結ばる戯作本」(一ウ)

おぼろ月夜に内密(こつそり)行て壁のうき名を消てくる

互ひにいひ得ぬ心の丈を紹介(とりも)つ積りの火取虫

いやな客をば帰して稍(やつ)と寐れば蚤めが又責る

今日も明日もと記立られてつゞきもんだと気取奴

身を粉に彫(きざん)だ其かひあつて今ぢや苦勞を忘草

姉はん団扇と逢状を敷て蚊帳の足からずり入(いれ)る

向(むこ)にもうさが餅付てるとヲチヨボガ目でさす月見台

あいさつ丈にと手形に残す三味もへちまもいらぬ先

外に指切る男が出来て客へ手切の無心言ふ」(一才)

座のしらけから目に付姉がしつくり妹のしよさを見る

花に仇とは知れども月を隠す雲には風ほしい

来るか／＼と帆柱立て船をまつてる床の内

残り肴を引摺込で猫や狐のあばれ食

あきらめの付ぬあきらめ付ては居れど顔見りや未練で又迷う

ほつしり海棠の露程赤く雪の肌へに蚤のあと

暑いと云つゝ立退しなにして西瓜の種つぶて

千度くみても帰らぬものは過た月日に捨た金

情事（せじ）も意気地もゝう仕尽した死ずに情死（しんじつ）

して見たい」（二ウ）

速く帰りて顔見るまでは案事られるよ家の首尾

すねて合した背中（透（すき）をこちら向たい気が通ふ

つらい座敷でおこした癩をおしてやろうと気ざな客

儘になるなら阿片の煙り夜明（あけ）の烏に吞せたい

金の欲いと恋路のことは参議さんでも同じこと

主しの来たとき其鳴声をかへておくれよ門の犬

千尋の海ほど思ていれど濡にや苦勞の甲斐がない

否々（いやいや）書たる此千話文は欲が五百と義理五百

貫はぬ覚悟で無心を言ばくれぬ積りで搔天窓（あたま）」（三

オ）

遠ざかるとて何腹立よ金さへ送りて来ればよい

止（やみ）その見得ても止ないものは主の浮氣と五月雨

親の意見は小じれて聞ど主しのうそをば実にきく

金の有人お客と定め実の有る人間夫にする

後ろ姿が粹なる奴が結句びつくりさせるつら

来るか／＼と主し待夜（よさ）は車の音のみ気にかゝる

自由の権だと言うくだけれど主の有人私やいや

時計が損じて烏が唾で鐘に撞木が無りやよい

自由の権ある蚤蚊を何卒（どうぞ）巡查（おまわり）恃（たの

ん）で捕（とら）せたい」（三ウ）

間夫に機嫌を取身の憂（うき）は客に取らせた埋合す

開けぬ奴だと横目で見れば先ぢや惚たと思やがる

異見聴ときつく両の手は形（なり）も蛙（かはず）のつらに水

惚た男に郵便だして二銭約束するわいな

薄くなつたは人情と紙幣厚くなつたは面のかわ

主の顔より蛭子の顔が見たい計りで神だのみ

明の鐘をば怨るやうなほれた男と寐て見たい

最う来る筈だと障子を明りや出合頭の顔と顔

寐ても覚ても起（おきて）も居ても忘れられ／＼／＼／＼ぬ」

（四オ）

浮た座敷を沈んだ顔で思ひ出してはほつと息

末の末まで案じる様な深い惚ようするものか

遣（つか）や後からもう当る罰（ばち）紙のたゞりは苛酷（ひ

どい）もの

主は梅王わしや桜丸紙幣しへいでくろうする

知れたらどうせう蝙蝠傘の色で気を揉濡た中

未練云ずに羽織を出しな何（いつ）も別れは同こと

二人親睦（なかよく）きるかしわ餅覗いちや否（いや）だよ窓の月

只の一度の便もせず逢たかつたも能出来た

民の竈が賑ひすぎて煙りがふへたよ陸蒸気（四ウ）

時は弥生で身上は富で夫婦二十歳で暮したい

主しの浮気と輸出の金と留る工夫はないものか

金の無時や疝癢ばかりもつた煙管も塞（つま）りがち

根引されたでけふ日は気楽栄耀栄華に抜鼻毛

別に作つた涼みの床机二人の外には掛させぬ

酒の上からつい乗が来て腹の上迄這ひあがる

しつぱり寐てさへ二（ふたつ）の不足鶏がなくのと明の鐘

好たお方に指れた猪口で嫌なお酒も無理に飲

酒も女も博奕もたつが死にや断れぬ自由の権（五オ）

知て知らない顔する様な主に実が明さりよか

酔に紛らしくどいて掛る本性違はぬヤボな客

にくらしい程かわいゝ主をかわいがる人にくらしい

見下しやんすな勉の身でも針と意気地は持て居る

朝の蚤とる寐間着の姿見たら糸仙死ぬだらう

義理と人情を立抜人も浮気や思案の外です

思案半に返辞のふみが届いて見たのでまた思案

主は二筋わしや一筋にほんに三筋で出来た中

明の鐘より只此ごろは苦勞でならない呉るかね（五ウ）

蕎麦屋も呑やも山入（いれ）る頃二人が車の足せかず

鳥渡お客に耳ねずられたお茶亭が芸妓（げいしや）の耳ねずる

悦（よろこび）に来る妹へ客を止める手くだの癪讓る

爰に二つも有升杯と婆々妓が眼鏡の猪口さばき

主しの為なら命も遣る氣苦勞位は税の内

店にや親指奥には小指外にや人指指が居る

男女同権とは言ものゝ公平にやならない凸（でく）と凹（ぼく）

苦勞ノゝと大層らしい恋で苦勞はあたりまへ

義務と権利と戸棚に仕舞然（そし）て浮気が仕て見たい（六オ）

自由になるのも束縛するも皆（みん）な戎のかみ次第

今も昔しの婆さまが居れば舌切鳥にして貰ふ

物質（もの）の変化は理学で知れどだうも解らぬ主の胸

蚊帳で首尾さす雷さまは出雲の方から鳴てくる

間夫に貰た蝙蝠傘を晴て指（さす）日は何時（いつ）である

逢た其夜は病（やまひ）も癒（いへよ）またも頭つうの明烏

有そな様でもないのはおかね無そに見得ても有氣兼

汽車で通うくへば苦なしで行が矢張お足がさきになつ

文明開化の鎖（とぎ）さぬ御代もなぜか恋路にや関が有」（六ウ）

主が貧すりや行燈の火まで消して私しは苦勞する

浮名立られ今さら逃りや名誉回ふく出訴する

甘ひ様子とさつた箱屋一座はどなたと耳ねぶる

茶だち塩だちしてまで主しの浮氣心がなをしたい

嫌（いや）と思へば姿を見るも声を聞のもいやになる

新聞たのんでとなりの鹿島出して欲いよ人為に

何と出さりよがニウスはニウス私しや私（わたい）で惚た人

後指さし誹らば誹れわしは庚申さるでいる

案じ過して写真を見れば主しは替らぬ笑顔」（七オ）

あれさ自烈体（じれつたい）此方（こちら）を向て自由にお抜

せ鼻の毛を

主の写真に印紙を張て惚た証拠にとつておく

雄（いや）なお客と添寐の夢をさます烏は人助け

二人が中をば察しもせず戸籍を彼これ言戸長

堅く結んで居る様に見せて逢ば速（すぐ）解しゆすの帯

女は惚ぬが私や色男ふみかく力と金がない

耳の聞えぬ他人の行けんそしてお前に目が見へぬ

稲つむ頃から餅つき初め首尾は足かけ二年越

明の烏になき別れして見送る男のとんびわけ」（七ウ）

嫌なお客へあい状だして釣出す芸妓（げいしや）の節季前

羽織きせかけ行先根問すねてたんすを背中であ

二銭銅貨の一円づゝみ入ておくれよきん着に

氷ノノの声より高い浮名にヒヤノノするわいな

ヘラの利益は論より証拠ひらノノ岩戸の御開帳

浮て流れる花だと思や意地に成てもせき留る

好たお方にお金がなふて否（いや）な客には金が有る

切さへせなけりや千里の道も便有ぞへ電信機

寺の納所が時計を詠め十時に成のは何（いつ）だろう」（八オ）

二人で写した写真を人に見せて夫婦と言れ度

川と言字は夫（そり）や後（あと）の事りと言じに寐て見たい

山家住居（すまい）は不自由だけれど寐ながら詠める雪月花

手にも提（さげ）よと誓ひし鍋を一ツ冠（かぶ）つて添とげる

証拠とらぬが私の無念何（どう）なと勝手に被成（しやノノ）

んせ

強拗（すね）ちや見たれど又無（またない）首尾と主に誤（あ

やまる）氣の弱さ

米の高いを頭痛にやんで下りやお服（はら）が又痛む

送籍したから世間は広い是から水性（うわき）を為（して）御覽

氣障なお客と寐るのもお金惜い別れの別（あけ）の鐘」（八ウ）

つらい勤を苦にさせまひと泣がほ笑顔にして出逢ふ

私しの眉やらお前の嘘を捨る工夫はなひかひな

幻心（おぼろごゝろ）になるほどしごくやさし見覚（みさめ）

のせぬ寐顔

内へさうとは云ひ憎ひ中たつた浮名が聞したい

つとめするのもお前の為といやなお客のきげんとる

当座かるのも互ひの為と話する間に明の鐘

ぬしを待夜は似た足音にいく度枕をあげたやら

あへば積つた話の山も涙ながして川となる

むねにみなぎる涙をとゞめゑ顔でかなしい別れする」（九オ）

うつむく拍子に簪抜て異見きく間の畳ざん

主の心もまだ不知火の胸で思ひを筑紫がた

常にかわつた其氣安めは余所で浮気の下地らし

塵の積つた枕の山へ鶴首のばした主がきた

苦勞駿河の甲斐ある今宵富士に顔見た嬉し首尾

客に十分馬のりさしてほつ／＼無心の手綱引

一寸其所まで提灯もつて道から消へたる粹な下女

罪をふやしに通つた好が今は落てる地獄帳

客に腕（かひ）なの好見出され上りかゝつた足からむ」（九ウ）

三本足じやと聞てるお客それゆへ二の足踏で居る

否や座敷で持ちにくひ撥好の指輪にこだわつて

影でして居別れのつらさおもて向から上（あげ）にきて

否な手這（ては）いらすずきの手這入（てはいり）ゴム入見た

よなしゆすの帯

嫌に捻られ笑凹（ゑくぼ）がはれて鼻もかくれる程にらむ

無理に二階へひき上帯の解る手摺の引かゝり

おとゞしお升と鳥渡拾ひ花笑顔こぼしにくる座しき

是が私をはめたる穴と煙管で男のゑ凹（くぼ）つく

内の手前は旅行にして馴れた二階で滞留（とうりう）する」（十

オ）

骨返（こつそり）家かたで逢てゝ茶屋へ来てや無（ない）かと

鼻でとふ

鏡に向ふて素情（すげ）ないぬしを惚さす稽古に顔つかれ

内から一寸（ちよいと）と去（い）ぬ門口の行燈で逢状読でみ

る

憎ひ女子（おなご）が居（ある）つらあてにのみさして有酒す

ける

そゞる化粧に紅付け忘れ主にをかしく疑はれ
好と引付すいつく今宵尻に寐蛸が出来たらし

とまらぬ涕に去(い)ぬ氣強さと後からとる胸ぐらを

うれ四季中にも秋さへ来ば花も見すてる時がある

嘘で去ぬ客誠でもどるすきと嫌ひへ分け言葉(十ウ)

眉毛落したその四五日はうつかり忘れて撫てみる

まつに鶴ほど首のばさして酒に虎とはどよくな

欺す勤のならひといはれつらや誠も嘘になる

酒屋へ三里も厭(いとひ)はせぬと嘘を遊女が客だます

あふた其夜は口説で明しあわぬ其夜は夢に見る

空は曇れど思はぬ首尾に思ひはらした私がむね

一人ねる夜は常から聞た実を添ひ寐の様にする

此膝の外ぬらさぬ涙余所に恨みのないわたし

覚へある身は氣咎するよ人の噂のはなしまで(十一オ)

胸の時計が狂いくふて内へ戻る時間もしれぬ首尾

行燈かきたて寐顔をのぞき余所の女(おなご)も惚るはづ

煙二すじはいふきにたつ濟ぬ同士のすねたばこ

はでな浮名は引たる跡へのこして二人が町住居

主と私しの浮名が記者の机に山ほど積んである

罪のまぜつた一座は三味の調子さへツイ低あはす

素根(すね)て合した背中の透(すき)をこちら向たひ氣が通
ふ

うれし可愛の言葉の花は惚た二人のみゝにさく

右の所をうかゞふ雑魚寐左りまへとはしらぬ客(十一ウ)

逢へば戻つて来た人のやうあはにや留主して居る心

嬉し逢状も引さく手管笑顔でお客の腹しごく

落し所がわるひによつて私しの櫛しも云かねる

襖の隙からうれしさもれて隣り座敷もしんとする

市が立はづ蕩氣(のろけ)たすきが道具入からとんで出て

しかと証拠を見て置ランプくらひ云訳さしはせぬ

深ひ思案が有さへすれば浅い心ろはだしはせぬ

長ふ延した化粧のあしも痺れきらして好にあふ

二階へ聞が火鉢の傍の煙草入見てたかばなし(十二オ)

遊び半分たきそのふた飯(まゝ)もうれしひ新世帯

夢見る心地のうれしひ逢状先も幻(おぼ)るでかいたらし

欺す奥の手おぼへた頃は習(なる)た舞の手わすれがち

今朝も返事にちんばを踏で見れば片あし女下駄

もとと起すもまだどこやらが心とがめるよめの花

内と外から話しをきめて格子へ爪印捺(お)して去ぬ

否といふのが色よい返事好にそむけた赤ひかほ

金子（かね）の切目に薄情が知て未練はかんつの欠も無

一所に呼れた二人の傍へあとでいた方が好きな人」（十二ウ）

明治十八年七月一日御届編輯出版人前田喜兵衛大阪府南区塩町
通四丁目四番地価式十五銭」（奥付）

男木女水

夫婦中よくふじゆもせずいたのしくらすは身のくわほう」（四

ウ）

男火女火

むねのほむらでなみだのみづのあつくなるほどものおもひ」（五
オ）

男木女土

人にすぐれた人じやと人はいはれるもみな金しだい」（五ウ）

男木女金

えんがなけれど今このやうにつらひおもひはしなからふ

羅

人にやきかれずゆくさきやしれずたづぬるたよりもなくばかり

土

たつきしられぬ旅路にまよひこゝろ細さよ呼子どり

水

さむい夜風に身をすりよせてうれし鳴にかなくちどり」（六オ）

男火女土

す糸のす糸までたがいのじつはまことあかしてともしらが

金

ぬしと二人りで百年千年よろづ代までもくらしたい

滑稽三世相

〔明治新選〕都々逸粹の近道

浅見鉦太郎著

二書堂蔵」（表紙）

〔明治大新板〕滑稽三世相都々逸粹の近道」（見返し）

男女相性都々逸

男木女木

おもふとふりにねがひもかなひすへはたのしき神の加護」（三
ウ）

男木女火

神もあはれておぼすとならばたすけたまへや此くらう」（四オ）

日

春の淡雪つとめのからだはだ身よしのもとけやすひ

火

とぼけてゐたとてわけある中が人にしれずにゐるものか」(六

ウ)

男金女水

いまもむかしもうれしひ事はおもひあふたるふうふなか

計

ふじつとしらずにほれたが悔しゑんをむすんだかひもない

月

たつたひと声おもはせぶりなあの時鳥のつみつくり

木

さくらいろますうれしひゑにしそらにしられぬ雪のはだ」(七

オ)

男火女木

このよはおるかよまたさきのよも二世とねがふはこひのよく

大歳神

まつといふ字はきへんに公(きみ)よきみと木(ぼく)とはす

ゑを松

大將軍

きがねをきたへてきたつたなかはかへつてきられぬすいたな

か」(七ウ)

男火女金

くろうするのがうき世のつねかむねにたへないうきおもひ

大陰神

ふみつけられたり土(どろ)ぬられたりどうしてわたしのかほ

がたつ

歳刑神

わたしのこゝろは実にうきくさよさそふながれの水しだい」(八

オ)

男火女水

ういめつらひめよにあるかひもなさけないみのふしあわせ

歳破神

つちでかためたにん形でさへもかあいがられてぬしのそば

歳殺神

きるなとぶちなとぞんぶんさんせぬしにまかせたこのからだ」

(八ウ)

男土女土

笠をこゝろにきて世をくらせうへみりやおよばぬことばかり

黄幡神

かうなるからには二せまでかけてそわなきやおかないわしのい
ぢ

豹尾神

ぬしのかんしゃくは日頃のことよなれてなんともおもやせぬ」

(九才)

男水女金

かないそろふてむつまじ月のかづのこだからさんばさう

いろはうかれどゝいつ

いろになるみのゆかたもぬいではだじまんのなつの不二

ろんよりせうをとられてないていひわけするとはばからしい

はかないゑにしとてんからしれてむすぶもふとしたできごゝろ

にしも東もしらないものをつれてうわきなたびかせぎ」(九ウ)

男土女金

ねがひどふりにおもひもはれてこんなうれしいことはない

ほれた女房のあるそのひとになんでこんなにほれたらう

へびに女房がなられちやこわいいろはしないとおきらめた

とふからこゝろよほれてはぬれどどふもいひよるしほがない

ちわがつのつてぬもないくぜつはらをたつたりたゝせたり」(十

五才)

男土女水

心ほそさよ子のないからだとしがよつたらどふしよふ

りかうだと思つてかゝるがおまへがばかよそばの二はいもくつ

たやつ

ぬれてあふよはねてからさきのまつにかひなきあけがらす

るすをねらつたどろぼふ猫がきてはちよこゝぬすみぐひ

おまへじやきをもみ女房にやきがね是じや命もつゞくまい」(十

五ウ)

男土女水

すてる神ありたすける神をいのればめぐみのあるものさ

わたしも女子(おなご)じやいひたい事もぬしのためじやとが

まんする

かわゆがりじつしつくしたわたしのかほをふみつけられてはら

がたつ

よそふと思へどまたかほみればどふもみれんで立かへる

たまにあふゆへはなしがのこるしみゝだきねがしてみたい」

(十六才)

男土女火

ほれたどふしでなにふそくなくらくにうれしき世をくらす

れいぎたゞしききやうみんさんもけつくわけなくとりみだし

それほどあのこがあいならばわたしにみれんはあるまいに

つれてにげるとおまへはいふが女房すてゝはゆかれない

ねるまもないほどおふいそがしや金のかんじようでかたがは
る」(十六ウ)

男金女金

さわりありがちよいことゝてはとかくすくなきよのならひ
なんぼほれてもみすかされてもばかにされてははらがたつ
らんさまでもきものはまとふはだかじや道中もできまいよ
むりなくぜつになかしておいてねるとはあんまりむしがいゝ
うたゝねのさめてためいきこゝろのもつれ人にやはなせぬこの
しだら」(十七オ)

男金女木

しよてからかふいふなげきがあるとしれてゐたならほれもせで
ゐけんするほどなをやけになりかんしやくおこしてやつあたり
のろけてみんなになぶられながらおもはずしらす口すべる
おにのやうでもこゝろのうちはべんでんさまでもかなやせぬ
くろうつするのはてんからかくごいきなていしゆをもつからは」

(十七ウ)

男金女火

なくにやなかれずふさいでばかりゑゝもぢれたいしやばせかい
やみとおまへにかういりあげてすゑはどふしやうかうしさき

まはし屏風のたをれたゑんでとなりどうしのおちかづき

けんもぐんしをしやうといふはかねてむほんの下ごゝろ
ふとしたことからついのりがきて今じやかたときわすられぬ」

(十八オ)

男金女土

たい家くらしはきがねがおほいぬしとふたりでらくゑん居
こんななげきもおもへばほんにむすぶのかみがうらめしひ
ゑんがありやこそたかねのさくらおつて手いけの花にする
てまへがつてのわがまゝいふもなかう人いらすのふうふなか
あどけないのがかわゆひけれどしよしんすぎるもじれつたい」

(十八ウ)

男水女木

ありがたいぞへうれしひゑんをむすんでくれたる神ほとけ
三味線まくらの身のふしたらはわがみながらもはづかしい
きがねくろうもみなおまへゆへそれに今更きれことば
ゆかしごげんとたゝひと筆につなぎとめたる初会文」(十九オ)

男水女水

あめはふりくるひはくれかゝるこゝろせきやのさとつゞき
めつきでしらせてさとれといへどさとつてゐながらしらぬかほ
みれんらしいがたゝひとことをいつてやりたいことがある

しみ／＼とあへぬつらさのつくかんしやくよかうもじれたくなるものか」(十九ウ)

男水女土

これぎりしんだら身はぼんのうのいぬとなるかよこひのぐち

ゑんきりゑの木でさかうとしてもほれたどうしにきゝはせぬ

人にやいろかといはれてゐれどぎりをかゝぬがたのもしい

もとをたゞせば他人とた人あらひだてすりやぬしのはぢ」(二十才)

十才)

男水女火

ひとにうちあけわたしのくるふはなせばおまへのはぢばかり

せなかそむけていひたひこともがまんして寝るそのつらさ

すみをつぎ／＼火箸をふであつ男のかしら文字

きやうに田舎もあるゆへわたし見たような女もぬしのつま」(二十ウ)

十ウ)

明治廿二年三月十日印刷

同年同月十五日出版 定価拾銭

版權所有

著作兼発行者 愛知県名古屋区門前町七十四番戸

浅見鉦太郎

印刷者 愛知県名古屋区新柳町八十二番戸

吉田鏡輔

発兌者 愛知県名古屋区門前町三百十番戸

松田幸助

売捌所 同門前町三丁目

文昌堂

売捌所 同町二丁目

文書堂

画工 同県同区住吉町

今江春近」(奥付)

二十四、風流歌曲通人世界(明治二十八年。活版本。)

風流歌曲通人世界

東京盛花堂版」(表紙)

都々逸

真面目に顔をばあはした年始そふ日の稽古をする心

主と添はれる縁談ばなしきかぬふりしてつく手まり

添ふて余念もなきはたらきに可弱い手にさへ出る力

他人がましくあらふた猪口も塵があるとの実意から

素人苦勞人と言はんすけれど雪といふ字も墨で書く

忍ぶ恋路をおか焼きもちか氣障に白眼（にら）める雪だるま

兎角うき世は苦がたのしみとおもひ直してまた惚る」（三頁）

思ふことさへ言はれぬ口で虚言（うそ）がつかれる筈がない

夕日に照され時雨に降られすゑににしきを着る紅葉

この樹ばかりが桜じゃ無ひと言つて見替る花はない

月のまことはうつらぬはづよ池にや浮氣な草がある

一日も啼かぬ日はなし人こそ知らね奥山住居（すまゐ）の時鳥

惚てはだかで寐るのじゃ無よ汚してならない借た衣（べ）

わしが亭主をそしるじゃ無が馬鹿で不実でおんな好

わしが女房をそしるじゃ無が胡臭出ツ尻ぶしやう者

間夫といふ字を亭主と仮訓（よま）せすこし早いと左り仮名

傾城の落す涙をすゞりへうけて身代限りの札を書く」（四頁）

二人寐る夜は玉子のやうだわたしや肌身（しろみ）で君を抱く

幼なこゝろに覺へた唄のいまはもんくが身を責める

義理といふ字に白眼（ねめ）つけられて言たい事さへ言兼る

顔の色みるに附ても堪忍さんせ苦勞する主させる妾

恐赫（おそし）に書たか但しは実か添れにや死ぬとの此手紙

れぬ

深くなつたるその水源（みなもと）はわづかなみだの一としづ

く

東まくらはわしや氣が済まぬ其処は朝日が早くさす

今朝は掻くまい寝みだれ髪をぬしの手枕ふれしまゝ

起証誓紙をこの手で書けと親は手ならひさせはせぬ」（五頁）

すゞりとり出し写真をながめ落るなみだで墨をする

硯ひきよせ菓子喰ひながらぼつ／＼仕込の無心ぶみ

造り上手で咲かせたよりもいつそ野末のみだれざき

兎角うき世は儘にはならぬほどのよい人じつがない

お粗末なれどもわたしの男どふも人には貸しにくい

親の遺体に愉快をさせておれほど孝行なものはない

影もかたちも消えれば元の水とさとるかゆきだるま

鷺かからすか分からぬ中にはたの小鳥がやかましい

妾（わたし）のお出額（でこ）が次第にふとり転（こけ）ても

鼻うつ世話はない

うれしがるとか喧嘩をするかはたでわからぬ猫の恋」（六頁）

義理といふ字はしみ／＼つらひ逢ば逢れる中なれど

露にしつぱり寐ている花をおこすすゞめの門ちがひ

惚て惚られてなほ惚まして是より惚よがあるものか

人のしやくりで切れるななぞと奴胤ではあるまいし
実にかゞみは正直ものよ笑ひがほすりやわらひがほ
なんで世界のたからであらふ好いたおとこを嫌ふ金
たつは蠟燭たゝぬは年期おなじ流れの身じやけれど
濡るゑにしかあいノ傘もほんにうれしいにわか雨
斯すりや斯して斯なることゝしりつゝ斯して斯なつた

二人につこり盃洗とつてすくない水をば手にそゞぐ」(七頁)
五月蠅(うるせい)やつだよ己(おい)らは外にチャンと確然
(たしか)な色がある

そふてすがたがかわりはせぬかなぞと手桶でみづ鏡
添ふて漿(かね)をばつけつゝおもふ子供あそびの茄子の皮
顔に切らしたなみだの をうれしう手に見る新世帯
口を開いてわらつて見せて手を出しや針(とげ)ある栗の毬
膝へ来た子をつくノゝながめ切て退けとはどう欲な
おんなものゆへ貸れぬ足駄きてんきかして降る夜雨
妾(わた)しや気懸り夫婦は二世ともしや此世が二世目かと
しめたい思ひが天までとゞきぬしを帰さぬ今朝の雨
ゆふべ食たる玉子のあだを鶏がはやなきしておこす」(八頁)
壁に書たるそのからかさでいつか広がる人のくち

小ぬか三がふ湯屋でつかひ翌日(あす)は髻いりするつもり

羽織よ着せても半纏きてもなどゝ彼奴(きやつ)めが誉やがる
愚痴も言ふまい恪気も為(し)まい人の好くひと持つ果報
己惚(うぬぼれ)かゞみで見えてさへ是じや振れる筈だとおもふ
顔

つねるその手もまた爪弾きも恋の手だてに遣はれる
旦那今ばんお上がんない罪になります素どほりは
意気な声だと障子を少し明けて能く見りや此方の人
帰さぬ帰ると引あふそでが切れてピツクリ覚るゆめ
声が高いとおさへる手から漏れて世けんへたつ浮名」(九頁)
入れておくれよ痒くてならぬ妾し一人が蚊帳のそと
アレサおよしと払つた其手いつかまくらの下になる
月をまねいたすゝきも今は世事にくすぶる炭だわら
蛇に女房がなられちやアこわい色はしないと諦めた
留守をつかつて朋友(ともだち)よかへしあとで舌だす若ふう
ふ

恪気するなら証拠をお見せ胸におぼへの無いわたし
わたしの生れは上方なれど気象は負けない江戸の水
ついでが有から昨晚(ゆうべ)の傘を何処(どこ)へ返そと才
ツに焼く

ぬしは口中わたしは腋臭ほんにふたりはくさゐなか

可愛さうだよしら齒で懷妊(みもち)きけば亭主がないそうだ」

(十頁)

唾をつけつゝ毛を撫であげてグット突込む筆のさや

やなぎがくれのアノ三日月は凄い筈だよやみあがり

韓信が股をくゞるも時世と時節踏れた草にも花が咲

膝枕一寸はづして莞爾(につこり)笑ひ寐るなら妾(わた)し

の肘におし

そふた揚句に出た梅毒がなほりやおまへがあごで蠅

仇な立膝鬢かき上げてわすれチャいやだよ今のこと

寐ると言てもまくらは貸さぬ恋しがらせて意趣返し

顔に桜をほんのり出してそんなら貴郎(あなた)と言つたきり

ながい着物をみじかく着てもこゝろで錦の綾を取る

耳でながめて目でも言ふて涙は奥齒で噛みしめる」(十一頁)

口で言ひかね目で通じかねソレと火鉢をひざで押す

きみは今ごろ駒下駄はいてこへも高尾のそゝりぶし

行燈ふき消しアレばけものと言ふてとりつく主の膝

末のすへまで案じるよふな深い惚れよをするものか

初の御見の一座のなかで言はずかたらずおもひざし

間夫をかへした足あとだけは早く消したいよるの雪

積る程深くなるとはよい辻占よ初のごげんの夜の雪

言ふもはづかし言はねばつらし思ふ心が知らせたい

梅をこよみに来て啼くとり初音うれしい今朝の春

ぬしの来るのは闇でも知れるまして今宵はおぼる陰(かげ)」

(十二頁)

親にまさりしこの児の器量夜なべ仕事によく出来た

己(うぬ)が勝手にしこたま喰ひはらが張つたもよくできた

つらいお客や主人の氣づまともおまへの為ばかり

つとめする身は恨まず急かす体だいにすへながく

字余り都々逸

凡そ赤い物なら書生靴下おさんの頬ぺた、甘露入りのゆで赤豆

(あづき)に娼妓(ぢよらう)の襦(うちかけ)、丹頂の鶴の

首、はづかしさふなる顔の色

よし原の藤八拳は娼妓(しようぎ)がきつねで、お客を化しお

金が無くなりや一昨日お出でと肘鉄砲」(十三頁)

色が出来たとアノマアどふして夫はアア滅相もない今時のむす

め子供は油断がならぬじやアアないかいな

不忍の池には数年大蛇が住む蛇さう蛇がその大蛇が女蛇々か男

蛇々か何ン蛇か彼ン蛇か分らぬ蛇

異見しやんすな異見は止なよ家を出りやモウ忘るゝ豆腐にかす

がい糠にくぎ戸板に豆だよつべこべ言ふだけ無駄なこと

可笑くもありわらはれもせずそりやマア何であらふ葬式（おとむらい）の提灯持が屁を放（ひ）つてのではアアないかいな
間違へばまちがふものだよ、稲妻ゴロ／＼雷ピカ／＼蚊帳」（十
四頁）や鼻釣れ臍たて、線香かくせ

間違へばまちがふものだよ石が流れて木葉が沈む今朝も田甫で
狐が三びき子供にだまされた

間違へばまちがふものだよ年の頃のクリ／＼した眼のクリ眸
（だま）の八十ばかりの人を背負つた棧留縞の風呂敷なんぞを
此埴（こつち）の方へ来やせぬか

文句入都々逸

恋は思案の外とはいへど（おはん）浮名を流す川水も桂にあ
らぬ綾瀬川」（十五頁）ふかくなるほど身のつまり

くはせ者とは知りつゝほれて（喜撰）世事で丸めて浮気で捏
て小町桜の詠に飽ぬ」あきが来たならば手切れきん

あめの夜道も人目を忍び（花車）妻戸たゝかば誰ぞとも言で
明て霜夜の睦言に」七ツにやうたうよ家つ鳥

親とおやとのゆるしをうけて（三番叟）さて婚礼の吉日は縁
を定めの日を撰み」おつとじや妻じやといはれたい」（十六頁）

すねて背中を向ては居たが（富本松かぜ）鳥が唄へば別れが
いやで」とほしかねたよ此がまん

未練らしいが寒くて成ぬ（端うた一中くずし）よつでの垂（た
れ）をおろしても又もなきゆく明がらす襟にかぜしむ衣紋坂」
見かへる柳も小手まねき

改進なさいと諫言（いけん）をすれば（十段目）エーちよこ
ざいな諫言だて無益の舌のね動かすな」（十七頁）浮気や自
由の権でする

たまに逢たに本意ない別れ（しん内）身にしみ／＼と愛しさ
に肌を放すはいやなれど」内のおしゆびに是非がない

確（しか）と結んだこゝろで居るが（清もと）兎にも角にも
世の中の移り易いは人心」空どけしさうな繻子の帯

待合ざしきの酒宴（さかもり）すんで（清元）是がたのみと
手をとりに」（十八頁）晴てたのしむ好た同士

わたしや苦界のうき川竹に（賤はた）夜毎のまくらかはしま
の数かく水の文きしよう」実をつくすはたゞ一人

口惜（くやし）けれどもお髯にじやれて（壬生村）いやと云
たら父さんの為に成らぬが悲しさに」ころんだ果には木魚講

最はや来る頃なげ遅かるふ（清もと）そもや二人がなか／＼
はこゝろで焦れ待ちあ」（十九頁）かし」逢へばくぜつで夜を

あかす
多い人目を首尾して逢ふて（落人）きつゝ馴にし振袖の」お

びを解くのはぬしばかり

ぬしじやしみノ、苦勞をしたが（一）中ぶし）妾も元は廓にて
面白い事華麗（はで）な事訳のありたけ仕つくして「今は堅氣
の夫婦（めをと）づれ

鳴な鶏まだ夜は明ぬ」（二十頁）（「キヤリくずし）あけりや烏
が告わたるノ、」早く返すも人に寄る

百夜通ふてサテ情なや（しん内明がらす）たとへ此の身はあ
は雪と共に消るも厭ねど此の世の名ごりに今一度」逢て怨が聞
せたい

恋の欲目かおまへのなりが（賢女）三千世界をたづねても又
とあるまい殿ごぶり」業平さんでもかなやせぬ

ぬしと別れのそのきぬノ、は」（二十一頁）（清もと）すがる
袂もほころびて色香こぼる、梅のはなさすがこなたもにくから
で」かいるノ、も五六度

おつにからんで持こむ言葉（十段目）夕顔だなのこなたより」
ぬつくと出たる情夫（まぶ）の兄

詩入都々逸

およばないとは夫りや氣の弱い（何時遇嘉風到日。龍門何必可
難登」）（二十二頁）鯉もじせつでたきのぼる

見送りや見かへり涙となみだ（不知双淚辭親日。正是丹心報國

年）あかぬわかれの明がらす

風がもて来る二かいの端うた（燭暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌
声）おもひある身のむねにくぎ

おもいせまつて写真をながめ（憂愁攢枕夜逾長。不許夢魂歸故
郷）問へどこたへはなくばかり」（二十三頁）

とゞめ兼たるわかれをかこち（君去春山誰共遊。鳥啼落水空流」
たより待つ身のものおもひ

あふて嬉しきまくらのひゞき（春風桃李花開日。秋露梧桐葉落
時）夢をさました風のおと

苦勞しつくしたまさか逢へど（仗劍千里行。微軀敢一言。曾為
大梁客。不負信陵恩）ひとことわたしにもの言はず

見るもうれしいこの月かげに」（二十四頁）（昨夜風開露井桃。
未央前殿月輪高。平陽歌舞新承籠。簾外春寒賜錦袍。」ぬしの

肌着をかり寐して
気がねいらすのこのさし向ひ（大道直如髮。春日佳氣多。五陵

貴公子。双々鳴玉珂）うれしおもひじやないかいな」（二十五
頁）

明治廿八年六月五日印刷

全 全 年全月九日發行

全 三十年十二月十三日第六版

全 三十一年十二月十一日版權讓受

版權所有

通人世界

編輯者

東京市京橋区中橋和泉町四番地

奥村金治郎

発行者

全 浅草区左衛門町一番地

印刷者

岡村庄兵衛

全 神田区柳原川岸式拾貳号地

角張敬四郎

発売所

全 浅草区左衛門町一番地

盛花堂